

今月の編集〈あごら〉松山



たかがPTA・されどPTA

ある新設小学校服装検討部の100日

今どきのPTA—わたしたちの実践—

制服談議

子どもをめぐって



“国際化時代”というけれど

奥川 睦

九〇年代のキーワードは、“国際化”“高齢化”“成熟化”だという。この三つのキーワードを課題として、上手く乗り切れるかどうか。それが、安定した土台の上に希望をもって、新しい世紀のトビラを開くことができるかどうかの決め手になるというのだ。来たるべき二十一世紀の質が決まる、と。

そういう重要ポイントを、一つ一つクリアしていける保証はどこにもない。高齢化社会へ向かう問題一つをとっても、行政の対応は例によって実に緩慢だ。かけ声ばかりの怠慢、という気もある。そもそも、世界の歴史の中で、誰も、どの場所でも、経験したことのない超過密スピードで、日本は高齢者の社会になってゆこうとしている。その大変さも視野に入らず、予測のつかない事態への心づもりも手薄なまま、どうやってゆくのだろう、と心配になってしまふ。

まして、“国際化”は、世界のさまざまな舞台へ、否応なく、一人ひとりとはび出して行かないでは済まない大問題だ。政治や経済や文化の諸相を丸抱えにしながら、お国の事情（日本だけの都合）でプリーキをかけたり、タンマを決め込むわけにはいかない対外的なからみも大きい。

異文化の中で暮らす時、コミュニケーションの上手くゆくゆかないは、即、死活問題だ。気持ちに触れ合え、日常的に戸惑ったり、自信をなくしたり、違いに驚いたりする経験なくして、コミュニケーションの芽は育たない。

たかがPTAとばかり思っているが、目が離せず、かれこれ十年近く距離の伸び縮みはあるものの、子どもたちの成長につき合う過程で、かかわらざるを得ないできた。二十一世紀を支える子どもたち。この子たちこそキーパーソン。良い環境で育ち、いい教育土壌の中ですくすくと伸び、育ってほしい。その思いからすると、あまりにも貧しい教育風土。あまりにも貧弱な国際化時代。本気で、中身を充実させよう。成熟させるべき実体を見つめよう。子どもたちから、右往左往の学習機会を奪ってはならない。

目次

巻頭言 “国際化時代” というけれど 奥川 睦 1

AGORAZEIN たかがPTA・されどPTA 4

ある新設小学校服装検討部の一〇〇日

新設校開設準備委員になって 日下朱美 19

セーターかブレザーか 24

服装委員会って何だろう？ 清野初美 26

今どきのPTA —— 私たちの実践

私のPTA入門記 大早直美 28

「やっぱり女はだめだ」と言わせないわたしの会長体験記 野澤光江 34

PTAも男社会？ 加納政子 38

紙の爆弾とはいかないけれど——広報誌でPTAを活発に 荒野希里 44

制服談議

制服問題——息子の心にうつったもの 小俣軍平 54

制服について 佐藤 円 59

制服とつき合って十年 仲村乃梨子 60

わたしの制服着なかった体験 荒野希里 62

制服というシンボル 斎藤千代 65

職場での「制服」もんだい——小さな反乱 原ゆたか 66

ダサイ学生服は着たくない子の物語——「ボンタン」を選んだしん 野原まさこ 70

お揃いってそんなにいいの？——制服論から生き方が見える 荒木のり 74

子どもをめぐって

登校拒否から二年過ぎた今、彼は、そして母親としての私は…… 大西千代美 85

最近の大人と子どもについて思うこと 野本美智子 87

時を共有すること 宇都宮真由美 90

めじゃーなりすとのめ 取材最前線——川之江高校甲子園同行記 小倉いづみ 91

フェミニズム英語 レイプと強姦 望月佳重子 92

あごらメイト なりふりかまわずへあごら松山を呼びかけた奥川睦さん 94

松山だより 95

編集雑感——〇〇日間のたたかいを終えて 奥川 睦 99

あごら読書室 106

議員報告 109

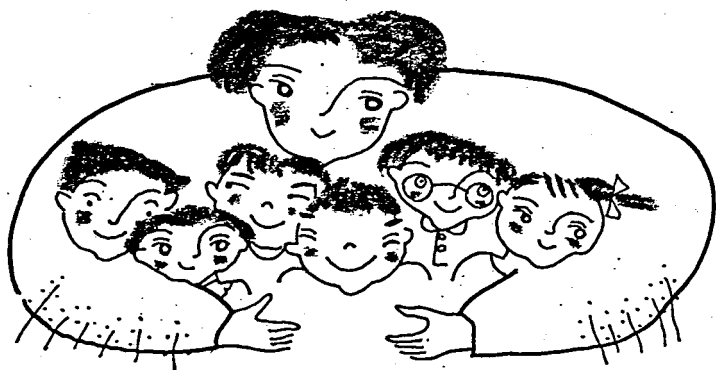
なぜ急ぐのPKO・なぜやめたの政治改革 114

北から南から 118

表紙
カット

真田ふさえ
真田ふさえ
野原まさこ

されどPTA



PTAの原点は

奥川 “再び子どもを戦場に送ってはならない”という親と教師の切なる願いと反省が、ややもすると後援会に堕つてしまうPTAを、P（保護者）とT（教師）が子どものために、平場で対等に話し合い考え合って協力していこうという理想のもとに戦後教育の民主化の一端として脱皮し、新しいPTAは始まったと、私は単純に信じていたのです。そもそもPTAの原点って何なんだろうというところから始めたいのですが。

清川 日本のPTAは上から作られたもので非常に曲がった形になっています。アメリカでは子どもの幸せを願って一婦人、確かな弁護士のお奥さんだったと思うんですが、その人が発案して出来た組織です。日本ではほとんどの人が、学校へ子どもを送り込んだら自動的にPTA組織の中に入ります。アメリカは自由参加ですから、加入者の数は少ないですが活動はすばらしい。どんどん政府にも要求をたて、子どもの幸せのためだ

たかがPTA

出席者

清川義郎（小学校PTA会長／県P連・市P連副会長）

清野初美（小学校PTA現副会長）

野本美智子（小学校PTA元副会長）

日下朱美（小学校PTA元副会長）

古田敏枝（小学校PTA現副会長）

大西千代美（小学校PTA現副会長）

奥川 睦（小学校PTA元副会長）



ったら自分たちが犠牲になっても、いろんな所へ要請に行き、目的貫徹に向かって活動を進めるわけですよ。日本はそういう形のものじゃない。

清野 アメリカはPTA組織率四割前後と記憶しています。

奥川 私の見た限りでは、といっても気をつけて見れたのはモンタナ州の州都ヘレナとケンタッキー州のオーエンズボローでどちらも保守的な所ですが、学芸会を兼ねた仲良しごっこにすぎないという感じを持ちました。ただ学校が常に社会や市民に向かって開かれた場所なので、交通安全や非行防止（主に麻薬ですが）を寸劇にしたり腹話術にしたりは、ボランティアや市民グループの参加で行っていました。そこを見ないと、日本より遅れているんじゃないの？ むしろ……”というふうにだけとらえてしまうんじゃないでしょうか。でも逆に必ずしもアメリカに理想の形があるのでない。

清野 占領軍総司令部民間情報教育部（CIE）が一

九四七年、前年の教育施設についての勧告書に基づいて「PTAの手引書」を作成。呼び名も「父母と教師の会」だったらしいのですが、「児童福祉の促進と教育計画改善のために親と教師の組織を強化すること」がうたわれ、「親と教師自身の協力で」が強調されている。ところが理想の原点はトーン・ダウンしていき、日教組の対抗勢力としてテコ入れされていくという歴史にまでつながっていきます。

清川 日本の場合、原点に帰れといわれても一方的に上から与えられたもので、帰る原点がないとも言えますね。

理想のPTAとは

奥川 そういう背景も考えながらPTA活動をゆがめているのは？

清川 本来の子どもの幸せのための活動ではないというのがまず一点。戦後貧しかったですから、学校の施

設を造る、不自由を解消していくためにPTAの組織が率先して動きまわらなければならなかった。ある時は先生の給与の心配までしていた。でもほんとうにやらないといけないことは、そういう事じゃない。もっと子どもの問題を子どものためにやらないといけない。そのための親と教師の良い関係作りが大切。それと、先生方もいろんな面で規制されて、自由にものがないような状態になっているわけでしょ。その先生がPTAの会員なんですよ。日常の仕事があまりに煩雑で多いこともあって、先生方からの切実な要求は出てこない。積極的にPTAの組織に入りなさい言うても、先生も入れん。

奥川 確かにいつももどかしく感じるのは、事務局の教頭先生と校長先生との対話しかない。もっと本音で語り合いたいのに。支え合い励まし合っていきたいのに、先生たちと。

清川 組織の会員がもっとものが言えて自分の要求が本当に実現できるような場でありたい。それが理想の

P T Aじゃないかと思うわけです。しかし、今の日本の状態ではとうてい無理だろう。社会情勢のすべてを含めてね。頭髮や服装の規制をなくしてほしいというような自主的な活動が生まれてきて、まだP T Aの組織として取り組む形になっていません。でも、そういうささやかな要求が、あっちこちからぼつぼつと出ている。それらをどういふところから捉え、集団の要求として活動を進めていくかが課題です。皆さんがやっている活動が、具体的にみんなに納得してもらって、もっともっと大きくなる。組織的な活動として進めていく必要がある。隣の人と手を組み理解してもらう末端の活動を進めながら、要求をどんどん広め高め、大きな山にしていく。それをドンと声にして行政や学校に届けなければだめだと思いますね。

だからP T Aは本来の姿として変えていかなければいかんと思います。でも、そこまで真剣に考えている人は少ない。県P連の役員会に行っても、ほんとうに一生懸命勉強して出て来ている人は少ない。県のそう

そうたる先生方や各都市連の会長さんが出て来る、いわば県の首脳会議みたいなものでしょ。そこで夏休みの体操を中学生が満足にしない、とかが議題になる。ナンセンスじゃないか。そんなことはそれぞれの単Pで考えたらいいことだ。代表ですらそうですから、今の状態では到底P T A活動を変えてゆくのはちょっと難しい。だけど自分一人でもかまわんから、いろんな形で少しずつ変えていくべきですよ。できるだけ多くの人に応援してもらって、組織を変え前向きに進めていかんといけないんじゃないですか。

P T Aは民主主義を学ぶ場・

組織活動とは何かを学ぶ場

清川 市連（松山市P T A連合協議会）も県連もどの単Pも、それぞれきちとした組織が出来ているわけ。機関車たるべき本部役員（会長・副会長・会計・校長・教頭）が各専門部のパイプ役になり、そこから出て

きた問題を本部役員で討議し、常任理事会にかける。日程から議題まで、きちっとしとかなんだらだめなんです。理事会は大事ですよ。少ない人数でしたって理事会にはならないわけ。総会に次ぐ決定機関なんですから。できるだけ多くの人に出てもらって討論し、決定せにゃいかんです。そういうことを知らない会長さんが多いわけです。ですから、すべて勝手にどんどん進めてしまう可能性が多いんじゃないかな、と思う。清野 会長教育はどうなってる？

清川 新しい人がでるから、知らない会長さんが多いです。もっと新人教育はいるでしょう。でもそれよりは本人自身がPTAはどうあるべきか、組織活動はどういうものか、もっと勉強していくべきでしょう。

清野 学校と自分が話したら、議題もすべて決めていると思っていて、副会長や皆と相談するのは民主主義のイロハだと思うのに、独走、独走。副会長は補佐だから補佐してくれさえすればよいという程度の認識しかない会長ばかり。

野本 副会長は補佐してればいい、意見を言う必要ないって。

大西 声が流れてくるんですけど、副会長あんまり学校にも来る必要ないってね。

古田 本部の方からね。

日下 まかしていても民主的に会を運営していける会長なら、まかせて補佐でいいだろうけど……。

清川 副会長は大切ですよ。

清野 そういう認識だから、PTA全体、組織もPのあり方も何もわかっていない中で、皆やっている。昨年も理事会の前の会もほとんどやらす、いきなり始まったら、各部が年間行事を発表して、それでかまいません。そういうやり方で実際済むんですよ。先ほどの話のように、県P連でもそんな話題で会議をしていると聞けば、ますますPTAは時間の無駄。

清川 無駄ですよ。無駄でもやらんといかんから、腹立てながらも会議しますし、いろいろやっていますけどね。

清野 そういうPTA活動をどう良くしていけるか、建て直しの視点でいえば、もともと各単Pでどんどん活動していれば、市連の機能は限りなく縮小していくのが正しいやり方だと思っていたんだけど、最近ちょっと違ったふうに思い始めたんですね。こんなにPTAは難しく奥深い。そこへ全くの素人がポコッと会長として入ってくる。そこで円滑にやろうと思えば、一つには市連が大きな指導力を持ち、清川さんレベルの幹部が、何も知らずに会長になってくる人に民主的なPTA運営、たとえば本部会もこんなふうにこういう程度開くといった新人教育、会長教育をしてもらえばある程度PTAも動くかもしれない。体罰の問題なんか……。

清川 それ、気持はよくわかるんですよ。でも新しい役員さんに話をしたからといって役にはたちません。人間は理屈で説明を受けてもピンとこないだろう。自分で体を動かし、自分がそういう場面、場面に直面し、経験してみて、なるほどなとわかる。だから「あなた

はこの一年ロクなことやれなかった。やめて下さい」じゃ困るんですよ。「何も成果あがらなかったかもしれないけど、いろいろ問題も難しさもわかったでしょう。二年目には実力を発揮してネ。われわれもやめずに応援するヨ。こういうふうに変えていこうネ」と言えば、会長さんも喜んでやってくれると思います。

日下 でも少なくとも会長というのは、むこう向かずにこっち（Pの側）を向いていてくれないと……。そういう基本教育っていうのは大事じゃないですか。

清川 たしかにPTAは組織としては、学校側、保護者側になっている。でも対決するような組織ではないのだから、日常的なわかり合い、コミュニケーションが大事ですね。互いの立場を知り合って譲り合い、妥協できるところは妥協しあって、間違ったところを直していこうやと直していく。そういうプロセスを組織化していくのがPTAのあり方じゃないかな、大切じゃないかなと思いますね。

清野 それわからなくはないんですよ。でも小さいこ

とで例を引くと、算数セット、あれもすごい無駄。半分しか使わないし、小さい細い棒に一つ一つ名前を書かないといけない。

奥川 私もあれ気が狂いそうで、ダンナにさせたけどね。彼、気が長いからどうにかやれた。

清野 それでPの備品として教室に置こう。そのために親が寄付してくれるか賛成してくれるか、アンケートを取ろうとした。そしたら校長が「学校のことには口出ししてくれるな」と言っ、アンケートもけられませんでした。

清川 それ、おかしい。

清野 どうしたらいいのか。そういう問題を皆でどう話し合えるのか。会長にまったく意識がないので、学校と交渉することもできないという話もよく聞く。そういうトラブル、各部で特に新聞部の企画が学校にぶされるなんてことは、すっごくたくさんどこにでもあるのに、どう解決していくのか。対決しても仕方がないし、なるべくそれは避けたいんだけど。日本では、

とにかく知り合って、何となく円満に進めていくという、そういう方法しか取れないのか。ワーツとソー然となるほど理事会でカンカンガクガク、互いの意見を言い合うといった方法はPTAでは取れないのか。

清川 それは会長の、また校長さんのあり方にもよるとは思うんだけど、僕自身の経験から言っても、一年目ならおそらく学校の言いなりになったろう。何もわからんから。二年、三年たって、校長先生と知り合いだったりもしたけど、学校側といういろいろ対立する問題が出てきた時、今度は言いたいことが言えた。いろいろ要請が出てきたら、「集団の中に出しましょう。常任委員会と理事会に、学校の言いたいことを出して下さい。Pの言いたいこともそこへ出しますから、そこで意見を交わしましょう」とお願いして、手続きを踏み、皆にオープンにして組織の中で話し合って決定する。これが原則ですよ。「校長と会長だけで話し合いで決めるなんちゅうのは、民主的でないからやめましょうや」ということだね。単独行動をとらない。と

らせない”というのが大切じゃないでしょうか。そして

ふだんは、各専門部の活動も、自主性にはまかせているが、決定しないといけないこと、学校に関連したことなどは、集団の中に出す。「こういうアンケートを出したい。皆さんどう思います。学校側のご意見はどうですか」というて、そこで「やりましょう。やめましょう」を決める。その手を打って始めたことで、それに学校が圧力をかけてるのなら、完全に対決しないといけない。「決定してるのに、なぜダメなの」と言わないといかん。でも、その手続きが踏まれずに、単独で「そのアンケートを出しましょう」と言ったんだったら、アンケートの取り方が間違っている。また学校側が「こういう本買います。お金を出して下さい」と何の相談もなしに出したのなら、出し方が間違っている。問題の捉え方が間違っている。だから、それをキチツとした組織の中で解決したら、そういうことは起こらないですよ。

清野 いろんな意味で、PTAは民主主義を勉強する

場所ではあるんですね。

清川 あるある、そのとおり。

清野 主婦は特にそういう勉強の場所がないから。

清川 それに、組織活動について勉強する場所でもあるんですよ。

PTAは壮大な無駄

奥川 私はいつも物事には“たかが・されど”の二面を見るべきだと思っていて、どんな重要なことも“たかが”の視点を持たたいし、逆にどんなささいな事にも“されど”の視点を忘れてはいけないと思っています。で、今確認したように、PTAは大切ですヨというのはわかる。で、私なども仕事を辞めて十年、地域のことともからめ、陰に陽にPTAから逃げられないできた。やればこんなに意味のある楽しい活動が、いくらでもできるじゃないかというメッセージをせめて送り届けたい。でも今までどおりという機械的なスケ

ジュール消化PTAを半歩踏み出すただけに、どれほどのエネルギーが必要か。摩擦をおこさないように、おこりそうな摩擦・おこってしまう摩擦を、マイナスで捉えたり、嫌なムードにならないように、えんえん枝葉末節のことに疲れ果てる。自信のない先生たちにとっては怠慢を突かれるような恐さもあり、まかせておいてという逃げも、応援歌だけ歌ってフレーフレーの旗だけ振っていて、という本音もある。真剣にかかわればかわるほど、言いたいことが次から次へ湧いてきてとめどがない。意味を悟るほどに無力感や虚脱感にさいなまれるという不思議な場所でもある。で、結局のところ、先程清野さんが言われたように、PTAは壮大な時間の無駄という実感に突き当たってしまう。この徒労感をどこから溶かしてゆけるのか。問題点を探ってゆきたい。まず役員のなり手がないということから。

清川 まず子どものために真剣になれる熱心な人をトップに選ぶ。そしてそういう人に二三年続けても

らう。一年ではやっとこんなもんかとスケジュールがわかるだけ。ここを改善してゆこうということにはならない。あなた方のように真剣になれる人を選ばなければ。

日下 真剣になるとつぶされるという現実も。

清川 それはまだ、本当の仲間が少ないからでしょう。うちへいらっしゃい、一緒にやってあげます(笑)。

日下 来て下さい。こちらの学校へ(笑)。いや、現実には今のPTAは後援会なんですよ。バザーなんかは熱心で。おまけに原則論から言えば、公教育ではおかしな話なんですけど、本物の後援会まで出来て資金作りに明け暮れるといったような。去年一年やって、後援会が二つあるというのが実感です。ただ特別委員会というのを担当して、とても面白かったんです。もともと新設小学校の服装検討部から出てきたんですけど、服装から始まってほんとうにやりたい教育問題がどんどん出てきて。

清川 それ、いいことじゃない。

日下 楽しかったんですけど、当然、風当たりも相当キツイ。

清川 どんな活動をしたわけ？

古田 専門部以外のさまざまな問題です。新設開校までに服装が決まらず、特に夏服が、自由服にするか標準服にするかの論議で決着せず持ち越したんです。それで、開校一年目、どこからどんな問題が出てくるかわからない。それらをもろもろ合わせて検討する場所があるということで、特別委員会というのを設置したわけです。

日下 お母さんたちから服装の問題をこえて、クラスの中の子どもの問題―体罰などの悩みも出てきたりして……。

大西 先生方とじっくりお話のできる場や機会があれば良いんでしょうけど、例によって先生は忙しい。T抜きのPだけの会になってしまふ。上がってきた問題をTの側は突き上げとか批判にとってしまふ。Pは一生懸命討論し話をした結果なのにと不満。で、降って

湧いたような激論。いきさつを知らない人はコワー。学校もつぶしにかかる。

清川 圧力団体みたいになるからよ。

大西 というよりは、もともとバザーや運動会などの行事を円滑に運ぶための部としてしか学校は捉えたくない。母親の声を吸い上げて、活力あるPTA活動にしたいのに……。

清野 教育の問題、子どもを取り巻く問題は山とありますよね。

清川 通学路と交通戦争。Q²などによるゆがめられた性教育。肥満や小児成人病の原因にしかない高カロリーのジャンクフード。

奥川 子どもが学校へ行かない、行けない。

清野 遊び場がないこと一つでもPTAとして全市で取り組むとかできないでしょう。

清川 できないですねえ。

清野 あまたある子どもの問題のたった一つもPTAは解決できない。それで一体PTAは何やってるの??

ということに当然なる。何一つ満足のいくことがない。だから役員のなり手がない。

奥川 面白いことなら人は寄ってくる。子どものためになることなら、しんどくても絶対やる。でも何年かごとに必ずPTA不要論は沸き起こってくる。無駄だったら解体しろと。

清川 参加したい人だけ、本当に子どものためにしたいという人だけが、力を合わせてやるほうが理想の形かもしれないね。無関心な親に目覚めてもらうのは、ホント大変。

大西 隣り近所の無関心派を取り込めるかっていうと……。

清川 大変ですよ。まだまだですね。

奥川 親の切実な声が生けない、届かないということもありますね。

清川 僕の所も、不満がスナリ言えるように、三、四か所にPTA意見箱を置いてるんだけど、全然入らない。

一同 意見入らないでしょう。やっぱり。

清野 期待が全然ないもの。

奥川 それもあるけど、入れても握りつぶされると思われていのもある。事実そうでもあるし。だからかなりフォロワーがいる。どうせ学校にケラれるという考え方も強い。やる前からどうしてそう決めつけるの、という励ましの段階から企画を掘り起こし、粘り強く学校とも交渉し、キツくてもやれたねという充実感を手にする。そういう手応えを一つ一つ積んでいくことしか他にやりようがないんじゃないか。今のままのPTAでは魅力ナイ。楽しそうでナイ。面白くナイ。ほんとうの子どものためにはなってナイ。教育のために大切なこともできてナイ。

魅力あるPTAへ

奥川 ナイナイづくしの現状をどう魅力あるPTAにしていくか。してゆけるかという次の段階へいきまし

ようか。

日下 何が魅力かという中身の問題もあるし。

奥川 そうですよ。まず「魅力あるPTA」とはという議論があって、次にそれを阻むものがあるのなら、その阻害要因は何か。そして魅力を削いでしまうものとどう取り組み、どう克服してゆくかという三段論法でいくしかない。これさえできれば、「同じアホなら踊らにゃ損！損！」とばかりに役員のなり手はいくらでも出てきてくれる。いやそうな顔をしていても、結構やりたい人いるんですよ、ホントの話。すごくエライ校長先生や教頭先生が低姿勢で、「お世話になっていきます」と、揉み手せんばかりに会うたび言ってくれますからね。自分が偉くなったような錯覚に陥る危険性は高い。で、張り切って頑張る。子どもことや教育の視点はそちのけで一生懸命になる。なにしろ男のヨイショをするのが女の役目ですとたたき込まれて育ったわれわれですから、その人たちには特にトクイワザ。それが理想のPTAだったりして、と皮肉を言

いたくもありません。

清川 冗談はおいといて、実践的に言えば、トットちゃんスクールじゃないけど、本職の魅力、その道を極めた人を日本の教育の中に取り入れ応援してもらう…。奥川 そのためには小学校の先生たちに自信があって受け入れられる度量がいるでしょう。

清川 そうじゃない。私の所ではやろうと進めている。それで、自分の子どもも参観日に行きたい先生の空いた授業を埋める。そんなこともできるPTAでありたい。そうでないと意味がない。

日下 はたしてそれで自分の授業を放ってまで、わが子の授業参観に行けるでしょうか。

清川 それは今できてないから行けない。でもその先生だけじゃなくあの先生もこの先生も行くようになる、というふうに具体的に要求を変えていったら、当然の要求として言えるようになる。職場放棄じゃない。自分の生活の権利を主張して守るわけだから。子を育てるのは親の責任であり権利。先生だからそういう権利

を放棄しなさい、はおかしい。

大西 親睦会なら、やっとしぶしぶ行かせてくれる程度なんだって。それじゃ先生もお母さんなんだから、かわいそう。でも先生自身は意見が言えない立場なんだって。

日下 それはおかしい。

大西 おかしくっても、それが現実で、システムみたいになっっているから……。人員不足とかいうのもあるんでしよう。そういう現状を、母親のほうから市なり県へ意見を持っていつてあげて改善へ向ける。

日下 お母さん（先生）自身の問題だと思うけどネー。

清川 女性の権利が一つ通ってたじゃない。産休の一年が。

奥川 あれは、女性の労働条件なり人権の問題として掘り下げて出来た法案ではない。例の一・五七出生率の低下。戦時中の産めよ増やせよと同じ発想で、産休延ばせば二人目、三人目産んでくれヨカナ、からきてるんだから、根本がズレてる。評価できない。（笑）

日下 その問題、やっぱり先生自身の問題だと思うけどネー。たとえばPTAの場で親と先生が子どもの教育をどうするか話し合う、そういう場所に出ていきたいというのだったら、赤ちゃんのお守りを引き受けるとかで、どんどん支援できるけど、カリキュラムの中のローテーションみたいなことまでは、PTAでやることと違うんじゃないかなー。

奥川 それはそのとおりの理屈なんだけど、大西さんが言おうとしているのは、自分も子どもを育てた母親なのに、先生に対しては、素朴な母親を認めてあげようとしないう女が結構いるということなんよ。逆にもっと足を引っぱって、新婚早々の女の先生だったら産休とられるかもしれんし、男の先生が良いみたいなのことを言ったり行動したりするわけよ。女が本当に女を支えているかどうか、別に女が女でなくても、人間すべてお互いに支え合っていかなといかんのに……。

清川 そう。同感。

* * *

奥川 本当に支え合っているかどうかというハートの問題は、やっぱり大事。私も以前、娘の担任の先生がおめでたで、放ってたらブツブツ文句だらけの雰囲気になる。そういう薄っぺらな価値観で短兵急に子どもを、子どもの将来を考えるのはやめましょう、の思いで自分が流産してつらかったこと、結局仕事続けられなかった体験も含め気持ちよく先生を支えたって、クラスのお母さんたちにお願したら、文句一つもなく、今でもその先生には感謝してもらっている。そういう気持ちでいても、支え合えない、支えてあげようのない先生もいる(笑)。私も現役時代そんな教師の一人だったりのかナート、ウーンと考えるんです。まうことしばしば。心の底にそれぞれ隠しもっているエゴはどうしようもなく、こういう小さな積み重ねのたびに、少しずつ固いものを溶かして行って、柔らかいハートの部分を増やしていきたい。筋違いだという理屈は置いといて、私のようなお調子者がもっと

たくさん出て、この指止まれと立てた指に集まってもらうことも必要だし、それぞれの個性で役者は入れ替わり立ち替わりPTAの土台を造り、裾野を広げていてほしい。否定しがたくばかしい世界ではあるんだけど、苦勞もせずになかったようなことを言う人を私は好きになれない。悟ったような高みの見物をやめ、飛び込んでみてほしい。そして「あの人好きなんだからやらせといたらいいのよ」にならないよう、いつでも一人の母親、一人のPTA会員でいたい。学校とのパイプ役になるつもりでも、自分がパイプつまらせたりして……という自己チェックは常に必要。でないといつの間にか役員の一人になってしまう。役員だけがバタバタ忙しい役員PTAから脱却できず、意識が広がらない。PTAの裾野がひろがるわけがないと、まあ、偉そうに先輩っぽく説教たれさせてもらって、現役でこれからも頑張ってくださいる皆さんへのエールとしたいと思います。お忙しいのに、長時間お付き合いくださってほんとうにありがとうございました。

ある新設小学校 服装検討部の100日

●父母の教育権

・両親はその子どもに与える教育の種類を選択する優先的権利を有する。

(世界人権宣言 第26条第3項)

・子どもの教育および指導について責任を有する者は、子どもの最善の利益をその指導原則としなければならない。その責任は、まず第一に、子どもの両親にある。

(子どもの権利宣言 第7条後段)

・この規約の締約国は、父母……が、……自己の信念に従って子どもの宗教的および道徳的教育を確保する自由を有することを尊重することを約束する。(市民的および政治的権利に関する国際規約)



新設校開設

準備委員になって

日下 朱美

「今度の学校、私服だといいねー」。過ぎし秋の穏やかな一日、子どもたちを遊ばせながらの、友人との会話の一端です。

ただただ、子どもらしい伸びやかなイメージから出た言葉。そんな漠然とした思いではありましたが、しかし、今思い返せばそれはその後の私の言動を予兆していたように思います。

時は、一昨年の十月に遡ります。「新設校の準備委員をやってくれないだろうか」と、ちょっと考えてか

ら引き受けました。PTA会員とは名ばかりだった私ですが、そのあり方については少々疑問を持ちつつあった時でした。まさにチャンス到来というわけです。

準備委員には、H、M両校PTA代表四十名と、両校区代表者十二名が選出され、PTA代表四十名は、四つの専門部会（服装検討部、通学路対策部、PTA組織検討部、財務検討部）のどれかに所属し原案作りに取り組むのです。

私は服装検討部を選び、晴れて（？）メンバーとなった次第ですが、「アア！これが苦難の始まりになるうとは、つゆ、知らない私ではありません。

当部会の重要課題は標準服採用の是非を徹底的に論じようという所から始まりました。M校校長、H校PTA会長兼、開設準備委員長（共に男性）、両校PTA四名ずつ（女性）の計十名は、「まず、何をどうしよう」から議論し、女性陣の「この際、おもしろい私服にしたら」「でもハデにならない？」等の意見が

飛び交うなか、やはり総意を問う意味から、アンケートをとろうということになりました。この時、十一月二十日第一回準備会のことです。この日以来、翌年の三月十六日第五回準備会終了まで、何回会をもったことでしょうか。参考までに記しますと、公的資料に残されたもので十二回、それ以外に女性陣だけで喫茶店などで十回以上は集まっているでしょう。実によく集まり、よく議論したものです。

かくて、アンケートは出来上がり、さて、集計の結果は、必要派二百九十八人、不必要派百六十一人、どちらでもよい三十九人となりました。必要派が多かったものの、不必要派の理由は多々あり、その内容は納得させられるものばかりでした。また、採用した場合の意見や要望（材質、色、型）なども多数でてきました。部員一同、結果をもとに検討しましたが結論には至らず、やはりコトは多数決で即決できる問題ではないのもっと勉強してみようということになり、市内の私服採用校三校（道後、八坂、東雲）へ見学にも行

きました。子どもたちは、思い思いの服装で個性にあふれ、（意識の有無を問わず）自己を表現し、よって個人が生きてる！と思いました。でも、トレーナーの上下を着ている子を評し、「パジャマのようでダラシナイ！」っていった人もいましたっけ。

さて、それからの作業は標準服、私服の長短を洗い出し、私服校見聞記を載せ、両校統一した文面で再アンケートをとることにしたのです。

* * *

再アンケート実施にあたっては、学校からの妨害とも思える数々の干渉を受けましたが、出したい一念で耐え忍んだ私たちでした。

さて、その結果は、あったほうが良い二百九十人、ないほうが良い二百十四人で、不必要派の大躍進を考慮しても、必要派が多数を占める事実は変えようありません。私たちはその持つ意味を熟考の末、結果

を尊重し採用するが、あくまでも標準服でその範疇を越えない”との結論を出しました。

年明けの一月十九日の準備会では、正式に採用の決定をみました。しかし、四二%の不採用意見を配慮すること、また制服ではない標準服であることなどを、確認し合いました。

その後は業者選びから始まる具体的作業に入るわけです。まず、五社選定し、P R公聴会を開きましたが、その選定基準は地元優先も含め広くという意味あいからだったと思います。業者間の受注競争は熾烈らしく、その種の醜聞も見聞きました。また、決定の条件として企業努力している社、特定業者に偏在しないように近在の学校との関連も、考慮しました。

標準服決定時の部会には、服装検討部以外の部の担当で当部会には無関係なはずのエライ方々（市教委指導主事から新設校現教頭、H校両教頭、M校PTA会長）も、なぜか同席されておりました。わが部員でもあるM校校長、H校PTA会長も加わり、みことなま

での意見の符号さに改めて、そのウルワシイ関係が見てとれた思いがしたものです。

私たちは、従来の非活動的なブレザータイプの上着に替わるものとして、セーターを提案しましたが、この時の特にM校会長の意見などは、「そんなモノにするのなら、いっそ自由にしたほうが良い」という、大賛成もので混乱ぶりが伺え、その裏に意図するものをいっそう強く感じたのでした。

まあ、そのような議論の末に、紺のセーター、白のポロシャツ、紺のスカートにズボン、靴も靴下も自由という標準服像が出来ました。業者も決め、次の準備会に報告する用意が整いました。

* * *

忘れもしない二月五日、第四回開設準備委員会の当日です。会場であるH校に着いた時は、その開始時間にも充分間があり、私と友人は適当な場所に座り、雑

談に興じていました。その時H校教頭から学校別に座るようにとの指示がありました。いつもは各部がそれぞれまとまって座っていたのです。未だかつてないことに不審に思いながらも席を移しました。やがてわが副部長が、箱やら袋やらを抱えて現れ、私に、部長は休みだと告げました。会も進み、わが部会の報告に移ります副部長が前で服の見本を一つ一つ掲げブレザーの持つ難点を指摘しながら、セーターに決まっていたきさを説明していたその時、です。H校校長がつかつかつと、その場まで出たと思いきやブレザーを掴み、「上着というのはコレ、でしょうが!」と振ってみせながら言い、またセーターは上着じゃない論をブチ上げ自席へ帰って行きました。さて、次は土地改良区長の出番です。ただ伝統的見地からのみ、制服の良さを言い、まあこの世代ではさもありなんと思いつつ拝聴いたしました。続く男性副会長にいたっては「これぞその極み」といふべきもので紅潮した顔、キンキン声の激しさで、「セーターは下に着るもので、上着など

とはとんでもない」などと、とんでもないゴ意見で、
「オンナ黙らせるにゃこれしかない」とばかりの態度
なのでした。と、まだまだやりとりは続くのですが、
こちらにとって、形勢不利は明らかです。ほとんどの
ブレザー擁護論は、H校の男たちばかりのこと、司会
者（H校PTA会長）のアンフェアなこと、前記の不
審な件などから、ようやくここに至ってシナリオが組
まれていたことに気づくのでした。私たちは防戦一方、
まとまった見解も出せぬまま、ただ時間ばかりが過ぎ
るのでした。結局、両方とも標準服の提案がなされブ
レザーになるよりはと、妥協してしまったのです。時
は既に夜の十時を過ぎ散会となったのですが……。

* * *

と、ここまで手元に残した資料や、記憶を頼りに記
してきましたが、標準服問題の一向に進展しない理由
は、この日のことからわかるでしょう。改善を求め
る声にも耳をかさないばかりか、P（親）の教育権そ

のものをなきものとする姿勢には怒りを覚えました。Pの努力を、権力という土足で踏みにじった学校管理者たち。その背後の行政権力者たち。また、それを支えるPTAトップの男たち。

私たちは、ことの本質をしっかりと見つめ、自らが主体性をもち、個を確立し、教育権を再構築しなければなりません。学校を聖域視することなく、教師と共に保護者すべてが考え合うことこそが、子どもを救う道だと信じています。

わが娘たちは、まったくの自由服で一年間通学しました。その持つ権利を高らかに掲げ、それぞれの個性を際立たせながら……。

標準服から世界が見える、これって私のただ今のジツカンなんです。

最後にサラダ記念日Pバージョンの駄作を一句。

男たちが プレザーがいいと言ったので

二月五日は クヤシー記念日



セーターかブレザーか

——論争決着つかぬまま

二種類の標準服 制定する妥協案

両派に割れて激論

時計の針が午後十時を回っても結論は出なかった。

二月五日、松山市内にある小学校の一室。開校を間近に控えたA小学校の標準服をどうするかについての話し合いは、「セーター派」と「ブレザー派」に割れて激論になった。

話は前年の十一月にさかのぼる。市内の新興住宅地に新設されるA校の開設準備委員会が発足し、児童を転入させる既設の二小学校の父母、教師ら計約四十人が服装検討部会など四つの部会に分かれて新しい学校の在り方の議論を始めた。

父母にアンケート

服装検討部会は、まず「標準服を定めるべきかどうか」からスタートした。部会で意見がまとまらなかったで、年末には父母アンケートを実施した。「私服は華美になりかねない」「標準服だと私服のように何着も買わずにすむ」「標準服に多いブレザーでは活動しにくい」「一着の値段が高い標準服は逆に不経済」など、いろんな意見があり、標準服の制定について、賛成二百九十人、反対二百十四人だった。この結果を踏まえて、同部会は「標準服を定めるが、ブレザーではなく、活動的なセーターにする。私服を着る自由もある」との結論を導き出した。

二月五日の激論は開設準備委員会の全体部会が舞台だった。服装検討部会で「標準服はセーター」と決まった経緯が説明されると、教師とPTA幹部から「ブレザーこそ標準服にふさわしい」という意見が相次いだのだ。服装検討部会の委員は「十分な議論を尽くし

て決めた」と反論し、全体部会は三時間を超えた。

松山市内の小学校四十三校（分校を含む）のうち自由服の三校を除くと、残りはすべて標準服を制定している。同市教委は「標準服をどうするかは、父母と先生が話し合い、各校で決めればいい」としており、原則的には標準服を制定しなくてもいいことになっている。しかし、教師の間には「社会ルールを守る意識を育てることが大切で、標準服もそのワンステップ」との考え方が強いという。

「強要が実態」の声

子どもの自主性を尊重すべきだ、と訴える市民グループ〈愛媛の制服を考える会〉は「標準服といいながら、事実上は私服を認めず、何が何でも標準服を着せようと強要しているのが教育現場の実態だ。A校の混乱は、多くの小学校が採用しているブレザーを標準服にしたい、という思いが先生側にあったから起こった。

少数派のセーターに決まった場合の世間の目を恐れただけだ」と批判する。

A校では結局、紺色のセーターとブレザーの二種類の標準服を制定する妥協案がまとまった。しかし、論争の決着はついておらず、私服を着る自由を含め特別委員会で話し合いが続いている。真新しいA校に通う子どもたちは標準服のセーターとブレザーがほぼ半々、少数が色とりどりの私服である。

* * *

「子どもの人権」の大切さが世界的に問い直されている。国連総会は昨年十一月、「子どもの権利条約」を採択、条約は今年九月に発効した。四日から始まる人権週間を機会に、子どもが一人の人格として尊ばれているかを、四国の現状から五回にわたって考える。

（朝日新聞愛媛版 「子どもの人権①」

九〇年十二月四日より転載）



服装委員会って何だろっ？

清野 初美

一九九一年は、自分たちの足元を大切にして、地域でやるべきことにじっくり取りくんできたいと思います。

標準服はPTAの服装委員会で決めたと言われますが、服装委員会の中身はどうなっているのでしょうか。民主的な手続きによる服装委員会なのでしょうか。松山市のみどり小学校新設に際しての服装委員会は、服装委員になられた方々が夜遅くまで連日討議に討議を重ね、自由服の学校見学、二度のアンケートなどの努力の末「標準服はセーターで上着は自由」という結論を出しました。ところが新設校準備委員会の全体会で民主主義のルールを無視して、服装委員会の決定は一瞬にして踏みにじられました。服装委員会で再度討議

するには間に合わないというのです。何が間に合わないのでしょうか。設立準備委員会の日程そのものが業者の都合に合わせてあるからです。

来春新設される福音寺小学校の校区でも先日「標準服に賛成か反対か」という内容のアンケートが実施されました。ところがアンケートの集計も始まらない先に業者との会合が持たれているのです。取り方次第で結果はどうにでも操作できるアンケートや、標準服に疑問を持つ人を排除した服装委員会を口実にしてろくな論議もつくさず、いつの間にか標準服が導入されてしまふ、というこれまでのやり方はもうたくさんです。「強制しないのだから採用してもいいではないか」という論理は、教委・校長・教師による、自覚的に着用していない子へのいじめ、それを見習った、着せられている子たちの、がんばって着ていない子へのいじめの多発によって、とくに破綻しています。

（〈愛媛・教育と子どもの人権を考える会〉の会報

NO 28より抜粋）

今どきのPTA

私たちの実践



●父母と先生の会（「教育民主化の手引き」）
一、趣旨と目的

子供達が正しく健やかに育って行くには、家庭と学校と社会とが、教育の責任を分けあい力を合わせて子供達の幸福のために努力していくことが大切である。（略）

…子供達に影響を与えるこの学校、家庭、社会という三つの場所がお互に密接な連絡をもたず、みんなばらばらになっていることが多い。

これでは子供達の教育が充分に実を結ぶことは出来ない。この三つの場所がお互に連絡し、子供達に与える影響を考えあて補い合うことが何よりも必要である。そして子供達にいろいろ要求するのみでなく、子供達の幸福のためにどうすれば一番よいかを真剣に考えてその実現に努力して行く、必要とあれば子供達の保護のための法律や規則を、国や公共団体につくってもらうように請願する。必要な施設を増設してもらい、娯楽や厚生の仕事を進めてもらうとかいうように、強力に活動をする責任があるのである。これは明日の日本、民主主義日本をつくりあげて行くために、是非私達がしなければならぬ仕事の一つではあるまいか。

昭和22年3月、文部省社会教育局配布

私のPTA入門記

大早 直美

一年目

上の娘の小学校入学と同時に、その小学校のPTA会員になっていた。ほとんどの学校でそうらしいが、これは自動的に、そうになっていた。

そして初めての保護者懇談会。役員を決めなければならぬ担任教師の説得、懇願、対する親たちのじつと下を向いての沈黙、という重苦しい空気の中で、先生と目が合ってしまった。共働きで、下の娘は当時まだ一歳、その上、私が責任を分担する形で加わっていた市民運動もあり、これ以上家を空ける仕事は引き受けられない状況だったのだが、まてよ、と考えた。夫



とて、娘の保護者であり、PTAの会員のはずである。ついで、言ってしまった。

「私は無理ですが、もしかしたら夫がやれるかもしれない」——会議への参加は夫の仕事、電話連絡などの雑務は私の仕事、ということにして、PTAとの付き合いが始まった。

この初年度、何かと疑問の多いPTAとの付き合いであった。

まず、親たちのPTA活動への参加がはなはだ不熱心であることに疑問を抱いた。井戸端会議などでは誰もが今の学校の在り方や子どもをめぐる環境への不満、不安を口にする。それなのに、PTAのような数少な

い学校との関わり場を、親が自ら手放してしまっているものだろうか……。役員を回避できる立派な理由を持っていながら役員を引き受けてしまったのも、そんな疑問からだった。

次に、その活動の内容が結構煩雑で、集まりも多いことが解せなかった。わが家は自営業なので何とかやり繰りつけることもできたが、外に出ている共働き家庭にとっては、ほとんど参加不可能と思われた。これはおかしい。共働き家庭に限らず、子育ての忙しい時期に、その忙しさ故に参加できないような活動というのは、PTAの存在理由に矛盾するではないか。

そして、とどめの疑問。その活動の内容が、おかしい。講演会、教養講座、講習会、そしてベルマーク集め、バザー……。早い話が、人集めとお金集め、これに尽きた。しかも、上意下達が徹底しており、こうしたことへの疑問が通らない。親と教師たちで話し合ひ、しなければならぬことは他にいくらでもあると思われるのだが……。

もっとも、わが家は、忙しかったなどとは言えない部類かもしれない。わが家は、会議に出席していたところから私以上にこうした疑問を抱いた夫が、活動内容を自分でチェックし、「する必要のあることだけをする」ということに徹したからである。

それでも三月にはクラスの父母たちに電話をかけまくって、次年度の役員を依頼するところまではやり、初年度のPTAの仕事は終わった。

これは、根本的なところから考えなければならない。「PTAって、そもそも何なの?」「PTAって、ほんとうに必要なの?」というところから問い直さなければならぬ。——これが、この年の感想であった。

二年目

初年度の体験から、役員のシンドサだけはわかっている。役員に協力的な一会員であったと思う。その意

味では、いっそ乱暴に、役員を誰もが一度はやるものと決めてしまうのもいいかもしれない。その結果、どうしても時間のやり繰りのつかない人が役員に当たったとしても、そんな人が一人や二人いても許容できる程度の仕事量になればいいのである——などということを考えているうちに、生徒数増大による分離新設校問題がもちあがった。娘の通う小学校と隣のH小学校の三分の一ずつが、分離統合されることになったのである。

その新設校が、これまでの学校に比べ随分遠く、通学路になるような道もない所に建設されることになったので、地元の人たちが騒ぎ始めた。まずは分離反対の声が上がる。しかし、すでに手遅れの時期になっていると知って、ではせめて、安全な通学路だけでも確保してほしい、という声に集約された。

私も加わったそのいきさつの中で、PTAの役割の一つを知った。行政側は、こうした場合、当の児童の親たちの同意なく一方的に事を運ぶわけにはいかない。

それなりの手順は必要である。しかし、早くから公表してしまふのは、予定地の土地確保の問題や、今回のように反対意見がでた場合のことなど考えると、都合が悪い。そこで、PTAの登場である。行政は、PTAのトップ数人には計画を伝える。外部への口外は謹むよう依頼し、同意を得る。内部的には、それで保護者代表に伝え同意を得たとして、一歩前進することになる。こうしたセレモニー的な手順として必要な「地元保護者代表」の役割を果たすのが、PTAだったのだ。かくて、計画が実質的に公になった時には、もう後戻りできないところまでことは進んでいる。地元の者の目から見ても納得いかないような分離の線引きがされていても、もう修正がきかない（現に、今回の場合は、市議会員を通していち早く計画を知った一部地域では早くから反対運動が起こり、分離地域から除外された）。

PTAの役割がこんなものなら、百害あって一利なし、と憤りは大きかったが、とにもかくにも分離につ

いては決定事項となつて、秋、新設校のための準備委員会が発足する。

すると、ひよんなことから、その委員のお鉢が私に回つてきた。委員は、多くはその年のPTA役員が兼任するのだが、地域部役員の人選で、分離該当地域から若干加わることになつていた。そこで、私の地域の役員が、私を指名したのである。その頃私たちの地域では、PTAに頼れないため、自治会や子ども会の主導で通学路に関し市に交渉していた。そうした折に私が何度か発言したりしていたことから人選だったようだ。私も通学路のことは気掛かりだったので、準備委員会に参加することにした。そして、PTAが、学校という組織の中で思いもよらぬほど権限を持ち、決定権をも持っていることを知った。

たとえば、標準服。松山市では多くの小学校が採用しているので市の方針だとばかり思っていたが、採用するか否か、また採用するならどんなものにするか、この準備委員会で決定されるのである。PTAの組織

づくりも、通学路の決定も、この会の仕事だった。

もっとも、この会には、学校側代表として両校の校長・教頭も参加しており、彼らの主導で会はもたれるし、また、彼らの意向に沿った形で仕事も進む。他校の例では分離前の学校の在り方をそのまま踏襲する場が多い。当校の場合、準備委員会四部会のうち服装検討部においてはH校PTAから参加した奥川さんのリードで標準服を採用するか否かのところからアンケート調査を行ったり、組織検討部では、やはりH校PTAからの参加で後に新設校の初代PTA会長となるS氏が、これまでの、三役が何となく一般の人の知らないうちに決まってしまうやり方を改め公選制を導入するなど、従来の在り方を見直すところからの仕事も見られたが、これは異例のことであつたらしい。

ともあれ、こうした動き、また準備委員会で初めて知ることになった、H校の、わが校よりは自由で進歩的なPTA活動の在り方は、「百害あって一利なし」のPTAとなるも、本来のあるべき姿のPTAとなる

も、要は関わる人次第という当たり前のことを気づかせてくれた。そして、本来の在り方に則って仕事をしようとするなら、PTAには大きな仕事ができるはずだ、ということも。

PTAの存在意義に目覚めてしまった。ちょうどそんな時、新設校の新役員を選出する時期となり、私を推薦する人があった。従来のPTA活動より忙しく大変だと言われていた準備委員会の活動が終わったところだったので、今までより大変なことにはなるまいという甘い見通しと、毒を食らわば皿までの気分、副会長を引き受けてしまった。

かくて三年目が始まった

見通しが甘かったことはすぐに悟った。何と、わけもなく外出しなければならないことが多いことか！新設校としての仕事―落成式、祝賀会、バザー、そして不本意ながら組織されることになってしまった教育

後援会の設立等―だけでもかなりのものだったが、それは新設校ゆえの特別事項として脇へのけても、とにかく各種行事・集会への参加が要請され、閉口した。ここでまた、PTAの役割の一つを知る。県や市、公民館などがさまざまな行事を催す際の、動員部隊である。また、あて職として、さまざまな会の役員を兼任することも多かった。

しかし、そうした忙しさよりもさらに閉口したことがある。「従来のPTA活動のやり方」を学ぶ間のなのまま突然副会長になってしまったのである。しかも、そのきっかけが、通学路や標準服のことで自分の思う意見を遠慮なく述べるという、学校側やこれまでのPTA活動をよしとする人たちにとっては、はなはだ覚えめでたくないものである。そのことから人間関係のきしみには神経をすり減らされた。救いは、それが私一人ではなかったこと。（副会長の四人のうち女性三人は、共に同じような経緯で副会長になっており、同じ悩みを共有するはめになった。これは、松山市各

校に孤軍奮闘している人たちのいることを知っているだけに、たいへん心強いことであった。)そして、会長が、PTAを学校の下部組織とは考えず(多くのPTA役員がそう考えている!)学校に対し対等にものを言える人物であったことである。

学校側との軋轢を含め、学ぶことは多く、PTA活動の意義も更に深め、有意義な一年間であった。しかし、いかんせん、忙しすぎた。私の家業のほうも、今が踏ん張り時という時期であったし——白状しよう、子どもたちが、度重なる夜の外出を露骨に嫌がるようになっていた。まだ三歳の娘が、私が帰るまで決してベッドに入らなかつた。公選で次期の副会長に名があがつたが、再度こうした一年を繰り返す自信はなかつた。辞退した。

そして、四年目の今

三役のうちの幹事として参加しながら、PTAへの

思いは複雑である。その意義を十分認めながら、積極的に関わることには躊躇してしまふ。というのも、PTA活動は現在、本来の活動をする以前の段階で方向違いの仕事に忙殺されており、その現状への問い掛けから始めなければならないという状況なのである。責任ある立場で活動に参加しようとすれば、フロンティア精神を発揮し、かなりの時間をPTAに注ぐ覚悟が必要である。残念ながら今の私には、そのための時間もスタミナもない。

しかし、だからといって、私にはたいしたことできないから、と背を向けてしまうわけにはいかない自分がある。こんな現状にもかかわらず、いやだからこそ、真正面からPTA活動に取り組んでいる人たちの存在を知ってしまったからである。せめて、そういう人たちを応援する資格くらいは持っていたい。そんな思いで、役員の末席に連なっている現在である。下の娘、いまだ四歳。PTAと私の付き合いはまだまだ長い。

性別を問わず意義ある活動を

「やっぱり女はだめだ」

と言わせないわたしの会長体験記

野澤 光江

新設校にPTAを

PTAが曲がり角に來たと言われ、魅力のない集団になり始めた頃、新たに開校された地元中学校に一年生として娘は入学しました。

校舎も未完成で制服も決まらず、先頃卒業したばかりの小学校の庭先を借りたプレハブ校舎でのスタートとなった。プールも体育館もないお粗末な環境だった。ないないづくしの中で少しでも生徒たちの環境を整え、先生方にも教育に専念してもらうために何かしなければ

ばいられない気持ちだった。というPTAが、そんな気持ちを素直に反映できる母体となりうるか。先ず、各クラス代表と先生方からなるPTA設立準備委員会ができた。先生方の積極的な参加をいただくため、会合はすべて放課後とし、さまざまな角度からデーターを集めて検討し、アンケートを作成して全会員の意向を確かめ、PTAはほんとうに必要なのか、加入は強制ではなく任意制にすべきか、など常識をくつがえすところから徹底的に議論を重ね、一年がかりで会則を作り、翌年からPTAとして発足する運びとなった。



理想のPTAができた

ほんとうに託したい人を適正に選べるように前年度の活動状況をよく把握している旧役員と今年度の活動を担っていく新役員が、ともに無記名投票で三役を選ぶこととした。お金のない人は、会長をやれないという古い概念を打ち破るために明朗会計とし、物で労をねぎらうのではなく、心でやりがいを確かめ合う活動へと切り替えていった。一方、学校側にも使途不明の穴埋め財源としてPTA会費を当てるに風潮を改めて、生徒たちの環境整備を最重要に、父母も先生方も一緒に考え、行動していく新しいPTAが発足できたのは幸せだったと思う。

女性会長の心掛け

準備委員長として、会長としての連続三年間、下の息子が中三のとき開校十周年記念行事の多い年に、更

に一年間、会長を努める羽目になった。まだ男たちは、女の会長の組織で働くことを潔しとしない頃のことであつたから、女性の陥りやすい点に極力注意して「やっぱり女はダメだ」と言わせないように私が心掛けたことを数点、整理してみたい。

一、広く会議を設け、あらゆる人々に発言の機会を与える。

ただし、公の会議での意見は、誠意をもって取り上げ検討していくが、陰でモソモソ言う類のものは意見としては認めないことを強調し、自分の意見は整理して、会議の場で述べてほしい旨を徹底した。

二、人や情報が自由に交流できるような雰囲気を中心付ける。

三、会長と言えども、単独で校長または教頭など重要な折衝をしない。「李下に冠を正さず」、疑心暗鬼を生じさせないため。

四、PTAの運営をシンプルで、分かりやすくする。

五、新しがるばかりではなく、歴史を通して淘汰された価値観を大切にしていく。

六、親としての自分も含め、広い視野で生徒たちの考えを理解していく姿勢をもつ。

七、社会に役立つ集団として成長していく。

などであったように思う。

徹底的に楽しく

六年を経て、十周年で、もう一度会長を努めたときは、周りの雰囲気にも初期の緊張感はなく、父母は先生方を批判し、先生方はうるさい父母を煩わしく思う図が出来上がっていた。記念誌の発行、行事費の捻出など問題の山積みした中で途方にくれたのを思い出す。これはえらいことになったと思った。かえて、腹がすわった。よし、今年は徹底的に楽しんでしまえと覚

悟した。「楽しくない活動から良い結果は生まれない。みんな、じゃんじゃん楽しくやりましょう」で始まった年だった。頭の痛い費用の捻出も、さまざまな特技をもった会員を募り、手作りバザーに協力してもらった。みんな参加できる場で、それぞれに頑張ってくれた。思いがけない花道で輝いていた顔が忘れられない。

何と先生方が出られない

式典の当日は、日曜日だった。その前日、全職員が出席すると、二週間以内に代休を取らねばならず、この間の授業が成り立たないからと先生方が、式典に出席しない方針を打ち出したと聞かされ愕然とした。どうも校長が一人で舞い上がっているとの先生方の反発であるらしいとわかったが、私は情けなかった。

当日、手渡しする予定だった記念品を急ぎよ整え、先生方にお集まりいただき「誠に残念だけれど、当日

お集まりいただけないとのこと、今日お受け取りください。私もはこの半年、十周年記念事業へ向けて精いっぱい努力してきました。苦勞も多かったけれど、共通の目標に向かってみんなで頑張って明日を迎えようとしている今、規則は規則、人としての良心に俟つしかない。ともあれ、私もは、精いっぱい明日の行事を全うさせる努力を惜しまないつもりです」とお話したのです。

回復した先生方との熱い信頼関係

当日は快晴。定刻よりずっと早く先生方も全員、顔を出してくださり、会場設営をはじめ、気持ちよくお手伝いくださり、心の霧も晴れて感激でした。先生方との信頼関係は、これを機に再び熱くなり、やりがいのある一年を過ごすことができ、その後も地域の活動にも協力してくださり、私にとっての貴重な人脈が生まれたのです。

性別を問わず、「人」そのものの資質によって地域社会の一つとしてのPTAも意義ある活動が可能なのではないかと思うのです。

感情を抑え、論理的に考え、話し合い、心の優しさをもってお互いを認め合う柔軟な姿勢こそが、良い活動の条件ではないでしょうか。



PTAも男社会？

加納 政子

娘の通っている小学校は、代々男が会長をしている。今まで、女が会長を引き受けたという事例はない。

二年前一度だけ「いよいよ今年は女性が会長になるだろう」という年があった。会長の〇が二年目であり、

次期候補に適当な男がない。市の社会教育主事でPTAでは学級委員をしているUさんがその筆頭候補者として噂になっていた。Uさんなら、PTAの顔である会長たる者は、人前に出て引けをとらず、挨拶がうまくなければならぬ。従ってやっぱり男でなければこの大役は勤まらない。というこの学校のPTAの暗黙の申合せにも、男でなくとも……とうならせる貫祿を身につけている。うるさい人たちでさえ、女である

Uさんが会長を引き受けても何も言えないだろう。これが上手くいけば、女でも会長ができるという前例となり、定着していくだろう。

会長職はだれでもできるはずのもの

PTAの会長とは、各委員会が円滑に活動できるようにお手伝いすることが本来の役職であり、挨拶などというものは後から付いてくるもので、ヘタでも心がかもっていればどうということはない。

不思議なことに会長となり、何回か挨拶を体験した人は次第に聞くに耐える挨拶ができるようになる。女



性会長が堂々とやっているさまは感動ものであり、勇

気づけられさえる。女性が会長になれば、まずこの学校のPTAのなんともいえない重苦しい雰囲気が軽くなり、仰々しい行事の中身も変えやすくなるだろう。民主的なPTA、本来のPTAをなんとか取り戻し、教師と対等な関係作りをしたいと思いますという者たちにとって、まずは女性会長を実現することがその第一歩のように思われた。と言っても創立百二十年もの伝統を持った学校である。地元の青年商工会議所のメンバーが次々と会長役を受け、商工祭のような祭りを年に一度校庭で繰り広げることがPTAの役目であり、子どものためだとがんばるPTAである。とても働き者で、PTAはボランティアだと信じて疑わない、主に専業主婦たちが役の中心を占め、各行事を盛り立て、雑事をこなし、「私は頭はないけど体を使うことだったら厭わないわ」と公言するのをばからない。そんなPTAである。

お山の大将になりたがる男

学校の教職員のなかにはもちろん日教組もいるが、期待をしても返ってくるものは何もない。あきらめからか長年の保守的PTAに迎合してしまっている。校長教頭はむろんのこと会長べったりである。PTAってホーントに社会の縮図だわってグチっても顔いてくれる人の数などしている。そんなPTAだから、男などやめにして女を会長にしましょう」と説得することじたい難しい。保護者会・クラスレクリエーション・講演会・廃品回収等々PTA活動は女の手で運営されているというのに、何故てっぺんに男をもってこなければいけないのか。私自身のPTA体験の中でも男の害は山ほどある。すべての男が悪いというのではない。むしろ会合に何人か父親が参加すると、話の本身が濃くなり広がり、教育の原点に立ち返ったやりとりができる場合が多い。わが子のみしか見えない母親の多い中ではテーマを持った話し合いはなかなか難しい。

父親参加大歓迎である。でも、PTAは会員が主人公であり、会長が主人公ではない。ある時必要に迫られてPTA会則を見直したことがある。組織図を見て驚いた。普通会員・総会がピラミッドのてっぺんに来るのが、わが校PTAは会長がてっぺんにきていた。なんと正直な組織図なんだろうと感心してしまった。

会長は商売・お付き合い

会長の職業をならべてみると、私の娘が在校中だけで（現在長女中三、三女小五）不動産会社社長・ラーメン屋マスター・運送会社社長・冠婚葬祭花屋社長・チェーン店薬屋代表・社会保険労務士・農業兼果実業主と昼に自由な時間が取れ、いつでも昼の行事にはご挨拶可能な職業を持ち、地元小学校出身者が多い。PTA後援会をバックに市議員に立候補し、落選した者一人。代々市議員の親を持ち、つれあいの家系も市議員の者一人、次期立候補を予定していると噂さ

れている者一人、そして現在市議員をやっている者一人。と、PTAと地元の並々ならぬ繋がりが見えるにつれ、PTAとはいったいなんだろうと思わざるをえない。現在市議員のSはやくざの女に手を出したとかで脅され、しばらく某病院に入院していた。若手議員の中でも目立ちたがり屋で、十一月に行われる市長選に打って出ることになっていて、当選確実と言われている。に身からでたサビとはいえ同情を買っている。

夏祭りはきらい

このSとは私が何回かした役員で常に対立関係にあり因縁が一番深い。Sが会長一年目の時、私は文化部の部長をやっていた。商工祭なみの夏祭りは、親が子どもに何かしてやりたい“ということではじまったそうで、もっぱら食べ物の露店を校庭いっぱい並べ、親たちが売る。長女が三年の時、その内容が色つきア

イスにコーラなどだったので、理事会で「コーラを売るのはどうだろうか」と意見を出した。当時はコーラの害がさかんに言われていて、リン酸が骨を溶かすとか砂糖がスプーン四杯も入っていることなど、常識のようなものだと思っていた。祭りじたいやめて欲しい人がいっぱいいるのに言い出す人がいない。せめてコーラはなくてほしい。会長のSは、「どうでしょう、こうした意見も出たことですから、ジュースの箱からコーラは抜き取って売りましょうか」と甲高い声を上げた。すると役員の中から、「いいじゃありませんか、たかが祭りでしょう。一日くらい添加物とったって死にはしませんよ」と声が上がりが拍手が起こった。頼みの生協組合員は下を向いているばかり。この時初めてPTAと地元業者の繋がりを知った。その後毎年身身の改善のため努力してみた。蒸かしたじゃがいもや味噌付けゅうり、麦茶に苦勞して変えた年もあった。しかし子どもを主体に動かそうとしない祭りはむなし。あくまで商工祭の域を出ない。この祭りのためにどれ

だけむなし議論を重ね、学校に身体をはこんだことか。働いている女性は「何のお役にも立てないのでせめて当日のお手伝いくらいは」と申し出る。何年も続いている最大の理由はアンケートの結果、子どもが喜ぶのでやってほしい」という無責任な数が圧倒的に多いせいである。まったくいやになってしまい、もう関わるのはやめることにした。この祭りの実行委員長は監査役の次期会長候補といつのまにか決まってしまった。

辛い会議

日頃学校に殆ど顔をださない男がなぜ堂々と会長職を手にいれることができるのか。からくりはちゃんとある。監査という便利な役にとりあえずつのがミソなのだ。普通感覚でいけば、監査というのは、何回か役を体験しわかっている人が役員や事業の外側から、事業や活動の会計の帳尻が合っているかどうかを見極

める人、ということと想っていたが……。このPTAの監査は初めて役になった男が祭りの実行委員長をやり、会議では手を上げ発言をし、時には会長代理で広報の検閲にやってくるといった離れ技をやったのける。もちろんこういっためちやくちゃには抗議するのだが、ひとつひとつ言っていくと、議長の男や会長といつもいつも言い争いになるのが落ちで会議の時間ばかり過ぎてゆき、帰りの時間を気にする女性たちにも評判が悪くなるのだ。ストレスはたまる。家はよこれる。

良いことなんてひとつもない。仲間がいなければ乗り越えられるものではない。会議がひとつ終わるたび、友人の家に集まり愚痴をこぼし合わずにはいられなかった。

すこし変わった

不思議なもので、筋を通す努力を続けて行くうちに目を釣りあげて文句を言っていたSが少し変わって

くように思えてきた。駒野陽子さんを講師として講演会を開いた時、好ましくない講師はリストから消せと市議会でいきまいた。部の打ち上げでカラオケを謡いゲームをした後、ストリップ劇場の呼び子をやりひんしゅくを買った。会議の後二次会三次会でその内容を引っ繰り返してしまふ。会則を検討する委員会で教師のPTA参加はどうあるべきか、と話し合っていたとき「日教組」が関わりと困るんだ、と放言した。書き出したらくらでもいくらかもあるSの態度が途中から柔らくなってきた。少し話がわかるようになってきたみたい。行事中心のPTAはどうしても学級活動がおろそかになる。PTAの基本は、学級なんです、と口酸っぱく言い続けていても理解してもらえなかったのに、「クラス懇談会をやったほうがいい」などとポロツといたりして啞然とさせられたりした。

たぶん影でPTAの勉強を始めたんだろう。まっこのうからせめたてる女たちに対抗するには学習するしかなかったのだらう。結局Sは三年PTA会長をやった

あと、中学でも会長を勤めた。顔つきも目を吊り上げることがなくなった。困ったちゃんは必ずしもSではなく、取り巻きのほうだったりすることが多くなった。とても疲れるがわが子が毎日通う学校である。関わってみたのは無駄ではなかったかなって思うこともあるのだ。

さて女性会長は

わがPTAに初の女性会長誕生なるか。Uさんもし推薦されるなら覚悟を決めると決心した。ところがそうはいかなかった。S以上に評判の悪いOである、三年はやらないと当然誰もが思っていたのだ。

ところが、選考委員長のKさんが突然肩を持ち出した。「Oさんにとっては頼もしい人ですよ。話も上手だし、講演もするんです」これには本当に驚いた。昨日まで「今度は女性会長ね」と言っていた人である。何かあるぞ。

安心しきっていた私もUさんもあわてて知り合いに票を頼むことにした。やはり女性がしかもUさんが会長になることに恐れを抱いたSやOの根回しが始まっていたのだ。

こんなばかばかしいPTAに入れ上げるのなんて虚しいだけだ。会長になったところで何が変わるというのだろう。とは思ったががんばった。

結局Oが二十票、Uさんが十五票。こんなもんである。負けてしまえばそれっきり。

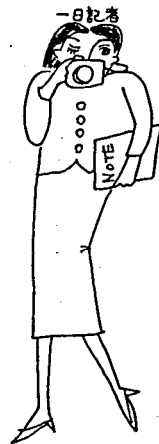
あれから二年たつが、男がてっぺんで女がそれを支えるPTAは相変わらず続いている。今年は秋に変わった祭りの後、宴会をやるのだそうだ。Sの時代からひさびさの宴会みたいだが、役員の間では「そんな時間に出れる人いるのかしら？」と疑問視する声も出ていると聞く。その反面、男が混じっていると楽しいとPTAに参加する人がいるのも事実なのである。

メンバーが変わると振出に戻るのかな？ ほんとにPTAってしんどいものだな。

紙の爆弾とはいかないけれど

——広報誌でPTAを活発に

荒野 希里



PTAって何なの？

私は子どもを共同保育で育てた。人の子も自分の子も親たちも共に育ち合おうという集まりは、すべてが話し合いの連続で、しんどいことがなかったと言える。嘘だが、同年齢の子をもつ親同士ワイワイガヤガヤ本音を出し合って楽しかったし、とにかく心強かった。だから、子どもが小学校に入ってPTAに出た時は、驚くことばかりだった。クラスの集まりでは静かに座って運営委員会の報告を黙って聞くだけ。質問したり、うっかり何か言おうものなら、やっかいなこと言わな

いでよとばかり白い目で見られる。「総会はなぜ先生方が授業中で出席不可能な時間帯にやるのか」「役員選びが民主的とは言えないのでは？」など何度提案しても検討しておきますとなしのつぶて。皆さん問題意識も悩みもないのかしらと思っていたら、さようならをした後の帰り道がものすごい。知り合い同士で、先生への不満や子どもへの苛めについての悩みが噴出。幼稚園へ子どもをやらなかった私は、仲間がいなくて常に情報のにらみ外。どうして、みんなももう少し学級PTAの席で率直に話し合えないのだろうと不思議に思った。そこで子どもが二年になった時、学校のことを

知りたい、友達がほしい、「やります」と手を挙げて
広報委員を引き受けた。

なんと今どき検閲じゃないの

広報委員は未経験者ばかりだったが、読みこたえのある広報誌づくりをしたいねと張り切った。広報には顧問の先生がいらっしゃるが、この先生いくらお誘いしても委員会に出て来ない。親と教師でPTAだと思いが、完全なT不在である。しかも企画には参加しない顧問の先生と教頭先生が校正という名目で出来上がった原稿をチェックなさる。

教頭先生は、いつも身綺麗に装った女性で、管理職としてはやり手だが、男性以上に管理的だと母親たちの評判はすこぶる悪かった。前年の広報委員は新聞を賑わしていた「いじめ」が親たちの最大関心事だからテーマにしたいと言っただけで「とんでもない。本校にいじめはありません」とたいへんな剣幕、以後活動

すべてを妨害されたと言う。私たちも教頭先生には悩まされた。廊下で職員と話しているだけで、誰の許可を得て話しているのかと叱られる。載せるものすべてに教育的配慮と称して赤が入る。カットの黒板の絵に落書きがついていたため「あなたたちはこれを何とも思わなかったのですか」とお説教された時は笑ってしまったが、民主主義の世の中でこんなこともあるのだなと本当に驚いた。

私たちの抵抗はすべて無駄だった。自分が学校の全問題に関する全責任者だと信じている教頭先生には、子どものことをみんなで考えようと企画したことはすべて自分の管理に対する批判と映るらしい。ご自分も母親のはずの彼女がなぜ子どもや親の立場で物事を考えられないのか、女性が責任ある地位につけば世の中少しは変わるのではないか、特に教育界のような所には女性の進出が大事だと期待していた私にはショックな経験だった。

今度は作戦バッチリで

P T Aの基本は学級だと思う。子どもにとって自由な遊びが大事だと知りながら、受験競争に乗り遅れてはたいへんとなが子を塾に追いやっている親が非常に多いのが校では、学級での本音の話し合いはむしろかしい。でもだからこそ、さまざま不安をそっと抱えて孤独に悩んでいる親たちは話し合いを必要としているのだ。教頭先生とうまくいかずにP T Aはこりこりと思っていた私だが、彼女が転任したのを知って「広報やります」とまた言ってしまった。友達はできてきたが、保守的なP T A全体の体質をがらっと変えるにはあまりに仲間不足だ。広報は「紙の爆弾」と言われる。爆弾といかなくてもさざ波ぐらいだてたいものだ。

子ども数減少で予算が激減したのに目をつけて、まず印刷をやめて、ワープロ、手刷にして経費を節約し、色紙を使って目立たせ、手書き文字やイラストで手作りの親しみやすさを強調したP T A新聞にガラッと変

えてしまった。P T Aで何かを変えるにはものすごいエネルギーが必要だ。でも、お金がないという大義名分がある。手作り広報は何の抵抗もなく歓迎された。その新しい新聞に「会員の広場」という新しいコーナーを設けて「子どものこと、学校のこと、感動したこと、悩み事、P T Aの扱うことならなんでも寄せてください。皆様の意見交換の場にしましょう」と呼びかけた。紙面で呼びかけても投書はこない。「ねえ、今度広報になったの。何か書いてよ」と委員たちがめばしい知人に声をかけて書いてもらう。毎回父親や先生も登場して、なかなか順調なすべりだしであった。

「会員の広場」活躍

「うちの子は太っているせいか、体育着の股のところがきついんです。股に合わせて買おうと今度はウェスト部分がだぶだぶ。全然伸縮性のない生地で、色も白でしょ。男の子だからはでに汚すといくら洗ってもき

れいにならない。何度学級PTAに出しても、検討してまずというだけで返事がもらえない」早くも投稿希望者が現れた。

今度の教頭先生はもの静かな学者タイプの方である。「会員の声を大事にして、地味だが内容のあるPTA新聞作りに励みたい」とお話して、ぜひ学校の意見をいただきたいと体育着の投書を差し出した。学校の見解は次の号で誰かに書かせましようということで、体育着はあっさりと「会員の広場」に登場した。

新聞が出て二、三日後の夜、副会長から電話がきた。「体育着の投書、教頭先生は確かにご覧になったのでしうね」から始まって「会長さんが『会員の広場』は何年Kという頭文字ではなく、きちんと名前を出すべきだとおっしゃっています」投稿者のフルネームを載せろ、記事の内容がまずいと実にしつこい。委員会で検討してみると返事をしておいた。

今までのうちの学校のPTA会長は、地元商店街の経営者や自由業のお父さんでPTAを経験したことな

い人だった。「会長はお飾りよ。行事の挨拶を勤めて、PTA連合会でお酒飲めればいいの」と聞かされて啞然とした。今年の会長、Nさんは、長年PTAを頑張ってきた初の女性会長、ことなかれ主義で保守的なわが校のPTAも少し変わるかなと期待した人は私だけではなかったと思う。だから、こんな所から広報のやり方にクレームがつくとは思ってもみなかった。学級委員からいきなり副会長になったSさんは、超まじめ人間。ベテランのNさんのもとで、緊張して命令どおり任務に励んでいるらしく「会長さんが」とそれからも電話攻勢がひどくほとほと参った。

広報が学級PTAを活発にする

私は緊急広報委員会を開いて委員たちに状況を説明した。会長、副会長とやり合うには広報委員会内部をきちんとまとめておかなければならない。委員たちは私の話に大いに腹をたてた。うちのPTAは上意下達

でおかしいと思っていた、こんなことがあった、あんなこともあった……今回の件はしっかりやり合おう。

まず『会員の広場』の投稿規定を全員一致でまとめあげた。「会員の広場はPTA会員の自由な意見交換の場である。投稿内容はPTAで扱うにふさわしいものであれば何でもけっこう（他人を中傷するもの、特定の宗教や政党に関するもの、個人的な宣伝はご遠慮いただく。PTAで扱うにふさわしくないと広報委員会で判断した場合、書き換えていただく場合もある）紙上には学年と頭文字を掲載するが、無責任な投稿を防ぐため、学年、氏名は必ず明記してもらう……」

体育着は会員たちの関心を引くテーマだったとみえ「うちの息子はサッカーをしていて股が太かったからきつくて着にくくてまいったわ。お尻にまちを入れて、脇にスリット入れて工夫した。中学校の体育着はジャージで色も紺で着やすいわね」と言ってくる人があったので、「それ書いてよ」と頼んだ。高学年の女子の母親が「体育着の下には薄い下着の着用を認めてほ

しい」と投稿してきた。生活指導の先生から「職員会議で検討中です。体育着のきついお子さんは、スリットを入れるなど工夫してください」という原稿が届いた。『会員の広場』の話題は学級PTAで取り上げやすいらしく、あるクラスでは女子の更衣室が欲しいという話に発展して、空き教室が六年生女子の更衣室にあてられることになった。PTAだが、PTAを動かし始めた。

執行部との対決

新聞は順調に出て親たちや地域の研修会での評判もよかった。しかし私と副委員長はその後会長から呼び出しを受けた。Nさんは、頭文字から始め、体育着の件は一年前運営委員会で決着がついたことだから今この広報に載せてもらっては困ると言い出した。「そのことは広報では誰も知らなかった。運営委員会で議題になったことが会員に知らされないほうが大問題では

ないか」と言う。「クラス委員さんにはいろいろな方がいて、運営委員会で決まったことをきちんと伝えたい人もいる」とクラス委員の質の低さのせいにしてしまっている。私は運営委員会の議事録をきちんと会員に出さない執行部のやり方はおかしいという日頃から不満を述べた。

いよいよ核心の体育着、「ああいうことがいきなり活字になるのが困る。広報はPTAで決まったことを載せるので、何かを決定する場ではない。広報は体育着を変えてくれという意見にどう答えるつもりか」

新聞は会員の意見を載せているだけだ。体育着の色一つとっても、白がいいと言う人も黒がいいと言う人もいる。親の意見を載せるときは、必ず教師からみた意見も載せるなど、できるだけ多様な意見を載せるようにしている。どう答を出す気かと言われるが、委員さんや役員さんがPTA全体で取り上げるべき問題だと判断すれば、実行委員会に出してほしい。広報委員会でそう判断すれば、私が実行委員会に提案する。色

は好みの問題だが、体育着がきついというのはたいへん問題だと思うと私は言った。三、四十分話し合ったが議論が噛み合わない。「生徒さんの中には生活保護を受けている人もいますので、体育着を買い換えるとなるとたいへんです」「体育着を換えるという話は出てないでしょう。万一換えるとしても全員今すぐ買い換えとはならないと思いますよ。会長さん、心配のしすぎじゃないですか」

Nさんのおっしゃりたいことは、問題提起をしてくれるな、自分が会長のうちは一切面倒を起こしてくれなということだと感じた。彼女は、今までどんな実践をしてきたのだろう。私たちは問題を起こしたいのではない。親も教師もいっしょになって考え合い、よい教育環境を作っていきたいのだ。Nさんは、変に学校と親との間に入り、それを邪魔しようとしている。彼女は自分の言い分を通せなかったが、私たちの話をきちんと理解したとも思えなかった。

その後彼女は、校長・教頭・三役・各種委員長の集

まりである企画会の席で「会員の広場」の投稿原稿を載せるべきかどうかの場で判定すべきだと言いつ出した。「投稿規定は企画会にも実行委員会にも提示しているの、その内容にPTA広報として不備があるなら指摘してほしい。私たちは、会員の声はどんな小さなものでも大事にして、みんなの問題として考え合いたい。会員が広報に載せてほしいと書いた原稿を企画会で検討してPTAに都合のよいものだけを選ぶというのは絶対許せない」と頑張った。Sさんが「広報は教頭先生が一応目をとおしていらっしゃるが、それだけではPTA全体として必ずしも安心できない」などともでないことを言って、教頭先生は苦々しい顔をなさった。Nさんは「PTAの印刷物はすべて私が目を通して見る。私が見ないのは広報だけでPTAの全責任者である私は安心して寝られない」と言い出して、校長、教頭の前で親側の信頼関係のなさを暴露してしまった。「企画会で原稿を検討するのは検閲ということになりますから……」と校長先生が割ってはいって

ことは収まったが、PTAのベテランを自認する会長の行動には全がっかりだった。

体育着論争は、「体に合わないお子さんはよく似たジャージ製のものが運動着屋にあるのでそれを着用してよい」という学校の職員会議の決定で幕を閉じた。「お揃いの体育着は必要なのでは」という点まで本当は話し合うつもりだったが、正直うんざりした。

学校での子どもの問題を広報誌に

委員たちは子どもの遊び、放課後の過ごし方、小遣い、そして友人関係などに取り組んでいた。いじめや先生の指導にまつわる問題、産休をとられる先生への不満など実にさまざまなことが出てきた。これらは、PTAでもっとも取り上げにくいテーマである。地域の他の学校の広報誌を見ても、こうしたことに正面から取り組んだものは一つもない。「でも知ってしまった以上、何もしないなんてPTAやっている意味がな

いね」しかし体育着であの騒ぎだ。学校も必ずしも率直に話し合おうという雰囲気ではない。でも何としても載せよう。

いじめ問題は、いろいろあるらしいが、いざ取材してみるとはつきりと掴めなかった。被害者の親は広報というと用心してしまうのか、あたりさわりのないことしか言わない。障害があるなどの深刻なケースでは「ただでさえ肩身が狭いので絶対に取り上げないでほしい」と言われた。親子でじっと耐えている様子がわかって胸が詰まった。

先生の指導の面では、班づくりを取り上げた。子どもたちに班長になりたい人をまず立候補させる。班長が決まるとその子が好きな子を順番に班員として選んでいく。後には必ず誰からも選ばれない子が残ってしまう。「自閉症児のM君と動作の遅いY君が残ってしまった。僕は二人ともとってあげたかったけど、M君を選んだ。Y君はとても悲しそうだった。僕はどうしたらよかったのだろうね」とある子が親に打ち明けた

のがきっかけだった。子どもたちに聞いてみると、そういう班づくりをしている先生は一人や二人ではないことがわかった。

あの手この手で

まず学校の問題点を載せたい場合は、その三倍くらい先生方のよい点を見つけてほめたたえ、その間に挟み込んだ。これは問題だという形は絶対取らずに、親の悩みとして、「こういうことどうしましょう」という形にした。班づくりは、四、五人の母親の井戸端会議ということで、「班づくりってむずかしいのよね」「でも、うちの子が残っちゃったらかわいそうだね」「Y君のおかあさんはご存じなのかしら」「親同士、先生方との話し合いが大切なのよね」「そう学級PTAは大事だね」と友達関係の悩みの中にさりげなく組み込んでしまった。歯がゆいようだが、たいへん効果はあった。次の学期、そういう班づくりをしていた先

生方全員がやり方を変えられたのだ。「へえ、私たちの広報誌は先生方にも結構読まれているんだ」

その月の学級PTAでは「班づくりを変えたら、子どもたちから好きな子と班が組めない文句が出ました」「活発でお友達関係のよい子には不満かもしれないが、友人関係がうまくいかずにいつも悲しい思いをしている子どもたちもいます。大人である先生は、ほっといても大丈夫な子でなく、そういう子どもたちのことを気づかってほしいのです」などというちょっといい話し合いがもたれたクラスもあった。

産休の先生の件は、「学期が始まってすぐ先生が変わるというので親の私は不安だった。だが、子どもが先生のお腹に耳をあてて赤ちゃんの心音を聞かせてもらったとうれしそうに話しているのを聞いて……」というお母さんの率直な声を載せた。学級PTAではその投書を中心に母親たちの不安や働く女性が子どもを生む悩みなどが率直に話された。そこで担任の先生が産休に入る前に、代わりに来てくださる先生と担任、

親たちがいっしょに特別懇談会を開き、「今度きてくださる先生もとてもいい方よ」と、すっかり落ち着いた雰囲気で見ええが行われたという。

話し合いをしますとすることがないとは言えないだろうが、おかしいと思ったら話さないことには始まらない。私たちがPTA新聞を使ってした問題提起は、概ね学級の話し合いでよい方向に解決した。でも私たちが一年間かけて大騒ぎしてきたことは、結局「子どもが体育着きついでとてますが」「先生、そんな班の作り方をすると残ってしまう子が惨めじゃないですか」といったあまりにも簡単なこと。教育問題は山ほどあるだろうに、こんな単純なことさえ言えない学校PTAって何だろうと、考えてしまう。登校拒否する子がふえ続けるのは当然だろう。でも、子どもたちが学校に行くかぎり、PTAにこだわるしかないだろうな、決して諦めず、力まず、したたかにやろう、そう思うこの頃である。

議 談 服 制

		生活のきまり細則	
		男 子	女 子
頭 髪	髪	<ul style="list-style-type: none"> ・えり、耳にかからない。(髪をまっすぐに下げた状態) ・目に入らない。 ・リーゼント・パーマ、染色、特殊な頭髪は禁ずる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・肩より長い髪は束ねるか切るかのどちらかとする。(結び方は学習運動に支障のない結び方とし、髪に結ぶものは、ゴム、ピンのみとする。) ・ゴム、ピンの色は黒、紺、茶系統とする。 ・染色・パーマ、プロウ等は禁ずる。
		<ul style="list-style-type: none"> ・黒の学生スポンとする。(ボタン等の特殊なものは禁ずる。また、かざりものは一切つけない。) ・スポンの長さは立った時、足首にかかる程度とし、折り返しの長さ4cm程度とする。 ・シャツは第一ボタン以外は、はささない。 ・色は白のみとする。(ボタンダウン、開襟は認めない。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・本校指定の濃紺のひだスカートとする。 ・スカートの丈(腰の位置で着用)はひざ下5cm程度とする。 ・スカートについてあるツリバンドを使用する。 ・スカートにはかざり物は一切つけないこととし、ファスナー部分をも禁ずる。 ・ブラウスは学校指定のものとし、開襟、ワイシャツの使用は認めない。 ・第一ボタンは必ず止めておく。
学 校 用 品	靴	<ul style="list-style-type: none"> ・白、黒、紺、茶系統のスポン(上下はきともにかかとは露ま。) ・色は白とし、柄ものは禁ずる。(ワンポイントのものは派手でないものとする。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・色は白、のみは認めるか、ないもの、柄ものとする。
		<ul style="list-style-type: none"> ・登校時、特に寒い時はセーター、コート、手袋の着用を認める。セーターは上着の下に着用する。(色は白・黒・紺・茶系統とする。) ・マフラーの着用は認めない。 ・コートの色は黒・紺系統の無地とし、手袋は派手でないものとする。 	
学 校 用 品	防 寒 着	<ul style="list-style-type: none"> ・生活のきまりで明示したものは学校生活上必要とし、かつ持ってくるべきでない物を、持つて来てはいけない物の、リップクリーム、写真(ナイフ等の危険物、雑誌、ハンドクリーム、映画等のチラシ、スポン・スカートまたは上着の胸ポケット等に、ブラシ・クシを目的以外に使用しない。(カギは大切に保管して良いもの、学校に保管して使用する靴、ふえ、習字、体育館ばき、部活動で使用するのみ)、美術用のパケツ(使用期間中のみ) 	
		<ul style="list-style-type: none"> ・生活のきまりで明示したものは学校生活上必要とし、かつ持ってくるべきでない物を、持つて来てはいけない物の、リップクリーム、写真(ナイフ等の危険物、雑誌、ハンドクリーム、映画等のチラシ、スポン・スカートまたは上着の胸ポケット等に、ブラシ・クシを目的以外に使用しない。(カギは大切に保管して良いもの、学校に保管して使用する靴、ふえ、習字、体育館ばき、部活動で使用するのみ)、美術用のパケツ(使用期間中のみ) 	
学 校 用 品	カバン・バック	<ul style="list-style-type: none"> ・学用品は必ず指定バックに入れ、使用するカバンはつぶさない。 ・カバンやバックに学習に必要なかざり、キーホルダー等をつ 	
		<ul style="list-style-type: none"> ・学用品は必ず指定バックに入れ、使用するカバンはつぶさない。 ・カバンやバックに学習に必要なかざり、キーホルダー等をつ 	
学 校 用 品	着 帽	<ul style="list-style-type: none"> ・パッチは必ず所定のところにつけて、着用期間は左胸に略章をつける。) 	
		<ul style="list-style-type: none"> ・パッチは必ず所定のところにつけて、着用期間は左胸に略章をつける。) 	



制服問題

息子の心にうつったもの

小俣 軍平

未だにお上の学校



兵庫県の女子高校生の校門死事件をきっかけにして、また校則問題が燃え上がってきました。またという言い方は大変不謹慎なことではないなあと自分でも思うのですが、……。この問題は、今日に始まったことではなくてずっと昔から何十回となく登場して来ては消え、また燃え盛る問題なんですね。

今度のテーマになってる制服の問題もその中の一つで、同じような経過を辿ってきているように思います。しかも相変わらず制服を強制している学校のほうが数の上でも圧倒的に多いんですね。何がこうも学校側を高姿勢にさせて

るのか理由はいろいろ言われていますが、わたしは、日本の学校のでき方にあると思います。地域住民の要求があって、こう子どもたちを育てたい、そのためには、こういう学校を作ろう、こういう教師を見つけてこよう、こういうことを教えてもらおうということよりも、富国強兵という国家目的が先にあって、出発した日本の学校は、ずっとお上の学校でした。そして、百八十度方向転換をしたはずの戦後教育の中でもこの感覚は教師の意識の中でたたかき生きたまま残っていると思います。子どもは黙っていても毎日学校に通って来るもの、できの悪いのは学校の責任ではなくて家庭が悪い、親がなってないと……。

何かが動き出した

が、しかし、ここ二、三年来、今までとは少し違った風が学校の中に吹き始めているように思います。何が動き出したのか。

その動きには二つのグループがあるように思います。一つは、不登校と言われている子どもたちと、障害をもった子どもたち、もう一つは、一見ひよわそうに見えながら学

校の枠に容易にはまらない子どもたちです。前者は、文部省の発表でも四万八千人、わたしの感じではその倍以上十万人はいるのでは……と思うのですが。障害をもった子どもこそって「なぜこの学校に行けないの？」と行政に問いかけて十年、最初の頃の子どもたちが、「高校にもみんなが入ろうよ」と言い出すまでに成長してきました。後者は、集団になるとあるごとに教師を悩ませ、取り締りに出ると円形脱走だ、心身症だ、気分がすぐれない、と言ってからめてから教師たちにゆさぶりをかけるという状態で、この状態はただことではないと言うまでに文部省を追いつめています。校則問題どころか、日本の学校のあり方そのものの土台にまでメスを入れないと許さないような勢いです。

あざやかなＴシャツに短パンで通学

さて話をもどして制服にしばらく考えてみたいと思いますが、わたしの息子（いわゆる自閉児）はその障害を逆手にとって、中学時代、次のように過ごしてきました。（本来なら闘ってきましたというところでしょうが、そういう

緊張したものではなくて、ごくごく自然体で、楽しくやってきましたので、「過ごしてきた」と言いたいのです）。

一年生の入学前、中学校への進学に当たりいろいろ市の教育委員会と親がやりあってきましたので、中学校長から服装や通学のしかたなどについて注文を出されました。が、しかし親のわたしたちは、学校側のそうした要求に全く従いませんでした。

息子の通う中学には白いＹシャツ、えんじ色のネクタイに紺のブレザーという制服がありました。ところが、わたしの息子はそういうものを全く着ませんでした。親が着せないのではなくて、本人が特定の物にこだわりが強く受け付けなかったのです。したがって通学は、ブルーとかオレンジ、赤などのＴシャツに短パン、はき古したビニールのサンダルという出で立ち、教室の中では指定された上履きではなくてスリッパをはいていました。

入学当初、校門の所では毎朝のようにツツパリグループと教師たちの小競り合いが起きていました。その中身は、「やれネクタイの締め方がどうのこうの」「ズボンが細い、太い」「スカートの丈が長い、短い」といったたぐいのも

のでした。

それに比べるとわたしの息子の出で立ちにはあまりにかけ離れていたもので、初めはほとんどの二、三年生が、自分たちの学校の一年生とは思いませんでした。

「こんどの一年十組に変なやつがいる」と一度に全校に知れ渡ったのは、六月一日の衣替えの時の生徒朝会のできごとでした。

校長先生うるたえる

その日はよく晴れた日でした。全校千二百人の生徒たちを前に校長先生は、衣替えの行事にちなんで、「服装の乱れは心の乱れ……」と話すつもりで早くから準備をしておりました。颯爽と朝礼台に立った校長先生は、

「諸君、きょうは衣替えの日だ、日本だけに昔から伝わる素晴らしい民俗行事の一つだ、服装の乱れは心の乱れ……」

と、そこまで一気に話して、ふと見ると、真っ白な千二百の生徒の中に一点だけブルーのシャツがまざっているの気がつきました。

「何だ、何者だ、あれは？　そうか、あの障害児か」そう

思った瞬間、次に話す言葉を忘れてしまいました。とその時、こともあろうに、そのイタリアンブルーのTシャツが、「ハッハッハッハー」と笑い声を上げました。つづいて周囲の子どもがクスクスとしのび笑いをしました。とそのクスクスは中心から左右へ野球観戦の時のウェーブのように広がって行きました。うろたえた校長は、

「服装の乱れは……」

ともう一度声を張り上げてみました。が、しかしそれは後の祭り、子どもたちの笑いの渦の中に巻き込まれて全く通じませんでした。

怒った校長は、

「やめる！」と怒鳴ると朝礼台を降りてしまいました。あわてた生活指導主任が台の上にかけて上がって

「静かに！　何がおかしいのか！」

と怒鳴りましたが……もうだめでした。

ツッパリ君たちとの話し合い

その次の日に校門の小競り合いの所をわたしの息子が通りかかると、

「あれはどうしたんだ」

と生徒たちが騒ぎ立てました。そこで、小競り合いの生徒たちと呼びかけて、ラーメンを食べながら制服のことで、わたしとツッパリと話合っていました。

「一緒にTシャツに短パン、ビニールサンダルやってみないか？」

ときそってみました。ところが意外なことにツッパリ連中はすっかり弱気になって、

「それが……できねえだよなあ……」

ということです。今までけっこう学校とやり合ってたと思っていたのが、実は孫悟空ではないが教師の手のひらの上で踊らされていただけで、事の本質には何も考えおよばなかったということです。

その次の日、校門での小競り合いは自然消滅してしまいました。

芸術家としての良心が許さない

二年生の時にもいろいろおもしろいことがありましたが、制服問題へのかかわりは三年生の秋、卒業アルバムの写真

を撮るところでまたまた大変な問題になりました。

その日は、冬型の気圧配置で寒い日でした。Tシャツでは寒いので息子はその日はセーターで登校しました。クラスメイトはみんな揃いのブレザーでした。

いざ写真を撮る段になって、その学校に長く出入りしている写真屋さんが、わたしの息子とわたしの所へ来て、びっくりするようなことを言いました。

「お宅の子どもはなんでセーターなんかで登校したのか、今日アルバムの撮影があることくらいはわかりきってることなのに……」

と言うのです。

「それは十分承知してましたが……」
と言うと、

「わたしは何十年もアルバムを作ってきたが、制服を着ない子どもが入った写真は撮ったこともないし、そういうアルバムを作ったことは一度もない。わたしの芸術家としての良心が許さないのだ」

それはまさに息子とわたしにとっては、晴天の霹靂でした。親のわたしもまた言い返しました。

「そうですか、芸術家の良心ですか、あなたがそうおっし

やるのなら、わたしの息子は制服は着ませんので、どうぞアルバムからわたしの息子をはずして下さい。そういうあなたの芸術家としての良心を曲げさせては申し訳ないことですから」

と、担任と教頭があわてだして、

「それではどうでしょう、ブレザーを着なくてもいいからちょっとこう肩のほうからかける型で……」

と、とりなしてきました。わたしと息子はそれをあくまでも拒否しました。

「それでは、アルバムがないことになるが」

と担任が言うので、わたしは、

「それは全く気にしておりません。わたしと息子は、制服を拒否してアルバムから除外されることを光栄に思います。どうぞ写真屋さんには芸術家の良心を曲げないでアルバム作りに専念して下さい」

話し合いはここでデッドロックかと思われましたが、こちらの気持ちが変わらないことをよく知ってる担任の説得で、「芸術家？」のほうが折れてきて、わたしの息子はセーター姿で撮ることになりました。

* * *

たった一人の反乱でした。この年、わたしの息子がしたようなことは、本来なら、教育のありよう、あるいは学校とは何かということで、教師集団の中で当然問題になることだと思のですが、残念ながらそうなっておりません。それから二年ほどたったでしょうが、ある県で特定の子どもの肖像写真をアルバムに載せないで花の写真を載せた学校があるということで大さわぎになったことがありました。新聞社から「こういうことが他にもあるのですか」と聞かれて、わたしのほうがびっくりさせられたことを今思い出します。本当に知らないのかと思って……。

(八王子市立散田小学校教諭)



制服について

佐藤 円

(高校二年生)



私は中学時代制服が嫌いでした。着替えは面倒だし動きにくいし、夏暑くて冬寒くて、おまけにあまり清潔でもないし……。唯一の利点は着ていく服を選ばなくていいことでした。遠足なんてことになる何日も前から服に悩んだり、買いに行きたくなったりもう大変。今考えると笑えるけどその頃は必死でした。

今私の通っている高校は制服があるけど、私服でもよいのです。入学後しばらくは制服だったけど、今はもう私服で通っています。最初は着ていく服に悩んだけど今はそれほどでもないです。組み合わせの要領を得たのと、あまり気にしなくなったのと両方が理由でしょうか。テスト中はTシャツとGパンとか……。

でも今は制服も嫌いじゃないです。強制されてないから

抵抗感が少なくなったのでしょうか。それにやっぱセーラーは見えてかわいいと思います。ただ私は面倒だから着ていかないけど。

うちの高校の女子はほとんど制服で来ています。セーラーが好きな人もいれば、ただ私服に悩むからという人もいます。でももし中学もずっと私服だったら、そんなに悩まなかったんじゃないかと思います。中にはおしゃれな服ばかりで学校に着て来れるのがない人もいるみたいで、それには頭が下がってしまう。でも学校から帰って何着てるんでしょう。

制服は、もたらなければ何も問題は起こらなかったのだろうから不要なものだと思います。でも皆と一緒が好きなん人もいるし、無理に否定する気はありません。高校みたいな制服だけ、私服だけ、両方良い、といういろいろあれば、個人で選べていいと思います。

ただ義務教育である中学は、学校もそう皆が選べるものではないので、規則などは少し考えてもらいたいですね。制服を強制するなら、せめて脱ぎ着や重ね着、動きやすさの点で学校生活に合った制服にすれば、もう少し理にかなうというもののに、と思います。

制服と

つき合って十年

仲村乃梨子



私が制服を初めて着たのは中学校一年生の時だった。それから高校・大学と十年間、制服との付き合いがあったが、いつもイヤな思い出と重なり、学生生活そのものもひどくつまらないものになった。

私は父の仕事の関係で約二年ごとに学校を転校していた。小学校を卒業したあと急に父の転勤が決まり、中学校は他の市の学校に入学することになった。

初めて中学校へ行った時、学校の雰囲気が何となく違うことに気がついた。「転校生」というと好奇の目で見られることには慣れていたが、いつもと違う違和感があった。違和感の原因は、その中学校は制服があり、女子は皆同じセーラー服を着ていたのである。

私は小学校の卒業式の日に着た、自分にとって一番お気

に入りの服を着ていったのだが……。本来、私が入学する予定の中学校には制服がなく、その服は中学の入学式にも着る予定になっていたものだった。

転校したあとも母は制服を買ってくれる気配がなく、私は私服で学校へ通い好奇の目に晒されていた。私には三歳ずつ違う姉二人と兄一人がいて、上の学校への進学は三人が一緒という家族構成のため、家には余分なお金はなかったのである。

しかし、中学の制服はスカート丈が膝下までであり、私が着ている膝上の短いスカートの私服は目立ちすぎて、居心地が悪かった。偶然、家の押入れの中から長姉が中学時代に着たセーラー服を見つけ、それを少し直して学校へ通った。正式に制服を買って貰ったのは中学二年生の時だった。続いて公立高校に進んだ私はおしゃれに目覚める年頃でもあり、鏡にとらめっこして、自分に合う髪型など工夫した。でも高校では「おしゃれ」に対して特別やかましく、風紀委員が髪型や服装について検査をした。

特に私は高校へ入学したとたんカバンが壊れ布製の赤いバックで通学し、靴は進学祝いに貰った茶色の靴をはいていた。「靴は黒色に限る」なんていう校則は知らなかった

し、なんで靴は黒じゃなくちゃいけないの?という疑問もあった。

入学して一か月後ぐらいに、先輩から「目立ちすぎる」と注意されたこともあり、憂鬱な高校生活となった。制服(背広型)の前ボタンははずしてはいけないとか、ブラウスはYシャツ型ではいけないとか、白いソックスは踝の下へおろしてはいけないとか、髪の毛は肩にさわる長さになったら三つ編みにするとか、逆毛は立ててはいけないとか、いけないづくめで面白くなかった。

私の三歳上の姉は国立の高校だったが、パーマは当たり前だし、オーバーやコート類も自由で「紺または黒色のオーバーに限る」なんていう校則はなかった。だから私も高校へ入ったらパーマをかけて、素敵なコートを買って貰おうなんて思っていたのだが、同じ高校生活でも全く違い、私は規則に縛られ窒息しそうな時間だった。

そんな高校生活から早く解放されたいと思っていたが、何と私の進学した女子大学にはまたしても制服があったのだ。ブラウスやセーターを着ることは自由だったが、スーツ型の制服はまたまた着心地の悪いものだった。何故なら受験が終わったあと、家でぐうたらな生活を送っていたた

め、体重は十キロ近くも多くなり、制服を仕立てた時、ウエストは66センチ以上もあったのである。

ところが大学に入った後は通学に二時間も要したため急激に痩せ、スカートはぶかぶかでずり落ちそうな感じで恰好が悪かった。夏休みに入って制服のサイズは直してもらったが、それでも痩せたり太ったりすることがあり、ウエストはいつもピッタリというわけにいかず、落ちつかなかった。

というわけで、私の制服生活十年を書いてみたが、あの「おしゃれ」にめざめた時に思いつきり自分を見つめることができれば、今頃おしゃれ上手な楽しい人生を送れたのではないかと思う。おしゃれしたい時にできなかったばかりに、いまは鏡を見ることもなく自分とゆったり付き合うこともなく、時間を消費しているような気がする。



わたしの

制服

着なかった体験

荒野 希里



高等学校まで地方の公立学校で過ごし、その後もできるだけ束縛されない生き方を選んできた私は、生まれてから一度もユニホームというものを着たことがありません。たぶんこれからも身につける機会はないと思います。でも、ただ一度だけこの私にも制服を着る機会があったのです。しかし私にとって貴重なそのチャンスを、私は自らの意志で拒んでしまった。そのへんのことをちょっとお話してみたいと思います。

私は周囲に保守的な農村が広がる小さな町で小・中学校時代を過ごしました。小学校入学時は、みんな貧しくて、靴を履いてくる子はクラスで数えるだけ、ちびた下駄に布製のランドセル、アルミの弁当箱に入れたうどんや芋を隠して食べていた子もいました。その後、日本は急速に豊かになっていきました。祖母のお古の着物で作ったズボンな

ど親から当てがわれる物を黙って着るのが当然であった私は、既製服をたくさん買ってもらえる五歳下の妹が学校に着ていく洋服が気に入らないとだだを捏ねているのを見て、自分が何を着たいか主張することも可能なのだと知って強烈なショックを受けたのを覚えています。

中学二年生の三学期「うちの学校に制服ができる」という噂が流れました。「本当かしら」——制服というと私は女子高校生のセーラー服姿が目につかびます。重そうな襷スカートに紺や赤や白のリボンをつけたセーラー服は、それにあこがれている友達もたくさんいました。が、「気がきかなくて、理屈っぽくて女らしくない」といつも言われている私には女の子は女らしくしなさいという象徴のように見えてとてもいやでした。そしてもうすぐ三学期も終わろうというある日、突然「本校に標準服を取り入れることにしました」という親宛のプリントが配布されました。そこには今近隣の中学校がみな標準服を取り入れ出している、標準服を買えば他に洋服がいらないから安上がりだ、中学生が中学生らしく勉強するにふさわしい服装である、標準服をつけているとこの生徒かすぐわかってしまうので放課後悪いことができず非行防止になるなど書いてありま

した。男子は学生服（男子学生はなぜか中学に入るとほとんど学生服を着ていました。あの年齢にびったりの既製品が当時はあまりなかったからかもしれません）、女子はサージのブレザーに髪スカートでした。できるだけ全員着用してほしいが、標準服という性質上それに近い物は代用してよい、また新三年生は一年間しか着用期間がないので無理をして購入しなくとも良いと書いてありました。

それからは教室の話題は標準服でもちきりでした。「標準服は今学期で任期が終わるPTA会長が最後に華を飾りたいともくろんだことだが、賛成が得られる自信がないためアンケートも取らず学校と内密でことを運んだ」「デザインは専門家の意見をきくべきなのに、経験の乏しい家庭科の先生だけで決めてしまった」「あんなバカでかい髪はみつともないじゃないか」標準服の評判はさんざんでした。今なら制服検討委員会を作って学校・PTA・子どもで話し合うのが当然でしょうが、当時は親も子も陰でこそ不満は言っても表だってきちんと反対を唱える人はいませんでした。私は標準服はほしくないから作らないでくれと親に言いました。

三年の新学期最初の日、約七百人いる中学生の私を除い

た全員が標準服を着てきました。男子の学生服は既製品があるが、女子のブレザーとスカートはすべて誂えです。標準服を整えるのが苦しい親も少なくなかったでしょう。あんなに悪口を言っていたのにみんなうれしそうに紺色の服を着ているのです。朝礼では黒と紺の中で緑のセーターに緑・赤・黒のチェックのスカートの私は見事に目立ちました。なにさ、この間の悪口はどうなったのよ、私は猛烈に腹がたちました。どうして黙ってうれしそうに従うのだ、級友たちも大人もみな意気地なしで大嫌いだと思いました。

二、三日後、担任の教師から「標準服をなぜ買わないのか。ひとりだけ目立つのは困る」などと言われました。私は、標準服というが標準の根拠がはっきりしないし一方的だ、誰もが経済的に着れるというには高価すぎないか、洗濯が家でできなくて不潔になる、必要のない人は買わなくて良いはずだし、着る服はたくさんあるから絶対買う気はないと抵抗しました。そして同じ様なことを友達にも言いました。こんなにはっきり自分の意志表示をしたのは生まれて初めてのことでした。ただ、今考えると、私が一年間ただひとり私服で通えたのは、特別豊かではないにしても教育には出し惜しみしない家の子だと周囲の人たちが知っ

ていたことが大きかった。「あの家は制服も買ってやれない」と言われやしないかと思表示できなかった親はけっこういたのではないかという気がします。標準服は、食べるにこと欠く時代を過ぎて、子どもに教育費をかけたい、無理すればどの親もわが子のためになんとか買ってやれる、そういう時代に公立中学校にひろがっていったものでしたから。

緑や赤のチェックではあまりにも目立つので、私はおしやれな母が、娘時代に作ったグレーや黒や紺のツウピースを譲ってもらって着ることにしました。「あら、とっておくと案外役に立つものね」などと母はおもしろがっていました。肩にパットを入れて、ウエストをおもいきりしばったフレアータつぷりのウールのツウピースは十二、三歳の少女には不似合いだったでしょう。でも私はみんなが紺一色の時にとっかえひっかえ、奇妙なおしゃれを徹底的に楽しみました。陰でどう言われたかしりませんが、面と向かってそれを非難する人は誰一人いませんでした。私服通学は建前と本音を区別する大人社会への若い私の反抗でした。私はその後受験のための講習も進学希望者としてただ一人断りました。お金をとって講習をするわけですから、受

けなくても試験に受かってしまう子がいるというのではおもしろくありません。一人だけ勝手な行動は困るとぶつぶつわけのわからないことを言う教師もいました。「受験のための勉強というのとはおかしいではないか、学問というのはそういうものではない。教科書をきちんと学習していれば受験は怖くないと先生はいつもおっしゃっているではないか。私は自分で勉強します」と自分の主張を突っ張りました。人間性などときれいなことを言いながら、結局成績で子どもを見ている教師が許せなかったのです。頑張って標準服を着なかった最大の利点は卒業アルバムのぼやけた豆粒のような集合写真から自信をもって自分を瞬時に見つけ出せることぐらいでしょうか。

全国一斉学力テスト、詰め込み主義の受験競争の弊害、〇×式テストによる思考力のなさ、などが言われながら、さらにそれを助長する方向で学習指導要領が変わろうとしている頃のことでした。都会ではそろそろ学生運動が高校にまで広がるうとしていました。でも、田園の小さな学校はまだまだのどかなものでした。そんな中でたった一人の反乱は、私のささやかな青春の思い出です。

制服というシンボル

斎藤 千代



制服のない小学校に入った私に、母はジャンパーにブラウス、それにネクタイまで仕立ててくれた。五十数年も前の地方都市でのとびきりのおしゃれは、子ども心には重圧だった。とくに、その都市では見かけたこともない女の子のネクタイ姿の負担に耐えかねて、私は毎朝庭の木にしがみついて、学校には行きたくないと泣いた。その理由は言えない内気な子だったので、今ならば「登校拒否」と、それなりに受けとめてもらえる私の悲しみはついに理解されず、結局はしぶしぶながら姉につきそわれて登校し、「苦痛なことでもじっとガマンする」性格の基本が出来上がってしまったような気がする。

一年の一学期の転校先は付属小学校で制服だった。制服が出来るまでの一週間あまり、私服で通った心細さ、つまさを、今も忘れない。「すきとおるポイル、五段フリルのワンピースが、とてもすてきでうらやましかった」と、三十年もたってから当時の級友に聞かされて驚いたが、白い

制服の中のピンク一点は、子ども心には拷問に近いストレスだった。私はごく最近まで「絶対に目立たないこと」を信条にして生きてきたが、考えてみると、このへんに、その根があるのかもしれない。

今の中学校、その頃の女学校も制服で、「みんなを着ればこわくない」やすらぎがあった。しかし、女学校の入学試験で、その後の進学先が決まり、小学校の同級生たちの制服が何種類かに分かれてしまったのはショックだった。制服はそれぞれの学校のランクを示す、と当時の人びとには受けとめられていた。新しい制服を着た「公民」の最初の授業のテーマは「自覚」で、「この名誉ある女学校の生徒であることを自覚せよ」と教頭先生が告げた時、私はむちゅうでかぶりを振った。生まれて初めての反抗だったが、そのステータスを示す制服を脱ぐ勇氣はなかった。

制服について論じられるようになったこの三十年ほどの動きを、私は興味深く見まもっているが、制服が示すランクにふれたものがないのをふしぎにおもう。丸帽に白線二条の旧制高校の男たちは、風を払うように歩いていたが、その男たちの、制服についての敘述も、ついぞ読んだことがない。

職場での

「制服」もんだい

小さな反乱

原 ゆたか



朝のミーティングで課長から「会社規定どおり五月十五日から夏服（女性には新型のもの）を着用するように」と、再三にわたって注意があった。いつものように左の耳から聞いて右へ流していたが、何故か制服に関しては執拗にこだわってきた。

「制服をなぜ着ないのか」「当センターでは着用しない人の数がまだ多い」「他局ではいっせいに着用している」「理由を聞いて部長に上申するのだ」と個人個人にせまってきた。職制はいっせいに着用し、我こそは忠誠を誓う？とばかり先を競った。また、新しい服をいかに着こなすか、自分は若いぞ！とばかりにファッション争いをする人があらわれ、新服を着ない人は少数となった。しかし、短い丈のベストに、ポケットは飾りだけでハンカチも入らないというもので、パンツの生地は薄くとても冷房に耐えられ

るものではなかった。病気がりの人、今不調な人、顎わんの人は着られるものではなかった。

気の弱いある女性は課長に注意されて新型の服を着てみたが、一時間もすると寒さに耐えられずロッカールームにかけ込み、もとの服に着替えていた。

私は課長に聞いてみた。「なぜ女性にばかり制服（私たちは作業服という）を強要するのか」「管理者は着ないのはなぜか」「仕事のしやすい、着やすい物を貸与されれば言われなくとも着る。我々の要求する作業服を支給せよ」と迫ったが、課長は一貫して自分の意見はもたず、会社が貸与したものは着てほしい、決まりだから、をくり返すのみだった。

二週間はどそのまま放置されたが、再び課長から呼ばれ、「私（課長）との話では会社の言い分を聞いてもらえないことがわかった。これ以上話をしては無駄だと思う。今度部長が話を聞きにくるかもしれないので、その節はよろしく」と言われた。

ある女性Kさんは一貫して制服反対論者である。部長室まで行って部長と約一時間にわたって話をしてきたといって自らを誇っていた。「同じ服を着るなんて気持ちかわる

「獨自性・創意性を殺す」「企業にとっても個性を殺す」とマイナスになる」「個人を信頼して、のびやかに仕事をさせてほしい」等々を主張したそうであるが、部長は、「みんなよく似合っている。きれいでないか」「貴女も着ればよく似合うと思うよ」等々と平行線。彼女は「そんな思想はファシズムです!」と言って出てきたそうである。

ある新人管理者(全電通の役員あがり)は、「おばちゃんばかりの制服は、もうええわ、若い人が着てみせてえな」などとふざけたことを言って、女たちの怒りは頂点に達した。職場のあちこちで、仕事よりも我々のミーティングに花が咲いた。

「みんなでたたきつけて返そう!」という意見や、私たちの働きやすい服はこれだといって、真っ赤なジャージ姿で仕事をしよう、とか、冷えるから腹巻をしよう、とか、ゼッケンをつけよう、とかさまざま意見が飛び出し、楽しい雰囲気になりかけた時、全電通(連合)が乗り出してきて、職場で事情聴取をはじめた。そして、団交で話をつけるから勝手な行動をしないようにといって、何と婦人会議が押さえてまわった。

私は組合も別だから、単独で課長に申し入れた。「先日、

部長が来ると言ったが来ないのはなぜか」と聞くと、課長は、「部長はもう来ない、方針が変わった。着てもらえないのなら返してもらおう」と言いだした。返すのはいつでも返すが、私は、作業服は重要な労働条件のもんだいなので「支部交渉のテーブルにのせてほしい」と要請した。課長は「上申します」と言った。

早速、電通合同の中電支部委員長にこの間の報告とともに、このもんだいは支部交渉の糸口になる可能性もあるのでもよろしくと伝えた。

しかし反応は「これくらいのことでは……!」とあまり乗り気の返事は返ってこなかった。

* * *

結果的には、全電通の協約の範囲で決着をつけられた。

「被服規定にもとづき貸与をうけた服をすみやかに着ることを前提として、からだの弱い人、サイズの合わない人、かぶれる人等は特に強要しない」といった内容で、二週間以上にわたるたたかいは収拾された。該当する協約とは、

①被服規定の貸与規定にもとづいて貸与される ②着用規

定どおり、勤務中その服を正常に着用しなければならぬ
③被服が身体に合わないときは原型に著しい変更を加えない程度でこれを修理する。また、善良な管理者の注意をもってその被服を使用し、また保管しなければならない——といった文章であった。

わざわざ善良な管理者と書いてあるのをみると悪い管理者もいるらしい。今回は、若干悪い管理者がとびはねたということか。「新しい服はかぶれて着られない」と訴える
と「医者に行け」と言っただけに身体を合わせると言わんばかりの管理者もいたから——。

協約とは労働者を守るためにつくられたはずなのに、いくら古い協約でもそれを超える要請に対しては切り捨てる力がはたらくものである。闘おうとするエネルギーの盛り上がりを押さえ込み、水をかける要素もあるということ、久しぶりに現場の闘いで再認識した。

制服もんだいが話題となるのは、常に学校だったが、職場でも同じもんだいとして起こった。制服は個人の人格を抑圧し、ある種の権威が一人歩きをする。今年の春赴任してきた部長は、他局で、制服に右へならえをさせて有名な管理者だそうで、中電（電報サービスセンター）の体質を

変える役割をもって来たにちがいない。

「制服」着用もんだいで、先ず、どのくらい会社の指令（意思）が入り込むのかを探りたのだと思う。後に待っている個人別対応管理—列監席の導入、監督者の意識変革が主な目的であると思うが、すでに十五日から導入されることが決まっている。ある意味では、「制服」もんだいの闘いですでに労働者の力は計られたし、会社の方針は固まったと思う。この間の会社の施策を担う者の中心は、どうやら女性と若い男性におかれてるように思う。監督者のミーティングでは「十五日から予定どおり列監席の実施をやる。一部妨害者が出るかもしれないが、その対応についてのマニュアルを教える。スムーズに実行してほしい」との話だったそうである。職場において、初めてがんばって認められることにこの上ない喜びを感じる者、自立できない自らの弱さを、他人と同じことをし、同じ服を着ることで安心感をもつ、こんな心理をうまくついで支配しようとする会社の姿勢は、女性を登用させるのが目的ではなく、女性差別を利用する管理の体制を強く感じるのである。

ダイヤルQではNTTの体質が世間でバクロされている。暴力団に甘く、弱者（子ども）にあくどい体質がみえ

かくれた。今回の新「制服」も、有名メーカーとデザインでちょっと今までの作業服とはちがったもので、金をかけたものであることは一目でわかる。

しかし、作業服の要素よりもファッションに力を入れて、見せるためのものになったことは大きな変化でもある。

なぜ女性だけが先行実施で注意を受ける対象なのか。男性の中にはTシャツとぞうりばきで仕事をしている人もいるというのに何も注意をしない。会社の性差別構造がうきばりにされたと言える。残念ながら、このセクシャル・ハラスメントに対して闘いをいどむ意識性はまだ育っていない。企業ぐるみ、組合ぐるみで女を見せる物、サービスさせるものとして商品化していく思想に、いつか一矢を投じたいものである。

Kさんが抗議したように、人を画一的に見て、一色にしようとする考え方はファシズムであり私も反対である。さらに、画一的な労働組合の指導で闘いをいどむこともまた、今では空虚なものを感じる。おんなたち自身の性差別を自覚し、怒りの中身をつきあわせられる関係づくりこそが問われているのではないか。セクシャル・ハラスメントと闘う労働組合はあぶるの存在が期待されているのだと思ってい

る。

さて、問題の「制服」だが、「セクシャル・ハラスメントと闘う労働組合はあぶる」の機関紙「それゆけ女たち」第六号に、わたしの同僚きくちゃんがイラスト入で紹介しているの、それをそっくり使わせてもらうことにする。



(「婦人通信」 一九九一年八月号より転載)

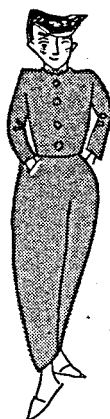
「婦人通信」の申し込み先は 社会主義婦人会議

東京都豊島区目黒2-23-25 ☎ (03) 3984-15105

ダサイ学生服は着たくない子の物語

“ボンタン”を選んだしん

野原まさこ



中学校に行くと、異様な集団が目につく。映画「ピーパップ・ハイスクール」にそのまま登場させてもおかしくない服装をした子どもたち。話してみると、その澄んだ目とともにむじやきな口調に驚かされる。かわいい子たちだー！

好きな服が着たい

一人っ子のしんは中学三年生。両親は優しい、なに不自由ない生活。性格は明るくスポーツ万能。友達にも好かれ、女の子にも人気がある。漫画以外の本はまったく読まないし、家にも本らしい本はない。自分の部屋に立派なCDの

装置とビデオ付テレビがあり、ホラー等のビデオはときどき観る。好きなアーティストは、エックスであったりプリプリ（プリンススプリンス）であったり。中三だから当然受験勉強もやっているし、行きたい高校もある。

ごく普通の少年っぽいしんであったが、ひとつだけ他の子と違うところがあった。それは、不良が着ると言われる“ボンタン・短ラン”に異常に興味があるという点である。

服装の乱れは不良の始まり……と学校の先生は必ず言う。

校則には“中学生らしい”服装とはかくあるべし、とこま書きいてある。ボンタンなどはいって学校に行ったらすぐに目を付けられ、お説教されることまちがいなしだ。おまけに不良のレッテルを貼られてしまう。さあ困った。

しかし中学に入り、先輩のはくボンタンがカッコヨク見えてしかたがない。自分でもはいてみたくてしかたがない。「俺は絶対にああいう格好が似合うはずだ」しんは確信をもっていた。

人見知りもせずのびのびと育ったしんは“束縛”が何よりいやだった。“やるな”といわれることをやってしまうことなどなんということもない。説教されようが、しから

れようが自分のいきたい道を俺は行くんだ。こんな俺を人は「つっぱり」とか「不良」とか言うだろうがかまうことはない。とにかく、あんな格好で学校に行きたいんだ。

目立ちたいんだ

中一のとき、ボンタンをはいている先輩と話をした。回りから「悪い子」とレッテルを貼られていたけど、優しくったし、大人っぽく見えてかつこよかった。ときどきそういった先輩たちと話をしているうちにだんだんとわかってきたことがある。この道には、ルールがあって一年生のうちは、まだボンタンをはいてはいけないし、はいたとしても目立った太さのものは絶対にだめだということ。三年になったら何を着ようが自由だということ。三年の中でも、番長になったらそれなりのものを着こなすこと。

ボンタンを売っている店はもうわかっていたし、こづかいは親からいくらでも貰えたから、とりあえず一本買っただけであつた。でも一年生のうちは我慢した。もちろん私服にもお金をかけた。もっぱらGジャンやジーパンに凝っていた。

しんのこづかいは、二万円。でも服を買うお金はそれでは足りないから、母親にねだって買ってもらうことが多かった。目の中に入れても痛くないかわいい息子のために、いつい、財布の紐が緩んでもそれほど気にならないタイプの母親だった。

自由に着こなせる三年になるまで俺は我慢したんだ……という自負がある。いよいよ三年生だ、という解放感もあった。先輩たちが卒業し、いよいよ最上級生になると、我慢していた分を一挙に開放し、頭の前から足の先までトータルにファッションアップに自分自身を表現しはじめた。ヘアースタイルはもともと額の両側が剃り込みをいれなくても持ち上がっているの、てっぺんをガチガチムースで固めれば格好がつく。二年間で買い溜めたボンタンはタンスに一杯になっていたの、とっかえひっかえはいてみた。学校の制服は普通の学生服でダサイ。あこがれの短ランにTシャツをなかに着込み最高の気分だった。「目立つ」いい気分だ。皆が俺を見る。勉強では目立つことができないが人と違った服装で、気分も高揚する。悪くなかった。担任は学校でも一番人気の、ものわりの良い教師だったが、この変化に驚き懸命に説得した。けっして押し付けでなく、

話し合いで、生徒の側に立って……とできるかぎりのことを試みた。しかし、やっとの思いで自己表現しようとしている少年には、うっとうしいばかりであった。

いつの間にか『不良』になっていた

この頃一人の転校生がいた。小三の頃からほとんど学校に行っていないので、名前ばかりで学校には来ないだろうと教師たちは思っていた。この少年に関しての資料はほとんどなく、誰もが無関心だった。ところが来ないはずのこの少年けんたがときどき学校にやって来るようになった。

学校中の教師は愕然とした。ことに担任は真っ青になった。けんたは色の白い透き通るような肌をした美少年で、その髪は金と赤で色づけされていた。しんは驚いた。その強烈さに脱帽し、仲間意識を持った。小学三年生の学力しかないけんたの保護者的気分で学校嫌いをなおし、いつも行動を共にする友達として付き合い出した。

面倒見が良く、力の強いしんはこの学校の番長としての地位を獲得し、取り巻きとしてけんたはもちろん落ちこぼれタイプで授業に集中できない子や、不満を抱え爆発寸前の子などがしんの回りに集まり出した。

集団になると気も大きくなるものだ。ボンタンをはき、髪を染めたこの子たちは『不良の集団』としてレッテルを貼られ、自分たちもその気になりだした。違反行動をとり、つっぱることが生きがいになってきたのだ。つまらない授業はエスケープ。タバコにも手を出し、一日一箱吸うようになってしまった。

おしゃれが好きなんだ

この頃のしんの毎日は夜眠る前のヘアースタイルのお手入れに一時間弱かけること、明日着る洋服を選ぶこと、友達にボンタン等のアドバイスをすること、暇さえあれば気に入ったボンタンを売る店を探し、貰ってきたカタログに見入ること、友達に安くボンタンを売りつけること、であり、ゆくゆくはボンタンのデザイナーになりたいものだとぼんやり考えていた。

しかし、好きになったものが悪かった。この格好で溜まっていると冷たい目に晒されるのはまだしも、暴走族の標的にもなる。暴走族の頭から卒業したら人員確保のため族に入るように言われてしまう。体育祭の時に暴走族が押し

寄せるという噂が流れ、PTAはパトロールをやり、教師は前日から泊り込みという大騒ぎになってしまった。

すっかり不良気分のしんだが暴走族に入る気はない。まあなんとかなるだろうと親や教師の心配をよそに、ケセラセラと楽しく毎日ボンタンのスタイリストをやっている。

今しんのお気に入りは「凌賀」というタンランに「オーパーワング」というボンタンだ。なぜかっていうと「つりあい」とれているからだ。タンランの中は赤の丸首のタンクトップ。靴下も真っ赤。くつは本当の不良はツツカケを足にひっかけるくらいにさりげなく、きたならしく履いているのだそうだが、しんは中学の上履きを潰して履いている。ボンタンはベルトでキュツとしめ、あくまで腰は細く、ボンタンの太さを優雅に見せるよう工夫する。タンランの下からのぞく真っ赤なシャツがおしゃれっぽい。時々タンランを脱いで、赤いシャツのまま廊下を闊歩するのも気分良い。

ボンタン仲間はしんのアドバイスもあり、それぞれが個性的にきめている。けんたは丈のながい中ランに、ドカンとよばれるぶっといズボン。他の子もそれぞれ「ロビナッシュ」「魔界」「NSX」等と名づけられた中ランやボン

タンを着こなしている。しかし、このなんとも仰々しい名前を言える子はしんのみである。

現実 は きびしいぞ

二学期にはいると偏差値もはじきだされ、いよいよ進学先の決定時期になる。高校側は、子どもの数が少なくなるのを見こしてか、人気とり優先で「つっぱり」とよばれる子は絶対と言っているほど取らない。

髪が赤いはず。変形学生服ベケ。これが現実なのだ。さあどうしよう。しんの心は揺れ動く。

とりあえず卒業式には「先生を喜ばしいから」標準の学生服で出ることにした。でも皆をあと言わせたから前の日までは着ないのと言う。たった一日だけの学生服なんてもったいないと思うが、それでいいのだという。しかしそれでいいのだろうか。わからない。

入れる高校はあるのだろうか。三月まで妥協して、学生服と坊ちゃん刈りにすればどこかに入れるのに……と大人は思うけど、しんはどう考えているのだろうか。

本当の試験はこれからだ。

お揃いってそんなにいいの？

制服論から生き方が見える——

レポート 荒木 のり

若いカップルがお揃いのTシャツを着て手をつないで歩いていたり若い母親が小さな娘とお揃いの手作りスカートを着て遊んでいるのを見ると、お揃いっていいなと思う。でも奥川 睦さんから松山では公立小学校に標準服があると同って驚いた。倉敷市に引っ越した友人が、紡織の街だ



から地場産業発展のために小学生にも制服を着せると嘆いていたが、それは特殊な地域のことだと思っていた。小学生といえは家へ帰ってきた子どもを一つつかまえて大あわてで服を脱がせて洗濯機に放り込むのが日常だから、制服が三組必要だな、それにかわいい一年生が私より立派な胸の六年生になるとすれば、三回買い換えなくてはならないだろうとひとことながら心配になる。

私にも標準服を着ている中学生がいるが、制服の不都合な点は目についても、利点はいまひとつわからない。これだけ普及しているところをみると、存在意義もあるのだろうから、公立学校の標準服（というが、実態は制服のところが多い）というものを、いろいろな立場の人から意見を聞きながら探ってみることにした。

標準服擁護論



「仕事をしながら女手一つで子どもを育てました。制服があったので子どもの服の心配をせずにすんで助かりました。高価な物を買ってやれない貧乏家庭には中学や高校



のおしゃれざかりに制服があるのは本当にありがたい」と、六十歳になる女性も制服を礼賛する。

「とにかく楽なんです。今まで、何を着ていくかで姉妹で喧嘩をして、毎朝大騒ぎでした。姉が中学生になってから選択の余地がないから、あの騒ぎが嘘のよう。ただ、夏服、冬服と着る期間がきっちり決まっただけで融通性がないのは考えてほしいですね」制服を着たら急に大人びて、本当にうちの子かしらって感じ。そうしたら、おもしろいことに、やることも中学生らしく、しっかりしてきた。制服のせいばかりではないでしょうが、それらしい服装をすれば、それらしく振る舞うようになるのですね」

以上は一年生をもつ母親の声。制服賛成派の親たちの意見は、制服があると何を着せるか考えないですむから楽だ、服を買ってくれと言われないから経済的だ、この二点が圧倒的に多い。

「制服を着ていれば、どこの学校の生徒かわかりますから悪いことができない。いいじゃないですか、制服。うちは駄菓子屋です。いるんです、万引きしたりするのが」こう言う人もいた。

「制服？ 僕はあんまり洋服のこと気にならないから。」

朝何着ていくか迷わないですむのは楽かな。幅をきかせたいからとお不動さんの縁日で買ったボンタンをトイレで着替えている友達もいますが、そういうのってよくわかりません。学生服で首のところがきついのはいやです。僕は普段はランニング型Tシャツに半ズボンが好きで、友達から「おめえ、幼ねえな」と言われる。制服がなかったら何を着て通学するか考えたことないです」これは、中学二年の男子。私が取材した公立中学生たちからは制服好きという肯定的な意見は一つも出なかった。でも、中学校の生徒会指導の先生の話によると、子どもたちの声とちょっと趣きが違う。

「制服問題ですか？ 今の子は何も考えたくないんですよ。生徒会で服装のことを考えてみたらと提案しても、朝何を着ていくか考えるのは面倒臭い、カッターリから決まっているのがいいとこうですよ。服装を自由にしたい、なんて言う覇気のあるやつは全然いませんね」子どもたちの主体性のなさを強調なさる。

「子どもの生活の乱れは、まず服装の乱れとなって出てくるんです。標準服のズボンの太さやスカート丈を変える。私たちはすばやく子どもの変化を察知して、非行に走

らないよう十分に指導します。以前は本校でもスカート丈を計ったり、髪のカールしている子に幼児の頃の写真を持たすなどしたようですが、今はそんなことありません。中学生らしい生活をきちんと送るにふさわしい服装ということで標準服は望ましいと思います。今はやたらお金を与える親が多いですから、自由にしたら歯止めがきかなくなり「ますよ」生活指導の先生は、子どもの服装の乱れは心の乱れだと自信をもって言い切られた。

お揃いは本当に経済的か



冒頭の年配の女性のお話を伺うと、服装を自由にせよとは贅沢なように言いにくい。でも時代や社会状況のせいかな今年子どもを公立中学に入學させた親としてお揃いが経済的か疑問に思える。義務教育は無償ということだが、中学入學時に買われるものの総額（最低必要なもの）は下記の表のとおり。もちろんこれは身につけるものだけで、問題集や笛のような教材類は含まれていない。

♫ 「子どもが中学に入るとき驚きました。私も高校時代

制服を着てましたから洋服だけならそんなに抵抗なかったと思いますが、バックから靴から体育着から何から何までお揃いです。体育着には大きな白いゼッケンを縫い付けさせられてとても嫌でした。学校で一括購入の時に行かないで、子どもと一つずつ別々の所へ買いに行った。面倒ですが、それが私にできたせめてもの抵抗でしたから」

冬服上下	25,700 (28,600)
長袖ブラウス3枚 (Yシャツ)	6,300 (6,900)
夏スカート (ズボン)	8,500 (7,200)
半袖ブラウス3枚	6,000 (6,300)
靴下 (3足組)	1,000 (1,000)
セーター	5,000 (5,000)
小計	52,500 (55,000)
カバン大小組	7,800
体育館履き	2,800
上履き	800
体育着 長袖上下	7,100
Tシャツ	2,200
ブルマ (半ズボン)	800 (1,400)
水着	2,000 (1,100 + 450)
帽子	350
小計	23,850 (24,000)
合計 女子 76,350円 男子 (79,000)	

1991年都内の一公立中学の場合 () 内の数字は男子物

❧「学年カラーと言って体育着も上履きも何でも学年によつて色が違う。だからお下がりがかかない。うちは三人子どもがいますが、二歳違いなので全員新しく揃えなければならぬ。隣の兄弟は三歳違いで、親はヤッター、おさがりがきくと大喜び。出産計画を間違えちゃったわ」

小学校時代、子どもは裸で生活しているわけではない。洋服も体育着も教材を入れるバッグや上履きも持っている。それらが一切使えない。

制服は楽と言いますが



一度買ってしまったれば何も考えずに着られる楽な物、制服。それに悩まされている人もいる。❧「私は仕事をしているのでとても忙しい。ところが、下に着るトレーナーやセーターは無地かワンポイントでなければだめ、色は黒、紺、靴下は……、コートは……と、とにかくうるさい。今はおしゃれなものが多くて、デパートやスパーへ行ってもいいかなと思うと後ろにかわいい模様があったり、決まりに合う物を見つけるのに大苦勞。制服専門店へ行けばいい

のかもしれないが、けっこう高い。子どもが四人もいたら特売を利用したいと思うでしょ。それに何でも決められた所で買うのには抵抗を感じますね」❧「ネーム入りでとても高かったのうちは運動着を一枚しか買わなかったからたいへんです。夜のうちに洗って、家の中につるして朝アイロンをあてて。小学校時代のが二枚あって十分着れるのに着せられない。変ですよね」

❧「おれ、サッカーのキャプテンしていて、お尻が普通の子より大きいんだ。学校指定の店で買った既製服だときつくてかがむとビリッとやぶけてしまった。腰まわりに合わせて買おうと、胴まわりがダブダブでどうにもならない。洋品店で黒いズボンを買ってはいいたら、先生が「おまえ、決まりのズボンではない」って、親まで呼び出された。親は職場まで電話かかってきていろいろ言われたからびっくりして、頼むから先生の言うとおりにしてくれ、変わったことするなって。おれは自分に合ったズボンがはきたかっただけなのに、いくら言っても「服装の乱れは不良の始まりだ」とか言っつてわかってくれない。親も学校も何バカ言っつてやがんだって気になってきた」これは中学二年生の男の子だ。とてもしっかりしたかわいい子だと思うが、学

校では突っ張り君扱いで、「教師はおれのこと無視する」と荒れている。

私服では華美になるって本当?



♫「双子がいて、別々の公立高校に通っているんです。

二人とも標準服はあるんですが、一人のほうは夏の暑い時期と雨の日だけ私服で、後は標準服で通っています。もう一人の娘は、今ほとんど私服。私服といってもジーンズにTシャツみたいなスタイルが多いですが、でもこちらの子の学校ははです。ソバージュにしている子やマニキアをしている子もいます。自由はいいと思いますよ。でも自分をしっかり持っていないと流されてしまいます。どちらを着てもよいぐらいなら、標準服も悪くないと思います。制服を着られるのももう三年間だけ。着て行きなさいと私は言うんです」私服でもどちらでもよいなら標準服も悪いものではないと、高校一年の双子を持つ母親は言う。

♫「うちの近所で標準服から私服になった高校があります。子どもがちょっと変わった服装するというのは最初の半年です。後はジーンズやトレーナーみたいなあたりま

えの服装に落ち着くんですね。姉の子が神奈川で制服のない中学校に通っていますが、おしゃれがエスカレートすることはないし、時々変なかつこうをしている子がいても子ども同士「おまえ趣味悪いぞ」みたいなことでやめてしまおうです」大人が心配するほど子どもは変な服装はしないと言う。

標準服そのものよりも

管理が問題



子どもたちの声を聞いていると、彼らは制服そのものより服や身につけるものによる管理を嫌っているように感じられる。♫「みんな標準服を黙って着ているよ。好きとか嫌いとか言える雰囲気じゃないものね。先生たちは、靴や鞆が自由で校則もゆるやかなほうだと言うけれど、忘れ物取りに行くのも標準服。一年生のとき、着替えて帰された。学校の中へたった五分入るだけなのに、本当に腹がたった。靴下の色までチェックするんだから。私の友達で靴下かたちんばでも気づかないようなのんきな子がいて、この間ベ

ージュにピンクの小さい模様のついたのをなにげなくはいったら脱がされていた」中学三年の女子です。

「いつもTシャツにショートパンツだったから。スカートは重いし、ブラウスはテトロンと綿半々で暑い。友達はタサイ、かわいくないって言っている。女子は、みんな下着に凝るの。色物、柄物禁止なんて学校からプリントくるけれどね。私もベージュとか水色とかレースついたのや着ている。はでなストライプや水玉だと白いブラウスだから透ける。生活指導の先生が廊下で上級生に、おまえ、柄物の下着は禁止だぞ」と言った。そしたら先輩たち「わー、先生エッチだ」「女子の下着覗こうとした」「いやらしい」と大騒ぎした。それから何も言わなくなつて、時々、女の先生に頼んで、そんなはでな下着いけませんよ」なんて言わせてる。江戸時代、町民は絹着ちゃいけないとか法律があつて裏地に凝つたよね。私たちってまるで江戸時代の町民だねって笑つてんの。バカみたいなこと多いよ。私の髪の毛、生まれつきクルツとしてるので女の先生に、あなたブローしているでしょ」と言われた。違います」と答えても全然信じてくれない。脇にいた友達が生まれつきですと言つてくれたからよかったけど。先生だってカー

ルしているじゃないですか」って言つたら、先生は大人だからいいんです」だって、へんだよ。でも、そんなこと言うと内申書が悪くなるからやめな」と先輩に注意されちゃった」これは一年生の女子。

「標準服買いに行った時、うち、セラー服でしょ、お母さんが、もっとスカート丈短いほうがかわいいんじゃないの」と言つたら、一年生のうちはこれぐらいにしておきなさい」って洋服屋さんが売ってくれない。ほんと、一年生が一番長くて、二年生が少し短くて、三年生が一番短い。それで、入学したら先輩が怖い。髪の毛とか靴の紐の色とか。スーパで買い物をしてたら、あなた一年生でしょう。おじぎするものよ」なんて言われちゃった。それからは毎日米つきバツタみたいに一日中ベコベコ。どれが先輩かわからないから、上履きのくつひもの色で二年生三年生って判断するので、いつも下向いて歩いて、黄色だ、ベコ、赤だ、ベコ。学校の外だと上履きがないから、バツチをじっと目を皿のようにして睨んで、ベコ。危険だから誰を見てもベコ。あら、私よ、私、って同級生だったりして。最近、あれは上級生だってわかるようになったからあまり緊張しないけれど、最初は疲れたなあ」これも中学

一年生の女の子だ。何とも滑稽だが、本人は実に真剣。先生方は「管理していません。自主性にまかせています」とおっしゃられる。管理が巧妙なのか、管理されることが子どもに染みついてしまったのかわからないが、今は子どもによる子ども管理、先輩・後輩の関係が異常にきつい学校が多いという。

制服を望むのは親



❧「私の息子は千葉県でただ一つ制服のない公立高校へ行ったのです。創立当時から伝統らしいのですが、毎年一年生の親から制服をつくってくれと要望が出るのです。その理由は、工事の人など外からの人が入り込んで物が盗まれるから、制服を着ていると区別がつきやすいとか、ステイタスとしての何か、バッジでは目立たないから制服をつくれとか……なんです。学校はそのたび私服のよさを説明していましたね。ただ今の子というのは、毎日同じ服を着ていると不潔だと友達から言われるとか、着ていくものはジーンズにTシャツみたいなのですが、すごく服装

に気を使うのでたいへんです。OLならなんとなくわかりますがね、男の子ですよ。うちの子はズボラだから一年の二期期には頓着しなくなりましたが、神経質なお子さんは三年間まじめに守っていたみたいです」これは、大学生の母親。その学校は今も私服の伝統を守っている。

❧「うちの小学校には制服こそありませんが、健康のため冬でも半袖通学にするよう学校で決めてほしい」と言う人がいるのです。子どもに半袖着せたいなら、ささと実行すればいいと思うのですよ。子どもっていろいろだから、全員半袖なんて決められたらつらい子が出るということに気づかないのでしょうか。」

❧「中学時代、息子はブレザーの制服でしたが、高校へ行って服装は自由になりました。男の子だと結局ジーンズにTシャツくらいなんです。変わった恰好をしている子はいませんね。しかしジーンズにTシャツ、これでもけっこう面倒です。買ってくれと言いますし、友達が買ったけれど小さかったから安く譲り受けたとか、いろいろあるわけです。朝などお天気と気分では何を着ようかと子どもが悩む。親はそれにきちんと向き合わなければならない。結局、これに親は耐えられないのだと思いますよ。制服は親が着せ

てほしいんです。それに制服や校則は先生方からしても子どもにケチをつけやすいですから便利なのです。カールした髪の子が、叱られるというのでストリートパーマをかけるなどというバカなことも起こるわけです。親が自信をもって子どもを育てていない結果が、制服や校則となって表れていると思いますね」と地域で〈教育を考える会〉をしている女性は言う。

◆「家庭のしつけから服装まで、今の親は何でも学校に頼り過ぎではないですか。昔と違ってパートなどで働く親がふえて子どもに目をかけられないからではないかしら」これは、子どもを持たない女性からの発言。親が「学校でお願いします」というのが元凶なのは事実だ。ただ「先生、すべておまかせします」と言う親は、私が子どものころのほうがずっとたくさんいたような気がする。今、私の親しい親たちは、そうそうお願いしますとは言わない。働く親はふえているが、「先生、お誕生会のプレゼントがエスカレートしますから三百円以内と決めてください」「卒業式の前に床屋へ行くように言ってください」などと保護者会で言う困った人たちは、いつも教育熱心で専業主婦で子どももの塾の送り迎えに忙しいような人たちだった。私はむしろ

る女性が外へ目を向けて、主体的な生き方を探すことが大事だと思う。社会でしっかり働いている人は、決して「先生、子どもの服を決めてください」とは言わない。

父親は、母親ほど子どもの着るものには関心がない。子どもが標準服を着ているかどうか知らない人も結構いた。そして母親よりも学校のことには概して保守的で、学校がそういうならそのとおりにしろという人が多い。地域で子どもの遊び場づくりをしていて、中学生とのつきあいの多いこの父親は制服反対論者である。◆「中学一年の娘が毎日標準服を着て通っています。私は、自分で着る物や自分の持ち物、自分のことは自分で決めろ、標準服などおかしいやめろと言うのですが、学校の言うとおりのことを忠実に守る不甲斐ない娘でしてね。親が言えは言うほどますます頑に学校に従うという感じがします。子どもはなかなか思うようになりませんな」

制服は暗く、悲しい

アメリカの公立学校に子どもを入れた母親が、肌の色も髪の色



もとどり、髪の毛もちりちりあり、ストレートあり、三つ編みをたくさんしたり、ピアスをつけたり、夏服みたいな子、冬のように厚着の子、精一杯民族色豊かに着飾ってくる。そんな子どもたちを見て、標準服の丈がどうの、髪の長さがどうのという日本は島国なんだなあと、つくづく感じた」と書いているのを読んだことがある。

❧「うちの学校は帰国子女が多いので、そういう話はよく聞きます。自分を主張する教育と集団に個を埋没させる教育の違いが話題になります。そういう子どもたちによって学校が少し変わるかなと思うのですが、ダメですね。少数者ですから。周囲に合わせてしまうのじゃないか」と中学のPTAで広報委員長をしている母親。

チェコ生まれの外交官婦人はおもしろい話をしてくれた。

❧「チェコやスウェーデン、フランスの公立学校は服装はまったく自由です。ヨーロッパはユニホーム着ませんね。会社でも航空会社ぐらい、それも接客係だけです。銀行などもほとんど私服です。アジア、これはユニホーム社会です。チェコの子どもたちはみんなきれいな明るい色着ます。赤とかピンクとか黄色とかとても明るい。日本の子どもたち、とても悲しいですね。さびしい。雨の日のように、

冬空みたい、くらくくて、見ていて悲しいです」彼女は覚えての日本語で「かなしい」を連発した。

❧「うちの近くにドイツ学園があるんですよ。その子どもたちは色とりどりの服装で通学していて、明るいのですね。あまりお行儀いいという感じではないが、活発で生き生きしてます。日本の中学生・高校生は、黒や紺でなんとも暗いですね」これは、いつもカラフルな服をシックに着こなしている女性アートデザイナーの発言。

中学校の入学式に出て驚いた。黒と紺の群れが演壇を向いてじっと座っている。突然「今横を向いた者が三人いた。起立！ 礼！ 二年生が二人遅れた。やり直し。起立！ 礼！」驚いて見ている新入生の親たちの前で、彼らは三回意味のない礼をさせられた。じっと身動きもしない子どもたちは、よく訓練されたおとなしい黒い羊の群れを思わせ、正面の壁には日の丸がびったり貼られていた。

『私服登校』体験中です

今、「制服について考えるため、一度『私服』を体験し



てみよう」と、六週間の私服登校の実験に取り組んでいる学校がある。東村山市立東村山第一中学は、三年前から生徒会が中心になって校則見直しを進めてきた。これまでも髪留めや腕時計、紙袋の使用が自由になった。昨年行われた全校生のパネルディスカッション「制服について考える」では「制服派」と「私服派」とで活発に意見を交わしたが、議論は平行線。そこで、「私服登校を体験した上で、改めて制服問題を考えては」という生徒の提案に学校が応じた。実験開始後、「帰宅後も着替える必要がない」「その日の気温に合わせて自由に選べる」「何を着ていくか選ぶのが面倒」「制服で中学生になった気がしたのに、また私服になって残念」と子どもたちの感想はさまざまだそうだ。子どもたちからどんな結論が出るか楽しみだ。



今、全国の公立中学で制服指定のない学校は全体の約30%程度という。私の住む東京都では六百六十五校ある公立中学のうち標準服を決めてないのが六校。都立高校は、全日制では自由なところ三十六校、標準服のところ四十校、制服百三十七校である。小学校は東京都の場合、伝統のある学校いくつかに制服があるほかは自由である。

揃いの服や体育着が悪いとは言わない。学校指定の体操着や靴など品質は悪くないと思う。ただ義務教育の公立学校は、あくまでもこういうのが良いと勧める程度にすべきではなからうか。標準服は行政が決めているのだと信じている親は多い。今、学習指導要領や教科書検定で国の教育への干渉は大きい。文部省は「制服は各学校にまかせています」と言う。子どもの通う学校の標準服は、その学校と親と生徒で決めたものだ。今いる生徒や親や教師が疑問を感じれば、どんどん改革を提案して、自分たちの学校や地域に合った個性的な服装にすればよい。もうくだらない服装規定で子どもを縛るのはやめよう。子どもたちも服装で縛られることはないと思えよう。今、子どもたちの権利条約の批准が問題になっている。服装や髪形は、人権を考える上で最も取りつきやすい問題だと思う。

子どもをめぐって



●子どもの権利に関する条約

第12条（意見表明権）

① 締約国は、自己の見解をまとめる力のあ
る子どもに、その子どもに影響を与えるす
べての事柄について、自由に自己の見解を
表明する権利を保障する。その際、子ども
の見解が、その年齢および成熟に従い、正
当に重視される。

第13条（表現・情報の自由）

① 子どもは表現の自由への権利を有する。
この権利は、口頭、手書きもしくは印刷、
芸術の形態または子どもが選択する他の方
法により、国境にかかわらず、あらゆる
種類の情報および考えを求め、受けおよび
伝える自由を含む。

第14条（思想・良心・宗教の自由）

① 締約国は、子どもの思想、良心および宗
教の自由への権利を尊重する。

第16条（プライバシー・名誉の保護）

① いかなる子どもも、そのプライバシー、
家族、住居もしくは通信を恣意的にまたは
不法に干渉されず、かつ名誉および信用を
不法に攻撃されない。



登校拒否から二年過ぎた今、

彼は、

そして母親としての私は……

大西千代美

子どもを持つ親にとって、彼らの健やかな成長ほど幸せなことはない。

特に、幼いころの彼らは、母親にとって片時も頭を離れることのない存在である。その時々に関心し、喜び、そのひとつひとつの出来事が骨となり肉となりして、親も子も育ってきたように思う。そして不安ながらも、一区切り、二区切りしながら、どうにか成長してきたと思う。私もそうした親の一人だった。

しかし、それが突然破られる時がくる。それは、親にとっては唐突と思えるのだが、彼らは何回かのシグナルで訴えかけてきていたのであろう。けれど親たち

は気づかず、目の前に突然現れた状況に、あわてて対処する……。が、どれも効を奏せず、逃げ出してしまいたくもなってしまう。

そんな中で、彼らはたぶん親の心理状態を見ずかし、親の逃げを責めるかのように、次々と新手の行動に走る。

怠惰を決め込み、享楽を覚え、そして同じような仲間を見つけ、満たされない部分をお互いにいたわりながら、刹那的な時間を過ごしていく。そこに、大人への深い示唆があるのだらう。けれど、私たちには表面的な部分しか見えず、それを墮落と決めつけてしまう。

私の息子の場合も、中二で登校拒否をした。頭痛と腹痛を訴え、今日こそはと何度も校門まで行くのだけれど、力なく帰って来てしまう。そうした長い苦悩の末に、不安を心の底に持ち越したまま中学を卒業した。卒業後、就職はしたけれど続かない。続かなければ辞めさせられる。その繰り返しの中で、大きな現実の壁と向き合い、自分自身のふがいなさに苦しんで

いるのだろう。

こうした状態の時に、私たち親がどうかかわるのかが、大きな問題になると思う。彼らの感じるあせりの気持ちはどうしたら安らぎのあるものにしてやれるのだろうか。いろいろ考え込む日々である。彼は自分の部屋で煙草をふかしているけれど、頭の中では、いったい何を考えているのだろうか。この一年の間に、外泊、煙草、パチンコ、スロット、ボーリング、カラオケと親の胸をえぐるような行動が続いている。

そうした数々の行動の中で、フツと彼がいな時など、とても静かな時間が戻ってくる。その平穏な中で、*「彼のいない生活は楽だなあ」*と思う。*「彼がいなければ、こんなつらいこともない」*。このまま帰らなければいい”とも思う。

しかし、テレビや新聞から流れてくるいろんな犯罪を聞くと、突然、不安と恐怖の底に突き落とされたような気になる。一方では、彼を否定し、他方ではその存在の大きさに深い痛みが走る。

知らないうちに 僕たちは

ずいぶんと 遠くまで来てしまったようです

君は相変わらず 涙と笑顔という

とても簡単で 自然な しかも

最近では

みんなが忘れかけているような二つの武器で

僕の軌道修正をしてくれます

これから どれだけ時間がかかるかわかりませんが

また いつかそこへ帰ろうと思っています

この歌詞は、最近彼が私に読ませたものです。誰の詩かは知らないのですが、それまで思い悩んでいた私の心に、彼が *「僕の気持ちと同じだ」* と言っているように思えたのです。彼らは身体が大きくなり外見的是大人びて見えるけれど、まだまだ表現する力も乏しく、自分の気持ちを伝えてくれるものを模索しているでしょう。この詩により、私は彼の大事なものを見

つけたように思いました。

この詩のように、自分の意志とは全然違った方向へ流されてしまう時もあると思います。そんな時彼らは、自分の家庭から遠ざかる行動を取るけれど、反対にその家庭へ帰りたいという思いを強く持っているに違いありません。その帰るべき場所に、必ず親がいるんだということ、意識に植え付けるためにも、家庭の中に彼の居場所を確保しておくことは、とても大切なことでしょう。母親の、そして家族の「信じて待つ」態度が、これからの彼にも、そして私たちにとっても、蘇生への大きなきっかけになると信じています。

今は、彼の命や生活をそのまま受け止め、彼の行動から学び取れるものを否定しないで、見守る努力がいる時期にきているように思います。

そして、まだまだ続くであろう彼の道の中で、私という停留所を見つけ、笑いながら近寄ってきたら、話し合おう。彼自身の表現で語る詩を、まるごと受け止められるよう私も成長していきたいのです。

最近の大人と

子どもについて思うこと

野本美智子

私はどういうわけだか、集団というものが幼い頃から苦手だった。毎日の保育園も泣きながら通い、とうとう中途退園してしまった。学校へ行くのも最初はいいやだった。毎日同じ時刻に、同じ場所で、同じ事をするのが苦痛だったということもあるし、先生という人種にも、どうも馴染めなかった。それでも私は不登校の子どもにならずにすんだ。今の小学校なら間違いない、立派な問題児だったろう。

当時の学校には、何の取柄もないと思われるタイプの子どもが、私以外にもたくさんいた。その頃の級友というのは不思議と、どんな子に対しても誰かがいい所を見つけてくれて、黒板の上に「みんな仲良く」な

んで野暮な事を掲げなくとも、けっこう仲良くやって
いた。

他の授業の時はぜんぜん目立たないけど、絵が上手
くて図画コンクールのたびに金賞をもらっていたSち
ゃん、勉強のほうはからっきしでも運動会の時には、
仲間のために何点も稼いでくれたT君、人が好くての
んびりとしていたH君もみんなに好かれていたし、掃
除をいつも真面目にやっていたおとなしいKさんは、
みんなの前で先生に褒められ、恥ずかしそうに笑って
いた。しかもすてきなことに、クラスに必ず一人や二
人正義感の強い子がいて、一対一のケンカ以外認めな
いといったルールが教室の中にあった。ある時、男の
子同士のケンカの最中に一人が鉛筆削りのナイフを取
り出したのを見て、止めに入り、アゴに怪我をした女
の子がいた。私は彼女を密かに尊敬していて、今でも
はつきりと覚えている。子どもながらもお互い認め合
ったり助け合ったりする学校生活だったおかげで、泣
きながら通い始めたような私でも、なんとか並みの小

学生でいることができた。

しかし、五年生の時の中年の女の先生は、もともと
問題児の素質十分だった私を、本格的に学校嫌いの憂
鬱な顔をした子にしてしまった。それまでのクラスの
ような、級友を認め合うという雰囲気がなくなり、何
だかヒヤリとした空気が教室の中に流れ出した。その
先生のやり方には、今考えると言葉の端々にトゲのよ
うなものがあつた。特定の子に、本人が嫌がるような
不快なあだ名をつけ自ら笑うとか、「学級費を持って
来てないのは、○○さんと○○君だけです」とみんな
の前で言い放つなど、子どもへの配慮を欠いた無神経
な人だった。それ以後の私は、普通の劣等生のように
「先生とは、なんとなく馴染めない人」なんて思っ
ている程度では済まなくなった。

* * *

なのに子持ちの宿命で、PTAの役員になってしま
い、なるべくお近づきにならなくなかった学校に週に
何度となく足を運ぶ羽目になってしまった。今ごろの

子どもたちは、昔の子と違って先生と友達づき合いをしているとよく耳にしていた。自分の思っていることをきちんとと言える子が増えた話に聞いていて、それは良いことだと喜んでいた。でも、どうも何かが違う。給食の時間になると、誰も口を開かず（黙動というものらしい）、右側だけを一列に並んで準備室に向かっている。それを薄気味悪く感じたのは、私だけではなかったらしい。「しゃべってはいけない」と堅く言われているようだった。そういえば、たまたまその時間に学校で出会ったわが息子にも、ニッと笑うことさえ拒否された。

学校とのお付き合いが深まるにつれ、私の五年生の時の担任のような教師が増えたことを感ぜずにはいられなくなってしまった。

いつの間に日本はこんなに忙しくなってしまったのだろう。ついこの間まで子どもだった親や教師が、いつからどうという理由で子どもを追いつめる役目をしたければならなかったのだろう。いつから自分の子ども

にも自信も責任も持てなくなった親がふえたのだろう。いつから脅し文句で生徒をあやつろうとする教師がふえたのだろう。

家にいても、学校にいても、自分を素直に出すことのできなくなった子どもたちは、ストレスを抱え、救いを求める級友の声が耳に入らなくなってしまったのか。友だちがライバルにしか見えなくなってしまったのか。

そういえば、夏休みに出勤されている先生方の多いのにも驚かされる。時間に追われ、ゆとりのなくなっていた先生の顔がいやでも目に入る。子どもとのふれあい以外のことで忙しそうな先生たちの顔が、子どもたちの目を飛び越えて、宙に浮いているような気がする。

もう変な冗談はやめにして頭を切り換えませんか？ 勝つための部活ではなくて、スポーツを楽しむことを。そして美しいものを美しいと感じるために、子どもたちを導いてほしいのです。もしわが子が学校で傷ついて帰ってきたら、一緒に泣いて、一緒に怒って、笑い

飛ばしてやれる親になりましたよ。困った親もたくさんいます。先生、教室の中に暗い目をした子がいたら、少し気遣って温かい言葉をかけてあげてほしいのです。

誰かが、テレビのコマーシャルで言っていましたよね。

「人間は、感動するために生きているんだって」

私もそうだと思いがちな生きたいのです。

時を共有すること

宇都宮真由美

先日母を亡くした。その時の気持ちを表現するのはまだ無理である。気持ちの整理もできてないし（多忙のせいかもしれないし、したくないのかもしれない）、語らいも不足している。ただ一つ、言えることは、だんだんとさびしくなる、ということである。広くは世

界で、小さくは自分のまわりで起こっているさまざまな出来事を、共に経験できないということ、このさびしさは、けっこうつらいものである。

ひるがえって、娘のことを考えてみる。まだ八歳の娘は、世界の出来事を云々するわけではない。彼女にとっては、自分のまわりで起こっていることがすべてであろう。世界の出来事を共有するには、東京―松山間は近いであろうが、しかし、彼女のまわりに起こっていることを共に経験するということには、遠すぎる。さびしいのは無理もない。

一年の半分を東京と松山に離れて暮らす母と子の生活は、彼女の人生にどのように影響するのであろうか。さびしさの経験も必要である、さびしさを経験して優しい人間になってほしい、と思うときもある。さびしさを味わうような生活には、一刻も早く終止符を打ってやりたいと思うこともある。自信なく揺れ動いている自分を棚に上げて、娘には自信をもって人生を歩んでほしいと願っている。

取材最前線

川之江高校甲子園同行記

小倉いづみ

一年の警察回りを終え、二年目は夏の高校野球県大会に主催者側として、取材や運営を担当するというのがわが新聞社でのだいたい決まったコース。もともと野球好きだから、気合を入れて取り組んだ。この、入社後初の「大仕事」の締めくくりは、愛媛県代表川之江の甲子園同行取材。なんだかふてぶてしくて、人を指さして「若作り」なんてひそひそ話しているし、擦れた感じで嫌だな、というのが選手たちの第一印象だった。

各選手に取材するとき、わたしはできるだけこれまでの故障歴と、どうして川之江に入学したのかを聞くことにしていた。故障に関する質問は、途中で聞くのがばかばかしくなった。野球ひじ、じん帯損傷、腰痛……。これまでに故障のない選手は、記憶する限りいなかった。みんな中学くらいまでにどこかしら痛め、手術や通院をし、完治しないまま痛みをこらえて練習を続けている。甲子園で、青森代表の弘前美と対戦する直前には、ベンチ入りするほとんどの選手が、体のどこかしらに痛み止めの注射を打った。選手たちは「本当に痛いんだ」と言っていたが、心の安定のために安易に打っていた感も否めない。「若いうちから、こんなに無理をしなければ勝ち残れないのか」と胸が痛んだ。

他県の名門校の「外人部隊」ほどとは言わないが、厳密には川之江出身でない選手が何人かいた。野球名門校のお膝下出身の選手もいるので、川之江進学の理由を聞いた。「甲子園にも出場したかったし、大学にも進学したいから、普通科の高校へ進学したのだ」という答えだった。それでは六大学でプレーしたいのかというところ、「もう苦しいのは嫌だから、野球は高校で終わり」という選手がほとんど。「故障をおして続けてきたのに?」「そうだけど、もう燃え尽きちゃった」

練習ばかりで勉強なんかしていないだろう、という予想は裏切られた。通信簿の評定平均はほとんどが四点台。五点満点も一人いた。三年生は全員が進学希望。甲子園の宿舎でも、毎日勉強時間があった。文武両道と一口に言っても、よく体が続くなと感心した。さらに、甲子園に出場したことで推薦が取りやすくなり、就職志望を急ぎ進学に変えたちゃっかりもいた。

あれからほぼひと月。「野球は高校まで」なんて割り切っていたくせに、ほんとうに体力的にドクターストップがかかっている選手のはかは、やっぱり未練があって、大学でも続けようと練習を再開したらしい。最初の「擦れる」という印象は撤回。しっかりしてるけど、やっぱり球児ってどこか純粹、とこのころ思い直している。

(朝日新聞松山支局記者)

す。カタカナの欧米語を使うと、何となくカッコいいような、開明的であるような、ガクがありげな、体面を保てそうな、むきつけではなくなるような、お上品になるような、そんな気分になるようです。

問題は、主体的にそんな気分になるのみならず、知らないうちにそんな気分させられていることにあります。しつこくもう一例、「セクシュアル・ハラスメント」という言葉を引いてみましょう。私たちは、この言葉を長いからといってカタカナのまま「セクハラ」と縮め、無意味にし、骨抜きにしました。「性的いやがらせ」という苦心の訳語は、なぜ定着しなかったのでしょうか？

さきに述べた鹿鳴館以来の言葉の植民地現象に、女性解放をめざす女たちも、かなりの程度からめとられているというのが理由の一つです。

もう一つは、マスコミ、マスメディアという男根主義の権化が、言葉の植民地主義を国内でおこなっているからです。彼らは、被抑圧の民である女を支配統治する、その政策として言葉を操作するのです。「セクハラ」は彼らの造語であり、彼らが流通させた軽くて扱いやすい商品です。飢えたおじさんの手で尻に触られる屈辱感、言葉で強姦される無念、言いなりにならないと仕事からははずぞ、と脅迫を受けるくやしき—これらの思いを「セクハラ」は伝えているのでしょうか？ 反対に、ごまかし、薄め、笑いのめしていると私は思います。女を愛していると言いながら、芯の芯では女を恐れたり馬鹿にしたりしている彼らは、こういう手口で女の内に湧き上がる怒りを封殺するのです。

対抗するのには、よほど念入りに言葉と取り組まねばなりません。白人文化の所産である欧米語が、近代主義のすぐれた理念を伝え、また女性解放のための必須用語を送り出してきたのは事実です。私たちの国の文化の大半が、これら欧米語の輸入と翻訳の上に成り立っていることも、残念ながら事実です。事実を認めず、日本独自の創造的知性だの文化だのと言い出すと、京都学派のような気持ち悪い国粹主義者たちを、もっとのさばらせる結果になります。はじめの例に戻れば、「強姦」という言葉も、元はと言えば暴力的で女性差別的な漢語を借入したのでした。

私たちは、白人文化におもねることを自ら戒め、そうかといって国粹主義の甘いワナに陥ることなく、歴史の植民地と性の植民地とのつながりを見きわめ、言葉を吟味し、言葉を創ってゆかねばなりません。「言葉は思想」に得心した女たちは、言葉を使う時の、綱渡りをしている、薄氷を踏んでいる、という恐ろしい孤独をかみしめて初めて、支え合い、共遊共働できるのだと思います。一方で、そんな、怖くって、ものも言えなくなるなんて、びびったりひがんだりするような私たちではありません。危ない時は率直に言い合うことも、私たちは学んでゆけるのですから。

レイプと強姦

望月佳重子

「言葉は思想である」というあたりまえのことを確認するのは、なかなか難しいようです。一つのことを述べるのに、適切な日本語（もしくは漢語）があるのに、わざわざ外国語（ほとんど欧米語）を使うという、日本国の私たちの特異な現象について考えてみました。

女を性的に攻撃する行為を述べる言葉として、「レイプ」と言った時と「強姦」と言った時と、どちらが衝撃力が強いのか、じっくり比べてみましょう。

「レイプ」のほうが、英語であるぶんだけ本来の言葉の意味が呼び覚ますはずの恐怖、怒り、無念の激情が軟化され、そぎとられて聞こえませんか？

もう一例、「ルサンチマン」というフランス語。これは、被抑圧者の思いを被抑圧者の側に立って、フランスの思想家たちが使い始めた背景と歴史がある言葉です。それゆえ私たちの国のインテリおばさんやおじさんが（おじさんにインテリがいるとすれば）好んで使うのでありましょう。しかし、これにあたる「怨念」とか「恨」とか「うらみつらみ」とかいった迫力ある東洋語が存在するのに、こちらを使わないのはもったいない気がします。ルサンチマンで、ロマンチックの親類なんかじゃないし、セールスマンの友だちでもないんだよと、聞きに来る学生たちをからかっています。

この学生たちによる、こっけいな外国語使用例があります。私は大学で英語を教える商売をしています、頭痛の種は、通常のクラス以外に設けられた再履修クラスです。これは何のことはない、単位を落とした学生がもう一度やり直す、カッコ悪いクラスのことです。この出戻りクラスの正式名を「英語Ⅴ」と言い、「Ⅴ」は“五”を表すローマ数字です。「講読Ⅰ」とか「演習Ⅲ」とかと共に、履修科目一覧表の隅に、番外ふう、みそっかすふうに載っています。おかしいのはこれからです。

私のいという学生どもは、この「英語Ⅴ」を「えいご・ご」といわず「えーご・ヴイ」と呼ぶのです。はたまた「リターン」などという、痛ましくも怪しげな別名も考案しました。「せんせ、こんどせんせの『えーご・ヴイ』とらせてもらいますから、よろしく」とか、「おれ『リターン』とらんならんくなった」というふうに使います。「ヴイってヴィクトリーのヴィなの？」と、私が皮肉っても通じません。

なぜこのような現象が起こるのかというと、この国が言葉の植民地だからで

あごらメイト

なりふりかまわず
〈あごら松山〉を呼びかけた

奥川 睦さん



ひと目見て、
『似てるなァ』と思う人がいるものだ。

奥川さんに最初に会ったのは一九八五年夏、ナイロビ。日本人は誰も参加しない変わった内容の分科会（たしかアフリカ音楽か何かの）会場の出口だった。

誰もいないと思った日本人がいた。奥川さんだった。その時は自分に似ているとは思わなかったけれど、二言三言話すうちに、心にひびくものがあった。『あごら』への寄稿をお願いした。

日本に帰って〈十代の会〉の機関誌に奥川さんの原稿を発見した。この宮沢賢治の同好会に、奥川さんの名を見つけたのは、うれしかった。

奥川さんが正式な〈あごら〉のメンバーになったのは、

八五年の秋ぐらいかと思うけれど、乾いた紙に火がついたようにたちまち燃える、その燃え方を、『似てるなァ』と思った。

ひっちゃかめっちゃか、順不同、思った時には百メートルは走っている、話を聞くとこのめりこみ、分不相応の荷物を背負い込んで、疲れたとも言えずわらっている……。なんだかよく似た人……。

そのせいか、息せき切ったような句読点のない話し方を、お互い何となく納得してしまう。アナログ人間同士、アブナイ、アブナイと思いつながら……。。

でも、そのアブナサで、彼女は〈あごら松山〉を立ち上げさせた。そして立ち上げさせてしまった責任でウンウン言っている。とうとう、からだまでこわした。もう何も頼むまいと心に誓いながら、ついまた奥川さんんと甘えてしまう。地元にも、多分、私と同じように、奥川さんのある部分を、勝手に『似てる、似てる』と思い込み、勝手に親近感を抱いている人が多いのじゃないかなあ。

〈あごら松山〉にシッカリしたデジタル人間がついて、奥川さんのつかい棒や用心棒がふえる日を祈っている。

（斎藤千代）

◆その後お変わりございませんか。先日は『あこら』一五八号をどうもありがとうございました。はじめからおわりまで、どのページにもなにか言いたい大切なものがあふれていて、読みおわって元気ができました。この号はひかり輝いているように思いました。一枚ページをくると、そこになんとなつかしい奥川さんと市場さん(!?)のお写真を拝見、とてもお二人らしく自然体で撮れていて、まるでお会いできたようなつかしさを覚えたものでした。

松山のへあこらのメンバーの質の高さというのか、よさというのか、伝わってきます。きれいごとでなく、ほんとうに何かがおかしいと感じ、誠実になにかを求めている人の、年齢に関係のない、精神のしなやかな若さを感じます。それにメンバーの人たちから、奥川さんがいかにたのしいリーダーとしてたよりにされているかも伝わってきます。がんばってください。

十六ページの匿名希望の方たちの意見も貴重ですね。こういう人たちを大切にすることで、へあこらの体質がきまってゆくのでしょうか。その点、よきにつけ悪しきにつ

け、夫と子どもとの生活を経験して、その中から立ち上がった人の重み、説得力というものは、やはりまたあると思います。数学的にゆかない(生活というどろどろした)世界に生きていることのしんどさを切り捨てるわけにはゆきませんもの(ときどきほんとうに切り捨てたくなることはあっても)ネ。

お手紙も嬉しかったです。私の場合も、決してそんな理想的なものではありません。もし、そんなに理想的な条件に恵まれたくらしをしていたら、とてもあのような本(あこら読書室参照)を書いてみたいという気持ちにもならなかったでしょう。たいへん抽象的な言い方しかできませんが、それはそれはいろいろと問題をいっばいかかえています。(有馬道子)

◆お忙しい中、お便りありがとうございました。

へあこらからは脱落してしまいました。知らないことばかりで、たいへん勉強になったのですが、読むのが追いつ

つかなく、ますます社会から遠ざかって行くことになるのかなあと思いつつ……。

あこら『小倉千加子さんと私たち』は何度読んでもおもしろかったです。

『風を野に追うなかれ』の中に理解できない所も出てきて、読書会などで読み深めればいいのにも思っても、小学校の読書サークルにはまだ持ち込めないでいます。

話とはびますが、馬鹿・めくらという言葉は使わないほうがよいと思いましたが、言葉自体には何ら問題はなく、どんな意図でそれを使うかということだ、と少し視野を広くしました。まだまだ、世間体とか、ねばらない、とかに縛られて生きています。（中岡公子）

◆ 馬鹿談議

中岡さんとは百周年を次の年にひかえて、その下準備に忙しい時期の調査広報部（PTA新聞造り）で知り合った。みんな考えて、案を出し、気持ち良く協力しあって、下から盛り上がるPTA活動の土台造り、雰囲気造りに精をだしていた。よそ目には質素でいい、心のこもった手作り

のさわやかな百周年行事がしたいとのささやかな願いにこたわっていた時の出会いだ。彼女は副部長、私は担当の副会長だった。

PTA役員の自己紹介に私が書いた馬鹿という言葉に、鋭い疑問を投げかけたのが彼女だった。「この言葉は差別用語ではないのですか」と。そのとおり。いろんな問題をやらんでいる。でも文責は広報部ではなく私にあり、他人に向かって使ったのではなく自分自身に向かって使ったのだから「それはそのままにして」と半ば強引に私の意志を通させてもらった。

どんな言葉も、誰がどういう場面でどう使ったかが問題であり、上品な言葉も冷酷無比な響きを持ち、乱暴な言葉も暖かさがこもり親しみを感ずる時がある、というのが、その時の私の側の主張だった。

小倉さんの講演会を受けた直後の討論会で、障害者の方からしよっぱな、「馬鹿という差別語は使わない」とキツイお叱りを受けた。抗議の激しさや言葉が聞き取りにくかったりして、シラケと殺気だった緊張感が会場を包み、司会をしながら身の細る思いをした。講演料も度外視して松山まで来て下さった講師に対しても申し訳ないし、参加者

の方々にうんざりという顔をさせてしまつのも失礼だ。正直とまどった。

数日後、年三回発行のPTA新聞第三号がやっと手を離れ、担当者で区切りの昼食会をもった。その席で再度「バカという言葉はやはりダメ。条件のいかんにかかわらず」という明快な彼女の主張を聞いた。「あの障害者の方のこれまでの生きる哀しみが馬鹿という言葉への抵抗感に凝縮している」と。

私の思いとは全くの異次元で、そんなのラディカルよネーのナーナー主義でつるんでしまうこの地の土壌が、私は好きになれない。持つべき主張がなくて持たないなら、持つと同じく個人の自由である。が、「異議なし派」が大勢をしめると、「異議あり派」の意見を聞くことせず、とたんに少数派のいじめに走る。いわく「わわしい」「女らしくない」等々、何とでも悪く言いたい衝動のまま非難の口実は見つかる。その時も「そんなお固いこと言わんでも……」が大勢を占める雰囲気の中で「私はこう思う」とはっきり主張する彼女の勇気を内心驚きながら貴重だと思った。おとなしいだけの人じゃない、と。

PTAの表面的な付き合いは、〇〇君や〇〇ちゃんのお

母さんの顔でしかない。一步踏み込んで個人対個人の付き合いにまで発展するのは、何かの拍子でフト互いの気心が知れ、互いのハダ合いが確認できた時だけだ。役員を引き受ける羽目になるたびに、また馬鹿な忙しさを抱え込んでしまったとホゾをかむ反面、それでも必ず一人は生涯の友ができるという喜びも与えられる。「たかがPTAされどPTA」と思う所以である。

中岡さんは、いわば行きずりにちょっと袖すりあった縁にすぎない。それでもへあごろの会員になってくれた。それは同士が一人増えたような頼もしい喜びだった。この人ならと思う人たちも、皆忙しすぎたり、へあごろのレベルにはついてゆけないとかで、私との個人レベルの付き合いから、自分の意志で動く一步を踏み出してはくれなかった。もっとも、他人のことは言えた義理じゃなく、私自身ナイロビで偶然声を掛けていただいた斎藤さんに、その何倍ものもどかしさを抱かせたに違いない人間の一人にすぎず、十年近く悩んだり迷ったり逡巡した末でないと、その一步が踏み出せなかった。もっとも一直線に理詰めで押せない私のグズグズでしか、この地に曲がりなりにへあごろは開店できないだろうとも思っている（シヨッテ

ルけど」。

とまれ、その時の私の反論。

理詰めを錦の御旗にして反権力をつらぬくか、自分の特技・技能を最大限にPRして売り込み、権力にこび体制にすり寄るかのどちらかに傾けば生きやすいと思うヨ。前者は勇ましいし、引き裂かれた自己にさいなまれ続けなくて良い。後者は名譽なりお金なりで満足する安定感が持てるだろう。でも、私はそのどちらも嫌で、絶対に生涯アマチュア、一生ただのおばさんと思っている。そのくせ、納得がいけないことはテコでも動かない、譲れない。おばさんなら馬鹿になれて（本当は一番利口なのだろうが）ナーナードで生きるべきだろう。それができないのなら旗色鮮明嘘のつけない私は、覚悟を決め、理屈で正しいと思うことを押し切り続けるしかない。でもそれにも徹しられない。人は理屈では動かないし、理屈で相手を納得させても決して心を開いてもらえない、友だちにはなれないと思うから。それでいて、おとなしくもしていられず荒野へ走り出し、結果的にドンキホーテばかりやっている。そんな私には、「馬鹿やるしか能のない人間だから」「一生馬鹿つらぬきます。今の世の中、小利口な人ばかりで面白くないから」

とおどけて使うこの言葉にこめる愛惜の情は深く、愛着た
ちがたいのです。といった類の弁明をこりずやってしまった
のだと思う。

体が元気で病氣知らず、自分で思い込んでいるほど、勉強
しなかった成績も、悪くはなく、世間一般の水準からい
えば結構強者の論理を振り回し、人を傷つけてばかりいる
のかもしれないと、最近反省しきりなので、気楽に不用意
に使うこの言葉でたくさんの方の心を傷つけていたのだろ
うということに、今まで以上に考え直さないといけないナ
とは思っているのです、と付け加えたのはいうまでもない。
そんなわけで、この手紙の一行はとも私には味わい深
い。転居され、その後お会いする時もないままの中岡さん
の心の軌跡、成長をあとづける体験に想像力をたくましく
している。

（奥川 睦）



ある新設小学校服装検討部の

一〇〇日間のたたかいを終えて

奥川 睦



「お兄ちゃんのを妹に、お姉ちゃんのを弟に」そんな親の当たり前の願いが届かない教育現場なんておかしい。使い捨てを前提とした商品価格や流通システムをニガニガしく思いながらも、抗しがたくみ出してしまう毎日のゴミの山。まだまだ使える物をポイ捨てしてしまうことに、こんなに心を痛めながら、まだまだ新しい服やスカートやズボンがゆずれない。他人に着てもらうには少し古くても、きょうだいの間でまでおゆずりが効かないのは寂しい。それがまず根底にあった。

はやばやと「女の子色・男の子色」が、刷りこまれてもいる。幼稚園に入る前からすでに、もうしっかりそういう根っこは植え込まれているところから見ると、たんに教育の場での対応の問題だけを問い詰められないのはわかりきっている。でも、そういう家庭人をうみ、そういう社会の雰囲気を作り出してゆくのも、もとをたどれば、結局は教育にたどり着くはずだ。せめて教育の場くらいは、力の論理で振り回されたり、権力やお金が幅をきかす現実世界の汚れべったりではなく、真・善・美を求める理想の場でありたい。せめて理想の形や姿を追う努力だけは続けられるエネルギーをなくさない場であってほしい。これからの地球を背負って立つ次なる世代の柔らかな感性を伸びやかに育んでくれる場造りに、親としても協力したい。



そういう思いや願いを、教育の根幹にかかわる価値観やフェミニズムの視点で語っても、小学校の先生たちやPTAのお母さんたちには、届きにくいかもしれない。切実な日常問題（たとえば洗濯・針仕事）や家計を預かる主婦の財布事情。そういう次元で徹底して修煉させていくしか手はないだろう。学校の持っている古くさい思い込み、柔軟性の乏しい対応の硬さ、懐の浅い決めつけ、尺度、ステレオタイプ。それらを浮き彫りにし、子どもたちの柔らかい感性を壊さないでほしいと思う切実さを受け止めてもらいたい。標準服論議の中で、「ねばならない」と思い込んでいるものを問い直し、気持ちをはぐしてもらいたい。母親の思いの届く感性を、学校に持ってもらいたい。ただ、その一念だった。

私自身はもともと着るものには拘泥せず、何を着ようという気にならない。というよりむしろ汚れても気にしないでいいボロを着ている気楽さの方が好きだ。「制服が決まっている方が面倒でなくていい。何を着ようかと毎朝考えるのはやっかいなもの」と言う人は多い。何によらず悩まなくていいほうが楽だ。私も、そういうタイプの一人に過ぎない。何が何でも制服は嫌だという人も、無条件に制服大好きという人もいる。私が問題にしたいのは、意見の違いが平行線のまま議論すること、互いの違いを確認しあう機会すらないという悲しい現実だ。違いを確認しあう土台の上になら、互いの尊重は生まれない。まして違いを違いのまま認めあった上で、文化や宗教やさまざまなズレを乗り越えてゆかなければ成立しない異文化交流は、ますます難しい。経済大国日本を支える次なる世代は、否応なく国際舞台に引きずり出される機会は増えるだろう。尻込みしていることは、ますますできなくなるだろう。口でどれほど個性の尊重や国際人を説いても、この画一的な発想の貧しさでは、個性豊かな国際人が育つわけがない。服装はやはり個性の反映。どうしても

いい私も、どうでもいいという事を他人に強制はできない。それは明々白々だ。もちろん、着ろと命じる権利も誰ひとり持っていない。着たい着たくない論議は、しっかりやるべきだ。着るべき着るべきでない議論はとなると、それぞれの価値観がからむ分だけ、素朴に好き嫌いを語ってはいられない。各方面に気を配りながら、徹底した議論が必要だろう。

服装検討部には、当然のことながらさまざまな意見の人がいた。自由服礼讃の人もいれば、制服がいい人、制服はあって当然と思っている人、学校の指定することに疑義をはさむなんてとんでもないと思っている人もいた。標準服と制服の違いすらわかっていない人ばかりだった。それが話し合いの回を重ねるにつれ、簡単に片づけられない大切な事柄にひとつひとつ気付いてきた。アンケートをとり、意外に多い標準服反対の数に私は驚いたのだが、学校側（新設校準備委員会には、関係各校の校長・教頭が加わっている）と学校の意図通り動くのが良き会長と信じている小さな準備委員長は、賛成の数が上回っているのだから、即採用後は材質・型・価格・業者選定等の具体的作業に進むべしと思ひ込んでいた。議論は即刻中止すべし、と。反対票の多さに驚きビビったのは、彼らのほうだったかもしれない。アンケートの結果が、簡単に無視できる数ではないこと。少数意見とは言えない数になってしまっているが、もともと少数意見は大切で、数の多寡で押し切るのも恐いこと。何より、具体的な要望を書いて下さいというところに出たたくさんの方々の意見は、PTA会員全体の関心の高さを示しており、しかもその大多数が着せたくない人たちの切実さから発せられたもの。それらの理由から、さらに検討し、資料を作り、両校で不揃いだった質問を統一して再アンケートを出そうか、ということまで服装検討部の意見がまとまった。

この辺から、俄然干渉がひどくなった。再アンケートまでとる必要などない。もともと最初のアンケートも反対の意見が出てくるべく意図されたものだ。それでも賛成が多いのだから、再アンケートの必要など全くない、と彼らは言う。服装検討部は自由服採用に傾いている偏向集団のようにデマをとばし、紛糾して困った困った、と吹聴して回ったのだろう。その種の話には耳を貸さない私の所にまで、「奥川さんがいて、どうしてもめるのか不思議だったのよ。なにーそれ」

それでも誠心誠意で通じない誠意はない、と私は信じていたし、今も信じている。「私はあなたの意見には反対だ。しかし君の意見を封殺する者とは死を賭して戦う」の心境でしかない。自分の意見で部を引っ張るとか、検討部の意見で押しまくったりは、できるはずもないし、やる気も全くない。ただ任された責任上、いろんな角度から検討し、勉強して学んだことを提示しつつ、より正確な全体の意志をくむ努力と、希望や願いに添える方向を探る必要がある。再アンケートに踏みきった。

第一回目のアンケートに出た意見を整理し、標準服を採用した場合の長所短所、同じく採用しなかった時に考えられるメリット・デメリットを図表化して、結果報告と再度手数をかけてまでアンケートをお願いする気持ちを説明。どちらになってもそれぞれ長短はあるのだから、各家庭でも子どもさんをも巻き込み考えた結果で、イエス・ノーを答えて下さいとお願ひした。市内に三校ある自由服の学校にも行き、華美になるとか、だらしな性格好になるとかの強い思い込みも、杞憂にすぎないとの印象も伝えた。自由服で通している学校が市内にあるという事実を伝えたくない彼らの反発は想像に難くない。案の定、こんな偏ったアンケートなど出せない、それを出すのだったら私は普通の顔をして世間様とお付き合いはできないとまで言われ

た。そこまで言ってくれるのだったら、私が個人的に面目まるつぶれになる覚悟で済むことだと、私の覚悟は決まった。

標準服は揃えて一括購入なのにしては安くはないという文句もたくさん出ていて、検討部の一員でもあるM校校長がつぶやいた「いや意見が出ているな」という言葉や、H校校長がもらした「フリルがヒラヒラとついた服や、赤やピンクや黄色の服で登校してくるんですよ」と、さもないへんそうに「勉強の場にふさわしい服装ではないでしょう」と同意を求められて、一瞬絶句したりと、言い始めると校挙に暇のない古き、固さにウンザリしていたのである。



対立したり対決する関係からは不毛しか生まれない。そのことは肝に銘じているつもりだ。議論できない平行線、互いの意見に心を開いて耳を傾けられない現状にメスが入れられたら……というのが、ソモソモの出発点。服装がドウユウのか、業者との付き合いが、など私の大切さの中には入っていない。なのにあの人たちを、議論の輪の中で学んでもらい、共に成長して良かったネ、楽しかったネというところまで頑張れなかった。忙しかったし、体調を崩したし。無理をしてそこで頑張っても、所詮揺り戻しの勢いをつけてしまうだけという悲観的な気持ちもあった。検討部以外のメンバーが加わるのは筋違いの部会に、校長・教頭・会長もよく足を運んでくれた。抗議する気にはなれなかった。むしろ問題を掘り起こす勉強の場に加わってくれるのなら、喜び以外の何ものでもない。でも、彼らの参加意図はそれではなかった。束になっても部長としての私を崩せず、部員の結束の固さも確認してしまった彼らは、それでも自分たちの薄っぺらな（としか私には思えない）価値観に固執した。従来通りの標準服を採用しないと学校の面目が立たない。準備委

員長としての責任が果たせない。そう信じ込んでいる根元を揺るがせないまま、反省することしきりだ。



こういう背景の中で、運命の二月五日が近づいた。この日行事が重なってしまったのだ。当時、社会党の委員長だった土井たか子氏が松山に来て、衆議院選挙の前哨戦の山場としての総決起大会が開かれる。ついには党や労組と関係のない一般市民の代表としての私の話が欲しいというのだ。心は揺れた。正念場を放棄して、大切な最後のつめを誤りたくない。さりとて選挙も大切だ。前年夏の三点セット、逆風の吹き荒れた勢いは、完全に止まりかけていた。女の時代、女の時代とわわしく喧伝されている割には、少しもほんとうの女の時代は来ていない。それなのに、それすらも引き潮のごとく空中霧散しかかっている。こちらも手を抜けなかった。悩んだ末、私が出した結論は、前日ほとんど一日をつぶし開設準備委員会の事務局を努める。O先生（現M小学校教頭）にも御足労願ひ、私が所用で不在、副部長さんの説明が足りない時はその穴が埋められるよう、部会での経過を細かく理解してもらった。譲れる最大限の所まで学校のメンツや立場をたて、色も紺と決めたこと。ただし洗濯のしにくさ、肩が上がりにくく窮屈などの意見が多かったことを反映して、思いきってセーターの採用を提案するに至った経過などを説明した。気持ちよく聞いていただいたことで、バックアップと穴埋めも大丈夫と感謝して安心して、私は次の晩、市民会館大ホールを埋め尽くした熱気の中に身を置いていた。その間の事情は目下さんのレポートや『朝日新聞』の記事のなかにも一部うかがえると思う。終わって直行すれば時間的にまだ参加可能だったことを後で知って、しまった、行けばよかったの思いは深かった。歯きしりする思いも確かにあった。教育の大計を案じず、何がメンツだと腹も立った。なによりキチンと説明し、意図を理解してもらえぬ努力とサバキができたのなら、結果はどうなろうとかな

わない。竜頭蛇尾の思いは深かった。それだけは悔いが残る。言いたてるとキリのない、さまざまな事情が絡んでもある。説明するのも、もう疲れた。でも負け惜しみじゃなく、これはこれで良かったかもしれないと、個人として反省してみることもひとしきり区切をつけ、今は思っている。この中に凝縮されているものをどう生かせるか。どう活用できるのか。どうどう巡りの馬鹿馬鹿しさの多いPTAの中でも、やれることはやれる。やるべきことはやるべきだ。個人攻撃のような視点では一言も言いたくないと念じつつ、それでもそんなふうにしかならない人たちも多く、自分の筆の足らなさをいまいまいしく思いながらも、ここまで書き進んできた。ほんとうに疲れた。この疲れは何だろう。これほどヘトヘトになりながら、それでもヘタリ込めないのは自分の中の何だろう。つたない行間を、想像力と一人ひとりの思いと重ね、辛口のご批判をいただきたい。



「今度こそ、奥川さんだから自由服になれるかと期待していたのに」と言ったお母さんがいた。「ひと頼みはいけません。標準服は制服ではないのです。着る着ないはあなたが考え子どもさんと話し合い、考え合うべき問題なのです。私が一人奮戦して解く課題ではないのです。皆が一人ひとり自分をしっかり育ててください。決めてもらわないと何一つできないという日本人の弱さを鍛えてください。それこそが大切なのです。服装は二の次です」それが私の答えだった。

英語支配の構造

津田幸男 著

第三書館

二二七ページ 一、二〇〇円

人種差別・性差別と並んで「言語差別」にもっと意識を向けるべきだとの視点で書かれた本書は、私の積年の思いを代弁してくれている。「英語支配の勢力の下に、抑圧され、奪われている」「言語権」や「コミュニケーション権」は基本的人権の重要な部分だ」といった指摘は鋭い。

「英会話中毒」「国際人願望」を「英会話アレルギー」「ガイジン・コンプレックス」の裏返しでしかないと断じる英会話症候群を、外国人（特に西洋人）との接触により生じた、日本人の「自我の葛藤」といった心理学的側面から分析し、英語支配の現状では英語

圏以外の国の人々は、実質的には言語を奪われた「沈黙する客体」、支配者（英語を話す人・話せる人）に「媚を売る奴隷的な存在」でしかありえない「歪んだコミュニケーション」となり、人間らしい対話のうまれる可能性はない、と説く。

なかなかキビしい本質をズバズバと突くこのような論旨が、やっと本になる時代になったんだナーとの感慨もひとしおだ。

(OKU)

日本の歴史をよみなおす

網野善彦 著

ちくまブリマーブックス

二二七ページ 一、一〇〇円

帯に「学校で学べない いちばんホットな日本史」とある。著者はへあこら15周年記念の集い（特集34号）で、

「無縁の女」と題し講演された中世史が専門の歴史学者。温かい人柄が文章からもしのばれる。

十四世紀南北朝の動乱という大変動を境にして、社会は全く異質なものを持ち始める。その時代をもう一度「新しい転換期にある現在、考え直してみることとは、これからの人間の進む道を考えるうえでも、また日本の文化・社会の問題を考えるうえでも、なにか意味はあるのではないかと思うのです」とのまえがきの言葉どおり。特に「差別の芽の発生」を指摘して鋭い。

この時期「ケガレに対する観念が変化し、ケガレを清める仕事に携わる人びとに対する忌避・差別感・蔑視の方向が表に現れてくるようになった」とし、その背景を当時の社会的なものの見方の変化、文字や貨幣などの問題、人間と自然のかかわり方の大きな変化などが挙げられており、傾聴に値する。

(む)

じょうぶな頭と

かしこい体になるために

五味太郎 著

ブロンズ新社

一二〇ページ 二、〇〇〇円

タイトルからしておもしろそうだし

よう。ズバリおもしろいです。絵本作

家五味さんが子どもたちからの具体的

「疑問・悩み・希望に答える五十章」

から成っています。かしこい頭はテ

スト用じょうぶな頭は自分用。じょ

うぶな体ははたらかされる体かしこ

い体ははたらく体」という文字が、両背

表紙のかわいいイラストに添えられて

つまったコミュニケーション・パイプ
を通して下さい。(む)

消えたオーケストラ

宇神幸男 著

講談社

三〇二ページ 一、四〇〇円

はつきり言って、これは我田引水だ。

私はこの人のファンだし、田舎に住む

人間のひがみと文化的な気遅れからも

エールをおくりたくなる。

著者は四国の片隅宇和島で、一人黙

然と知性を磨いた苦勞人。今も南予文

化会館でイベント屋さんをやりながら、

作品をものしておられる。数年前、縁

「音楽ミステリーをひっさげて新人

が登場した。殺人ぬきの、幻の天才ピ

アニストをめぐる謎とサスペンスの長

編だが、最後の一行にいたるまで読者

の心をしっかりと握んで離そうとしな

い宇神氏の筆力と構成力は抜群である。

読了して思わず溜息がでる作品はそう

ざらにあるものではない。作者が第二

作を書くかどうかは知らないけれど、

この一編だけでも、音楽ミステリーの

作者として氏の名は長く記憶されるこ

とだろう」と鮎川哲也氏をして言わし

めたデビュー作『神宿る手』に続く第

二作である。前作同様、女性をおとし

めない、この人の志の高さが好ましい。

心のかたち・文化のかたち

有馬道子 著

勁草書房

二二四ページ 二、二六六円

著者は英語学・記号論を専攻する人

だが、学術論文ともエッセーとも読め

107

る、ふしぎな雰囲気の本だ。触発されて、時事的な問題を思い、宗教を考え、日米摩擦や日本の教育を連想する。と、朝日新聞の読書欄（九十年十月二十四日付）では紹介されている。

私とは同年代の著者は、中国女性史の旅ですと同室で語り合って以来の友人。北京から敦煌行きの飛行機が飛ばず、二日も足止めをくってやっと飛んだ中間地点蘭州では、水にあたってひどい下痢。二人して丸一日おなかをほしたりもした。大学教授という肩書のいかめしさをミジンも感じさせないゆったりすべてを包み込む彼女の肯定的な現状のとらえ方が私には驚異かつ魅力だ。

そういう生の人柄が滲むのは「真の宗教性（人間の自立と密接な関係にある）をゆるぎなきコードとしてコミュニケーションを行うことができる」とき、さまざまな出来事はそのままでありながら、人生はその全体的な構図を変え、

したがって出来事はその位置づけと重みを変えるために、苦しみは苦しみのままでありながら、相対的にいくらか軽く安らかなものとなり、人生はかぎりなく奥ゆきとゆとりを増して、生きやすくなるようだ」などの箇所だ。説かれるまでもなく、ゆとりは暇が

ふんだんにあることではない。しかしこのような文脈でゆとりは、心の内的自由度だ」と言われると、妙に素直な気持ちになり、うなずける。あえていた私の心にくと、生まれけり死ぬるまでは、生きる也、の一節が浮かんだ。（む）

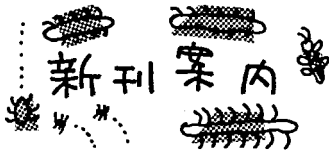
家庭に備えたい

東上京の虫図鑑

—— 刺す虫 かむ虫 いやな虫

東京都衛生局

近代的な都市環境に適応して繁殖しつづける不快害虫・のみ、しらみ、ダニ……や野外で出会う注意しないといけないハチ、アブ、へび、つがむし……。虫の図鑑はたくさんあるが、この本は、東京都衛生局が年々増加している不快害虫駆除の相談に答え、正しい知識の普及のため編集した異色の図鑑。ふんだんにカラー写真を使って、お馴染みのおじやま虫や動物の生態・発生時期・被害・防除法をわかりやすく解説している。これからの季節、ぜひ家庭に備えておきたい一冊である。



お問い合わせは東京都衛生局生活環境部環境指導課
新宿区新宿2-18-11 ☎03-1532014392

「PKO特別委緊急報告」

堂本暁子

PKO法案及び国際緊急援助隊派遣法改正案の

継続審議決まる

今日十一時四十分から参議院の国際平和協力等に関する特別委員会が開かれた。

委員会を前に廃案を主張する社会・共産両党と継続審議を主張する自公民が理事会で対立し、私たち委員は二十分間待たされた末、十二時になってやっと委員長をはじめ理事が席に着き会議が開かれた。理事会では両方の主張が対立し、決着がつかなかったため採決に入ったところ、自公・民、参院クラブは二十五名賛成、社会・共産は十四名反対。残念ながら廃案に追い込むことができず継続審議に決まった。

社会・共産は請願について採決すべきだと主張したが、理事会の段階で自・公・民の主張通り保留になった。なぜ

ならば、理事会においては満場一致でない限り決定できない習わしになっている。硬直化した国会の姿である。

(一九九二年十月三日『AKIKOネットワーク』から)

「教育は家庭、学校、地域で」

宇都宮真由美

国会議員になって一年四か月が過ぎた。議員になる前は弁護士をしていた。その活動の中で、女性が仕事を続けることの困難さ、また真実平等でないものを、平等とする法の不合理さを感じていた。折しも、社会党は土井たか子委員長を党首とし、男女共存社会の実現をめざし、また市民、生活者の声を政治にいかすという。大賛成である。護憲の党を名乗ることに、弁護士として共感できる。そのような時、友人の誘いによって、あれよあれよという間に立候補することになり、当時の社会党に対する追い風のおかげで当選できた。

当選後、法務委員会、環境委員会を経て、今年から文教委員会所属となる。一応一人の娘(小学校三年生)をもつ

母親として、教育問題には大いに興味がある。ただ今まで、学校の現場とか、PTA活動などについて特に勉強もしてこなかったで、全くの素人である。不安だらけの中、感覚的に感じている「今の教育は、どこかおかしい」という疑問を、登校拒否の問題を質問する中でぶつけてみた。当然のことながら、問題意識が自分自身の中で未消化であるのだから納得いく結果は得られない。またやはり、学校現場を知らないということは致命的である。しかし、こと教育問題は、一人一人の子どもを育てるということ、ひいては将来の日本をつくるということであるから、そんなに簡単な問題であるはずはない。と同時に、すべての人にとっての問題でもある。学校の現場を知らなくても、子どもを育てる現場はだれでも知っているはずである。思うに、教育という場合、それは学校だけの問題ではない。家庭、地域の問題でもあり、またその責任もあるはずである。地域も家庭も教育の現場そのものである。自立した一人の人間を、社会に送り出すために、私たちが何をしなければならぬのか、それこそ子どもたちの身になって考えなければならぬ。親の都合をかなり子どもに押しつけている私としては、非常にうしろめたいのであるが……。

「議事録を見て」

奥川 睦

議事録なるものを生まれて初めて見た。正確には「第一類第六号文教委員会議事録第四号平成三年二月二十日」というものだ。登校拒否の問題等、宇都宮さんが質問したのに対し大臣（なぜか文部大臣ではなく井上国務大臣）や政府委員が答えている部分である。

公式見解としては、この問題をどう捉え、どう定義し、どう解決しようとして、現在手をつけている部分、これからの努力目標などがあるのか整理して箇条書きにしてみる。

(一) 定義

登校拒否児童生徒Ⅱ学校嫌いが理由で年間五十日以上休んだ児童生徒。

※学校基本調査（文部省から都道府県の教育委員会、都道府県の教育委員会から市町村の教育委員会、さらに学校という形で調査票を送り、記入されたものを集計する全国的なもの。全学校、悉皆調査）では、長期欠席の場合「病氣」「経済的理由」「学校嫌い」「その他」の欄があり、

「学校嫌い」の欄には、心理的な理由などから登校を嫌って長期欠席をした者の数を記入。

(二) 数・パーセンテージ (平成元年度)

小学校 七千七百七十八人。〇・〇七%

中学校 四万八千人。〇・七一%

※かくも現実離れた感じが否めない低い数字の背景

①五十日以上という区切り。五十日をきる長欠児童生徒の数・分布動向が全く掴めていない(授業日数年間二百十日の約四分の一。これを超えると学習指導上問題があるということから設定したライン)。昭和四十年代に始めた調査をそのままというのは対応不足。「その周辺部を把握しておかなければ、ほんとうの意味での登校拒否児童生徒の対応・政策はできないんじゃないか」との質問どおり。五十日未満の者の実態把握は六県を抽出し状況をなるべくサンプリング調査を、且下千葉大学教育学部の先生にお願いしている由。ただ私は「学校基本調査はもう既にずっと確定しておりますので、なかなか難しいわけでございます」という答弁にひっかかりを覚える。なぜなら、調査は実態を把握するためのものであり、時代が動き変化すればその変化そのものが数量化され、浮き上がってこなければならぬ

い。なのに調査方法が定まっていじれないので、補助的調査手段でというのは本末転倒もいいところだ。発想の大もとが動脈硬化を起こしているとは思えない。数字は人を騙すのに好都合。提示されたパーセンテージは真実らしく目に飛び込んでくる。どういう調べ方をしたんだろうと疑ってかかる人よりは、そうなのかと先ず受け入れてしまふ人の方が多い。なにより疑うためには、疑う根拠となる最小限度の情報が与えられる必要がある。仮に与えられていても、情報の洪水の中で見えない。よほど磨かれた感性と透徹した論理からの推理力をもっている。まして騙すことが最終目的のなら、いくらでも巧妙かつ狡猾に嘘をつくことができる。権力や体制の側に身をおくと、いつの間にか人は精神までとっぴり、寄らしむべし、知らしむべからず、病に冒されてしまうものらしい。そこをもう少し鋭く突いてほしかった。

②「文部省は基本的に『登校拒否は病気ではない』という立場を取っており、情緒障害などによる『登校拒否』は病気による長期欠席として扱う」(日本教育新聞・平成元年10/21)

(三) 様態区分

* 学校生活に起因する型

* 遊び・非行型

* 無気力型

* 不安など情緒的混乱の型

* 意図的な拒否の型

* 複合型

* その他

(四) 原因・パーセンテージ

* 学業不振を原因とする場合……一五・九%

* 友達との関係をめぐるトラブル……一五・二%

* 教師とのトラブル……一・八%

* クラブ活動や部活への不適応……一・五%

* 学校のきまり・校則をめぐって……三・一%

* 入学、転編入学・進級の時の不適応……四・四%

(五) 現況

① 学校不適応対策調査研究協力者会議（平成元年七月発足。

平成二年十一月、中間報告）

新しい視点—どの子どもにも起こり得る。そういう観点でこの問題をとらえる必要がある。

※別に新しくもないが、文部省が公に認めた点は評価しよ

う。

② 適応指導教室（平成二年からモデル的に進め、全国で二十か所を指定）—オフィスのビルの一角を借りて、退職した先生方が、学校という所に行けない子どもたちに、教育相談をしながら教科指導もするという施設。学校の先生だけでなく、カウンセラーやその道に詳しい、いろんな人も参加。

③ スクール・ソーシャル・ワーカー（埼玉県所沢市）

④ ひきこもり・不登校児童福祉対策モデル事業（厚生省が平成三年度の実施予定）

不登校原因（① 学校生活への不適応 ② 家庭的要

因 ③ 児童本人の心理的問題）のうち、②、③は児童

福祉の観点から、児童福祉施設等の様態を十分に活用して、

その対応を図る必要があると考え、文部省とも連絡しながら実施する予定。以下その具体案を四つ。

（一）ふれあい心の友訪問援助事業

児童相談所の相談指導の一環として、登校拒否児の家庭に児童の姉さんや兄さんに当たる世代の学生等のボランティア、心の友（メンタルフレンド）を派遣し、児童の心を聞かせ、悩み事の相談・社会性の向上などを援助しようとする。

するもの。

(2) 不登校児童の宿泊等の指導事業

夏休みの期間を利用、児童福祉施設や児童相談所付設の一時保護所に一週間程度宿泊あるいは通所させ、心理療法や生活指導あるいは野外活動などを一緒に行うことで、自主性や社会性の向上を図り、登校意欲の回復を支援するもの。

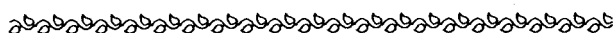
(3) 家族療法事業

情緒障害児施設に、不登校児童とその家族を土、日曜を利用、短期間宿泊させ、家族関係の改善と援助、集団カウンセリングなどを行うもの。

(4) 養護施設での指導事業

家庭環境に問題がある養護に欠ける不登校児童、母子家庭等の子どもたちを、一定期間養護施設に入所させ、基本的な生活訓練、共同生活体験、カウンセリング等の心理治療を行う。

※宿泊させとか入所させとかの言葉にちょっとヒツカかりを覚える。全体が馬鹿でいいないので……。今年度、予定どおりこれらの四事業は進行していると、厚生省は言っている。



戦時下“勤労動員少女”で話し合おう

開戦五十年にあたる十二月八日、戦時下、工場等に動員された“当時の少女”たちで集まろうという話がまとまりました。

言い出しっぱは、旧制茨城県立日立高女の坂口郁・水野清香（『十四歳の戦争』）、東京・桜蔭高女の中村道子（『戦中女学生の記録』）府立第四高女の滝島典子（『花も蕾も』）豊橋・松操高女の佐々木あき（『母さんが中学生だったときに』）の皆さん。カッコ内は、それぞれが出版した記録集の書名です。戦後、長い長い時間を重ねて、ようやく当時の記録をまとめ、改めて“戦争”について考え、あの重い経験が風化しようとしている“今”に危機感を抱いた結果の呼びかけです。

この機会に、これまで出された動員少女の記録集一覧もつくり、当日は記録の展示もしたい、と計画しています。“動員女子学徒”とか、“動員女学生”という呼び方でなく“少女”としたのは、当時は比較的特権階級の子に限定されていた女学生や女子大生だけでなく、小学校や高等小学校を卒業してすぐ動員された女性も含めたいと考えたためです。

幅広く皆さんに、ぜひ声をかけてください。関心のある方は、下記にご連絡ください。

ご連絡先

〒158 東京都世田谷区深沢5-25-1

中村道子

〒156 東京都世田谷区桜上水4-1-1

坂口 郁

なぜ急ぐのPKO

- Y 「政治生命をかけて」と海部サンが叫び続けている。政治改革案が、政府案も社会党案も廃案に……。
- T 政府案は猿芝居だったのでしょうけど、会期が残っているのに廃案。定数は正だけでも、と懸命だった社会党案まで審議もしないで廃案とは。
- Y ふしぎな話ですね。もっとも政治改革案については、ふしぎなことばかり。
- S リクルートを二度と起こさないための、金権利権を根こそぎ絶つ法案だと庶民は思うけど、いつのまにか小選挙区制案にすり変えられてしまった。
- Y そういう意味では政府案は廃案になってよかった。でも、その代わりPKO法案は継続審議でしょう。
- T 次の国会では成立間違いなしって言われてますね。
- Y 日本が平和路線を選ぶか武力路線を選ぶか、国運をかけた大変な選択なのに、なぜ急ぐんでしょう。
- T カムボジア派兵が本命なんです。だから、カムボジアに間に合わないなら、意味が半減するって言われている。
- Y でも、カムボジアの調停なんて、どこも日本に頼んで来たわけじゃないでしょ。
- S それどころか、中国や韓国は、PKOは慎重にしてほしいと正式に申し入れている。
- Y それでも自衛隊を出すんですか。
- T この機会にぜひでも、「認知」を、というネライでしょう。既成事実が出来てしまえば後には戻らないから。消費税と同じこと。
- S 政治改革案は、PKOを通すための目くらましだったとも言われていますね。消費税にみんなの耳目が集まっている隙を縫ってリゾート法を通したように。
- Y あの時ようにはいかなかったでしょう。今度は。そこが危険なの。消費税にしても、リゾート法にしても、まさか通るまいと思っているうちに、アッというまに通っちゃった。
- T 去年の平和協力法案の時のような盛り上がりがないのが、ほんとに心配ですね。
- S 国会の首相答弁で、真実の姿がどんどん暴露したのね。装甲車、機関銃も出す。武器を使うかわないかは、個人の判断にまかせる、とか。
- Y 国際的貢献が即PKOというのがおかしいですね。
- S 武力以外の貢献も山ほどあるのに。海外協力隊とか、文化的貢献とか科学的貢献とか。
- T そういう基本的な議論が全くされないで、PKO

なぜやめたの政治改革

で国際的貢献を、という与論が、いつのまにか形
成されていくのが、ほんとうに怖い。

怖いですねえ。海部さんの支持率にしても、どこ
の調査でもほとんど五割近い。ふしぎだなアと思
ってたら、九月五日付けの『毎日』の調査発表で
は、三六%、前日発表のNHKの四九%と大違い。

『毎日』に質問が殺到したそうですね。九月十七
日付けの『毎日』にその理由が発表されてました
よ。他社の調査は「支持か」「不支持か」の二者
択一なのに、『毎日』は「関心がない」という選
択肢を入れたからだ。この選択肢にいった三六
%を、支持・不支持に比例配分すると、支持率は
四九%、NHKと全く同じになる、と。

えっ！ ほかは、二者択一の選択肢だったのです
か？ 調査の選択肢に、わからない(DK)、答
えない(NA)の選択肢を加えるのは、調査の基
本なのに。

小選挙区制になると、僅差でも第一位を占めた党
が八割か九割の支持になると同じ構造ね。

いろんな形で与論操作が行われている。日本は湾
岸戦争以来、戦争に突入していると言えるんじゃない
ですか。

怖いですねえ。私は湾岸戦争のスライドを見て、

ピンポイントの正確さにビックリ。日本は少々の
武器を持っても、勝てっこないと思いましたよ。

フセインみたいに、なまなかの軍備を持つと、か
えって世界から狙われることになる。

それはホント。自衛隊は全部、救急援助隊にする
といい。

お年寄りの介護とかも自衛隊が助けるといい。男
手がほしい時がたくさんある。

そんなこと、できますか。
できないと思っているとできないでしょうね。自
衛隊はどんなに考えても憲法違反です。冷戦が
終わったと西側諸国が一斉に宣伝している今こ
そ、憲法違反を改めるまたはない機会だと思ひ
ます。アジア二千三百万もの人びとを殺した責任
として、日本は武力の放棄を世界に永久に誓った
のです。それを破ることは、日本が、うそつき。

の国であることを世界に広言するようなものです。
私は今度、戦後の湾岸を歩いて、日本を自衛する
方法があるとしたら、日本が正義を守り抜く国、
人権を守り、人間と地球にやさしい国になる意外
国を守る方法はない、としみじみ思いました。サ

なぜ急ぐのPKO

ッダム・フセインのように、一度悪魔のらく印を押されると、それを征伐することがやすやすと正義になってしまいます。日本は、どこよりもまずアジアに顔を向けるべきです。近くにイスラエルという軍事強国があるイラクと違って、日本はまるはだかになれる絶好の地理的条件を持っています。

湾岸戦争は、戦争の方法が革命的に変わったことを立証しました。もはやなまなかの兵器などを持つても無意味です。フセインさんも兵器を持っていなかったら、遠回りでも大変でも、別の方法で自国の立場を主張したと思います。

それは同感ですね。

持っているものは必ず使いたくなる——これも今度湾岸を歩いて痛感したことです。あらゆる新型兵器が試されていきました。そしてバスラ以南では、産業廃棄物を捨てるように、兵器の在庫処分がされました。核軍縮は朗報のように聞こえますが、核ではないけれど、それに匹敵する有効な兵器が開発された、と、私は読んでいます。

そう思うのは？

たとえばアミリア・シェルターで使われた爆弾

です。すべての死体は、広島・長崎を想起させました。

日本の軍事予算は世界第三位ですけど、武力で国を守ろうとしたら、とても今の自衛隊では守れない。何よりも、日本が決して、他国を侵略しない国になること。すべての武器を捨てることです。

島原で自衛隊が活躍した、だから自衛隊は必要、と言う人もいるけど、あれは装甲車の演習なんですね。

ほんとの救急援助隊なら、別の機器、たとえば観測機器とか、危機情報の伝達機器とかに重点を置くことになると思います。

もっと突っ込んで言えば、救急援助隊なら、今のような人数も予算も要らない。十分の一くらいに縮小して、予算をもっとほかのこと——文化的貢献とか科学的貢献、人的貢献に回すべきだと思いますよ。

赤ん坊まで含めて、国民一人が年間四万円ずつ税金を払ってるんですものね、自衛隊に。

PKOは、たどて言えはがん患者の手術はお手伝いします、と言ってるようなものです。いま必

なぜやめたの政治改革

要なのは、がんやエイズの発生をなくすこと、あるいはごく早期に発見して早期に治療することでしょう。日本は予防医学、予防平和に徹すべきだと私は思います。

T 自衛隊員を全員解雇することはできないから、違う職種を用意することが必要ですよ。お助けマンとか。

Y 林業なども手伝うと日本の森林が守れますね。でも隊員から文句が出ませんか。

S 自衛隊はいま求人難に苦しんでいますね。隊員になってもやめる人も多い。国民に尊敬されていない職種の辛さもあるようです。みんなが、感謝するような職業に変わることは、案外歓迎されるかもしれません。

T 税金で、「いかに人を殺すか」を訓練しているわけですね。「いかに人を助けるか」に変えれば、プラス・マイナス、その差は、はかりしれないほど大きい。

S 世界から攻撃されないためには、まずは何よりも日本の政治や経済を清潔で公正なものにすることだと思います。

Y 暴力も一掃したいですね。

S だのに、どんどんモノが言いにくくなっている。いろいろな情報操作が行われている。それが本当に怖い……。

Y PKO法案を廃案に……の請願も、全部握りつぶされてしまったんですね。

T 法案を検討する十日前に、請願の受理を打ち切ってしまったし。

Y いろんな所で、いろんな形で民主主義がなしくずしにされてるんですね。

T とにかく一人でも二人でも声をあげましょう。署名を集めましょう。
Y 急がなくてはねえ。

(山田花子・斎藤千代・高橋美子)

署名用紙は、すみませんが、できれば一通コピーして、お一人二枚ずつ署名してもらってください。一通は衆議院一通は参議院に提出します。十一月五日開会の臨時国会で、政府は必ず通すと言っています。非常事態です。ぜひ声をあげてください。(他の団体の署名に署名した方でも、文案が違いますので有効です。)

◆へあこら札幌へ

へあこらへ一六六号で紹介された、道警職員募集のポスターに抗議して、道警察署に「公開質問状」を配達証明書付きで送付したへあこら札幌へでは、期限の八月八日の前日七日に、道警のIさんから電話があり「直接会って話したい」ということで、八月二十二日、へあこら札幌へ側七名、道警側二名で話し合いの場をもちました。

道警の回答としては

一、七月二十二日付け北海道新聞記事中、警務課長の発言として「若者の目をひきつけるとともに、警察がどんなに変わっていることを知ってもらいたかった」とあるが、そのような発言はしていない。よって、質問の一、二には答えられない。

二、質問三については、枚数は一万一千点、道内の警察署（派出所・駐在所）、公的掲示板、民間で協力してくれるところに貼った。費用については、全て道費ではないので答えられない。

次いで、こちら側のポスターに関する意見を各人述べましたが、始終「意見は意見として聞きおく」という態度で、あくまで、このポスターは自信作で、現時点においてもまずかったという認識はない」ということなので次ページ

のような抗議文を渡すことになりました。しかし、当日受け取ってもらえず、配達証明付きで郵送しました。

へあこら札幌へ 高橋芳恵

抗議文

北海道警察署 御中

あこら札幌

セクシュアルハラスメント
一万人アンケートをすすめる北海道の会

道警職員募集ポスターについて、抗議します。

安心なまち、安心なまいにち、というコピーとこの図柄との関連性が希薄です。

そのような理念を表現したいのなら、老人でも幼児子どもでもよかったはずです。それを、あえて女性をモデルに配したということは、単にそのことで、ポスターの目的とは関係なく、人目をひくだけの意図であったと思われる。しかもこれは、ミニスカート、ハイヒール、後ろ姿の女性の下半身がきわめて不自然な角度から撮られています。このような図柄は、女性をたんに性的な対象としてしか見ない男の視点そのものです。ポスターの使用目的や対象とは関係なく、女性の体一部分を使うことは「性の商品化」

であり、人格の尊厳を否定するものです。今回の図柄に関しては、性犯罪を減らすためにこれまで煽情的な服装を戒めてきた警察が、まさに、そのことを利用して人目を引きつけようとしたとしか思えません。それほどに、この図柄は心ある女たちにとって不快であり、「痴漢の目」で作られたといっても過言ではないでしょう。

官庁たる警察署が、世の中の風潮に無自覚にのってしまつたことに關して、強く反省をもとめます。ポスター掲示後のいろいろな反響に対しても「とりあえず、意見を聞きおく」という態度に終始し、反省もみられず、今だに「自信作であり、まずかったとは思わない」と言い切ることに對しては一層強く抗議します。

「安心なまち、安心なまいにち」は、単に警察署の努力によつてのみ作られるものではなく、人と人が尊重しあい助け合うことによつて初めて成り立つものと思います。今後のポスター作成にあたっては、人権の尊重に十分注意し、安易に世の風潮に媚びることのないように強く望みます。

連絡先 札幌市中央区南25条西12丁目四一―一五〇三
☎〇一一―五六三―六九七一 高橋芳恵

◆へあごら京都へ

あごら合宿同窓会終わる

夏休みで帰省した夫が棚のさまざまなボトルを眺めて、「またやってほしいな」と言いました。ゴメンナサイ。実は皆さんが持ち込んで下さったアルコールを見てのことです。「久しぶりにのんびりできた」

「楽しかった」

という言葉聞いてホステスに対する思いやりと割り引いても嬉しかった。

「亭主元気で留守がいい。」って、このことかしら。

そもその初めがいつだったのかしら。塚崎さんに「夫が四月から東大に国内留学しているので、下の娘と二人きりの生活」をしている旨の話をした折「合宿もいいわね」という話になりました。

しばらくして、七月十三、四日の都合の問い合わせがあったのでOKの返事をおきました。その後しばらく連絡もなかったので中止かなと思っていると、前々日になって、稲垣さんから十名ほど確認できていること。軽い夕食に寿司の注文とおつまみを用意してほしいという電話をうけました。

そして当日、三々五々の集合となりました。

末木雛子さんが「日朝友好京都婦人代表団」として朝鮮民主主義人民共和国を訪問された時のスライドを持参して参加して下さいました。絵にかいたような、の形容がびつたりの清潔な街、清潔な服装の人たちという印象が強烈でした。

お迎えの車が早すぎてゆっくりお話を聞けなかったのが心残りです。

後はアルコールが入って、それぞれの近況や先天性四肢障害児父母の会の関口知佐子さんのお話、だんだん難しくなる子育ての話、ODAの話など、話はあちこちに交錯しました。

遅れて塚崎さんの友達（上野千鶴子さん）の友達の堀江節子さんが富山から参加されました。いま、グループで新聞の記事は性差別をどう表現、どう助長しているかを分析していること。それが近く「市川基金」を得て出版されるという話がきけて、元気をもらった感じになりました。

遅れて来る人、早く帰る人で全メンバーが顔を揃えることはありませんでした。眠くなった人は和室に、おしゃべり続ける人は居間にと分散して話は続いたのです。

翌朝は眠い目をこすって、差し入れのお菓子とパンの遅い朝食。その後社教センターの女性学研究会・夏のシンポ

ジュームに参加する人もあって、昼前に散会となりました。

「あごろ」の集いは私の交友関係の中では、珍しく私が最年長者になることが多い。ちよびり先輩うらできののも悪くない気持ちです。

ホント！ またやりましょうか！

（中山紀代子）

「見えない戦争」私の見た戦後の湾岸

著者 斎藤千代 定価 1,545円 12月8日発売

硝煙さめやらぬバグダッドの地に、
日本人、民間人として初めて足を踏み入れた
斎藤千代の迫真のイラク・レポート。

「ピンホール爆弾－外壁にはかすり傷ひとつ与えず、中は完膚なきまでに破壊しつくしている。計算しぬいた弾道と破壊力」
ひとつひとつその目で見た戦争の爪痕は、
見えない戦争－近代戦争の恐ろしさを語る。

そして、「イスラエルに行かなければ、中東問題は見えません」という寺沢上人の言葉に突き動かされるかのようにイスラエルへの平和行進に決起。
戦後史の矛盾の焦点、中東問題の核心に迫る。

ピース・ビルグリム－平和の巡礼として、斎藤千代の旅は今も続く。

へあごらは、ギリシャ語でへひろばの意味。

女の生き方、人間の解放について話しあうへひろば。さくのないへひろばです。

経歴も年齢も性別も関係なく、同じ平場で話しあおう。ちがう価値観にも耳傾けよう。

そして、女も、男も、生き生きと、のびやかに生きられる社会を目指そう、

と、一九七二年以来、資料誌『あごら』(年一回刊)を、また一九七七年からは『月刊あごら』を発行してきました。

特定の、管理された情報は氾濫していますが、私たちのほんとうにはしい情報は手に入りにくい現状のなかで、女の側が必要とする情報を集め、資料に基づいて討論したいと願っています。

あなたの地域の、職場の、そしてあなた自身の情報を、どしどしお寄せください。

全国各地のへあごら拠点にもお出かけください。

●へあごらは、どの企業、どの政党、どの宗教とも、いっさい無関係。

会費と、有志の基金と、雑誌の売上代で運営しています。

●全国各地の拠点では、それぞれ、その地域に応じた活動をしています。

●現在の主な活動は、

①拠点を軸にした勉強会や社会活動

②『月刊あごら』および『特集あごら』の発行

③女性の創造力や専門的技術を集めた創造力の銀行(BOC)の運営

④読書室の運営

⑤可能性教室(英語教室、再就職準備講座など)の運営、その他。

●会費は月額六百元(年額七千二百円)、前納制。入会金は不要。

●申し込みとお問い合わせは、

〒160 東京都新宿区新宿一の九の六 あごら事務局(TEL 03-3354-3941)へ

あごら 167号 1991年10月10日 発行

- 編集 あごら松山
●発行所 BOC出版部 〒160東京都新宿区新宿1-9-6 ●03-3354-3941 ●振替東京0-5264
●発行人 くあごら 企画会議 定価 680円(660円+税20円)

